

# 布掛遺跡・大槻神遺跡

一般国道183号（高道路）に係る発掘調査報告書

2007

財団法人 広島県教育事業団

# 布掛遺跡・大槻神遺跡

一般国道183号（高道路）に係る発掘調査報告書



2007

財団法人 広島県教育事業団



1 布掛遺跡空中写真（西から）



2 布掛遺跡出土遺物

## 例　　言

- 1 本書は、平成16年度に調査を実施した一般国道183号（高道路）に係る布掛遺跡・大槻神遺跡（広島県庄原市川西町）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は広島県備北地域事務所から委託を受け、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室の沢元保夫が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は沢元・鍛治益生・伊藤 実を中心に埋蔵文化財調査室の職員が行った。
- 5 本書はⅢ-1-(3)を伊藤 実、その他は鍛治が執筆し、編集は鍛治が行った。
- 6 出土した石製品の石材は、考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。
- 7 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 8 本書に使用した北方位は大槻神遺跡が磁北、その他は平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 9 第1-1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図（庄原）を使用した。
- 10 本事業に係る発掘調査は、従来「地域高規格道路江府三次道路（一般国道183号）道路改良事業に係る報告書」として3冊の報告書を刊行している。本書は同事業に係る発掘調査報告書としては4冊目となるが、事業名が「一般国道183号（高道路）」と変更されたため副題を変更した。

## 目　　次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(2)
III	調査の遺跡	
1	布掛け遺跡	
(1)	調査の概要	(6)
(2)	検出の遺構	(9)
(3)	出土遺物	(40)
(4)	まとめ	(64)
2	大槻神遺跡	
(1)	調査の概要	(71)
(2)	検出の遺構	(72)
(3)	出土遺物	(74)
(4)	まとめ	(75)

## 表 目 次

第1表 遺構計測表 1 .....	(9)
第2表 遺構計測表 2 .....	(13)
第3表 遺構計測表 3 .....	(14)
第4表 遺構計測表 4 .....	(18)
第5表 遺構計測表 5 .....	(21)
第6表 遺構計測表 6 .....	(23)
第7表 遺構計測表 7 .....	(29)
第8表 遺構計測表 8 .....	(30)
第9表 遺構計測表 9 .....	(35)
第10表 遺物観察表 1 .....	(45・46)
第11表 遺物観察表 2 .....	(58)
第12表 布掛遺跡堅穴住居跡計測表(1次・2次) .....	(67)

## 挿 図 目 次

### 1 布掛遺跡

第1-1図 周辺遺跡分布図(1:25,000) .....	(3)
第1-2図 布掛遺跡周辺地形図(1:2,000) .....	(6)
第1-3図 布掛遺跡遺構配置図(1次・2次分)(1:500) .....	(折込)
第1-4図 布掛遺跡(2次)遺構配置図(1:400) .....	(8)
第1-5図 SB II-1実測図(1:60) .....	(10)
第1-6図 SB II-2実測図(1:60) .....	(10)
第1-7図 SB II-3実測図(1:60) .....	(11)
第1-8図 SB II-4実測図(1:60) .....	(13)
第1-9図 SB II-5実測図(1:60) .....	(14)
第1-10図 SB II-6実測図(1:60) .....	(15)
第1-11図 SB II-7実測図(1:60) .....	(16)
第1-12図 SB II-8実測図(1:60) .....	(17)
第1-13図 SB II-9実測図(1:60) .....	(18)
第1-14図 SB II-10実測図(1:60) .....	(19)
第1-15図 SB II-11実測図(1:60) .....	(20)
第1-16図 SB II-12実測図(1:60) .....	(22)
第1-17図 SB II-13～15実測図(1:60) .....	(23)
第1-18図 掘立柱建物跡II-1・10実測図(1:60) .....	(25)
第1-19図 掘立柱建物跡II-2実測図(1:60) .....	(26)

第1-20図	掘立柱建物跡II-3・6・7・9実測図(1:60) .....	(折込)
第1-21図	掘立柱建物跡II-4・5実測図(1:60) .....	(27)
第1-22図	掘立柱建物跡II-8実測図(1:60) .....	(29)
第1-23図	SK II-1~6実測図(1:40) .....	(31)
第1-24図	SK II-7~13実測図(1:40) .....	(32)
第1-25図	SK II-14~16・SX II-1・2実測図(1:40) .....	(33)
第1-26図	SX II-3~5実測図(1:40) .....	(34)
第1-27図	SD II-1・2・17・18実測図(1:80) .....	(36)
第1-28図	SD II-3~7・15実測図(1:80) .....	(37)
第1-29図	SD II-8~14実測図(1:80) .....	(38)
第1-30図	SD II-16・19~21実測図(1:80) .....	(39)
第1-31図	出土遺物実測図I(1:3) .....	(47)
第1-32図	出土遺物実測図II(1:3) .....	(48)
第1-33図	出土遺物実測図III(1:3) .....	(49)
第1-34図	出土遺物実測図IV(1:3) .....	(50)
第1-35図	出土遺物実測図V(1:3) .....	(51)
第1-36図	出土遺物実測図VI(1:3) .....	(52)
第1-37図	出土遺物実測図VII(1:3) .....	(53)
第1-38図	出土遺物実測図VIII(1:3) .....	(54)
第1-39図	出土遺物実測図IX(1:3) .....	(55)
第1-40図	出土遺物実測図X(1:3) .....	(56)
第1-41図	出土遺物実測図XI(1:2) .....	(56)
第1-42図	出土遺物実測図XII(1:3) .....	(59)
第1-43図	出土遺物実測図XIII(1:4) .....	(60)
第1-44図	出土遺物実測図XIV(1:4) .....	(61)
第1-45図	出土遺物実測図XV(1:4, 1:6) .....	(62)
第1-46図	出土遺物実測図XVI(1:6) .....	(63)
第1-47図	布掛遺跡集落変遷図(1:600) .....	(折込)

## 2 大槻神遺跡

第2-1図	大槻神遺跡周辺地形図(1:1,000) .....	(71)
第2-2図	大槻神遺跡遺構配置図(1:100) .....	(72)
第2-3図	SB 1・SK 1実測図(1:40) .....	(73)
第2-4図	SD 1実測図(1:40) .....	(73)
第2-5図	出土遺物実測図I(1:3, 1:6) .....	(74)

## 図版目次

### 布掛遺跡

- 卷頭図版 1 布掛け跡空中写真（西から）  
2 布掛け跡出土遺物
- 図版 1-1 a 布掛け跡調査前近景（南西から）  
b SB II-1 床面検出状況（北東から）  
c SB II-2 床面検出状況（南西から）
- 図版 1-2 a SB II-2 遺物出土状況  
b SB II-3 床面検出状況（南西から）  
c SB II-3 遺物出土状況
- 図版 1-3 a SB II-4 床面検出状況（北西から）  
b SB II-4 炉内遺物出土状況  
c SB II-5 床面検出状況（南西から）
- 図版 1-4 a SB II-6・8 床面検出状況（南西から）  
b SB II-6 床面検出状況（南西から）  
c SB II-6 炭化物出土状況
- 図版 1-5 a SB II-7 床面検出状況（南西から）  
b SB II-8 床面検出状況（南西から）  
c SB II-8 遺物出土状況
- 図版 1-6 a SB II-9 床面検出状況（南西から）  
b SB II-9 遺物出土状況  
c SB II-10 床面検出状況（南西から）
- 図版 1-7 a SB II-10 カマド検出状況（南西から）  
b SB II-10 カマド土層断面（南東から）  
c SB II-10 遺物出土状況
- 図版 1-8 a SB II-11 床面検出状況（南西から）  
b SB II-12 床面検出状況（東から）  
c SB II-12 遺物出土状況
- 図版 1-9 a SB II-13 床面検出状況（南東から）  
b SB II-14 床面検出状況（南東から）  
c SB II-15 床面検出状況（南から）
- 図版 1-10 a 掘立柱建物跡 II-1 完掘状況（南西から）  
b 掘立柱建物跡 II-2 完掘状況（北から）  
c 掘立柱建物跡 II-3 完掘状況（北東から）
- 図版 1-11 a 掘立柱建物跡 II-4 完掘状況（南西から）
- b 掘立柱建物跡 II-5 完掘状況（南西から）  
c 掘立柱建物跡 II-3・6・7・9 完掘状況（南西から）
- 図版 1-12 a 掘立柱建物跡 II-8 完掘状況（南西から）  
b 掘立柱建物跡 II-10 完掘状況（南西から）  
c SK II-1 完掘状況（南西から）
- 図版 1-13 a SK II-2 完掘状況（南東から）  
b SK II-3 完掘状況（南から）  
c SK II-4 完掘状況（北から）
- 図版 1-14 a SK II-5 完掘状況（南から）  
b SK II-6 完掘状況（南東から）  
c SK II-7 完掘状況（南から）
- 図版 1-15 a SK II-8 完掘状況（南東から）  
b SK II-9 完掘状況（北西から）  
c SK II-10 完掘状況（西から）
- 図版 1-16 a SK II-11 完掘状況（南から）  
b SK II-12 完掘状況（南から）  
c SK II-13 完掘状況（南から）
- 図版 1-17 a SK II-14 完掘状況（西から）  
b SK II-15 完掘状況（南西から）  
c SK II-16 完掘状況（北西から）
- 図版 1-18 a SD II-1 完掘状況（南東から）  
b SD II-2 完掘状況（南西から）  
c SD II-3 完掘状況（南西から）
- 図版 1-19 a SD II-4 完掘状況（南東から）  
b SD II-5 完掘状況（南東から）  
c SD II-6 完掘状況（南東から）
- 図版 1-20 a SD II-7 完掘状況（南東から）  
b SD II-8 完掘状況（南東から）  
c SD II-9・10 完掘状況（南東から）
- 図版 1-21 a SD II-11 完掘状況（南東から）  
b SD II-12 完掘状況（南東から）  
c SD II-13 完掘状況（南東から）
- 図版 1-22 a SD II-14 完掘状況（南東から）

- b SD II - 15 完掘状況（南東から）
  - c SD II - 16 完掘状況（北から）
- 図版 1 - 23 a SD II - 17 完掘状況（南東から）  
b SD II - 18 完掘状況（南東から）  
c SD II - 19 完掘状況（南東から）
- 図版 1 - 24 a SD II - 20 完掘状況（南東から）  
b SD II - 21 完掘状況（北から）  
c SX II - 2 完掘状況（南東から）
- 図版 1 - 25 a SX II - 3 完掘状況（南東から）  
b SX II - 4 完掘状況（南東から）  
c SX II - 5 完掘状況（東から）
- 図版 1 - 26 出土遺物 1
- 図版 1 - 27 出土遺物 2
- 図版 1 - 28 出土遺物 3
- 図版 1 - 29 出土遺物 4
- 図版 1 - 30 出土遺物 5
- 図版 1 - 31 出土遺物 6
- 図版 1 - 32 出土遺物 7
- 図版 1 - 33 出土遺物 8

### 大槻神遺跡

- 図版 2 - 1 a 遺跡遠景（北東から）  
b 調査前全景（西から）  
c 調査前近景（南から）
- 図版 2 - 2 a SB 1 完掘状況（南西から）  
b 同上（北から）  
c SD 1 完掘状況（南西から）
- 図版 2 - 3 出土遺物 1

## I はじめに

布掛遺跡及び大槻神遺跡の発掘調査は、一般国道183号(高道路)に係るものである。本事業は、自動車専用道路と同程度の規格性の高い道路を建設するもので、当地域のみならず周辺地域の交通事情の改善を図る目的のために建設されるものである。

広島県庄原土木事務所(現広島県備北地域事務所建設局庄原支局。以下、「庄原土木事務所」という。)は、平成9(1997)年5月22日、当該事業予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて庄原市教育委員会に協議した。庄原市教育委員会及び広島県教育委員会(以下、「県教委」という。)はこれを受けて現地踏査及び試掘調査を順次実施し、平成12年9月27日、庄原土木事務所に対して、事業予定地内的一部の試掘調査の結果、布掛遺跡等が存在する旨を回答した。これらの遺跡の取扱いについて県教委、庄原市教育委員会及び庄原土木事務所は協議を重ねたが、路線変更等による現状保存は不可能との結論に達した。

布掛遺跡の発掘調査に関しては、工事工程等の都合により遺跡全体を一時に調査することが困難なことから、まず北東側半分について調査を実施することとなり、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが平成13年4月9日から9月21日まで発掘調査を実施した。

残りの南側部分については、平成15年11月に試掘調査が行われ、南側の部分にも遺跡が存在することが確認された。これによって平成15年11月24日付で広島県備北地域事務所(以下、「地域事務所」という。)から「埋蔵文化財発掘の通知(土木工事の通知)」が県教委あてに提出され、県教委は平成16年1月19日付で、地域事務所あてに、工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。このため、地域事務所は平成16年3月22日付で財団法人広島県教育事業団に発掘調査の依頼を出し、事業団は同年5月31日から11月5日まで発掘調査を実施した。

一方、大槻神遺跡については現地踏査の際、試掘調査が必要と認められた箇所であった。このため平成16年10月に試掘調査が実施され、その結果遺跡であることが確認され、県教委はこの旨を同年12月28日付で地域事務所に回答した。その後、県教委と地域事務所は協議を行ったが、現状保存は困難との結論に達したため、地域事務所は平成17年1月11日付で「埋蔵文化財発掘の通知(土木工事の通知)」を県教委あてに提出した。県教委は調査面積が狭く、遺構の密度が希薄であることが予想されたことから平成17年2月1日から2月4日までの間、庄原市教育委員会の協力を得ながら発掘調査を実施した。

本報告書は、このような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり、当該地域の歴史解明のための一助となれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、広島県備北地域事務所建設局庄原支局、庄原市教育委員会及び地域の方々の多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

## II 位置と環境

### 1 位置と環境

布掛遺跡が所在する庄原市は、平成17年、旧比婆郡を主体として旧甲奴郡の一部の町を合併するいわゆる「平成の大合併」によって、北側は直接島根県や鳥取県、また東側は岡山県と県境を接する広島県内最大の市域を有し、43,000人余の人口を抱える地方公共団体となった。

さて、布掛遺跡が所在する庄原市川西町周辺から庄原市街地にかけての地域には、旧石器時代から縄文・弥生・古墳・中世にかけての各時代の遺跡が数多く知られている。このうち、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡がもっとも多く、とくに弥生時代中期後半以降、遺跡が急増する傾向にある。このような傾向は、広島県内の各地域に広く認められるもので、弥生時代中期以降各集落の生産基盤の拡大が遺跡の拡大・拡散傾向を生んだ大きな要因として考えられている。

庄原市域における弥生時代中期以降の集落遺跡を中心として遺跡を概観すると、中期前半頃から市域内の遺跡数が増加し始める。また、中期後半になると県北地域の強い地域性を示している塩町式土器が出土する遺跡が増加し、それらの遺跡としては和田原遺跡（C・D地点）<sup>(1)</sup>、宮脇遺跡<sup>(2)</sup>、大原1号遺跡<sup>(3)</sup>、和田原遺跡（D地点）、陰地上組遺跡<sup>(4)</sup>、竜王堂遺跡<sup>(5)</sup>などがある。

弥生時代後期になると山陰地域の影響を受けた土器が出現するようになり、古墳時代初頭頃までこの傾向が継続する。この時期の遺跡としては、西山遺跡<sup>(6)</sup>、大昌山古墳群<sup>(7)</sup>、浅谷山東遺跡<sup>(8)</sup>、妙見山遺跡<sup>(9)</sup>などが知られている。

古墳時代になると山陰の影響のみならず、畿内系の土器群を伴った遺跡が出現していく。竜王堂遺跡や妙見山遺跡<sup>(9)</sup>では、山陰系の土器と畿内系の土器とが混在する状況を呈している。

#### 註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』 1988年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『宮脇遺跡発掘調査報告書—地域高規格道路江府三次道路（一般国道183号）道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)一』 2004年
- (3) 広島県教育委員会「大原1号遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『陰地上組遺跡—庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業（木戸工区）に伴う発掘調査報告書一』 1984年
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『竜王堂遺跡』 1994年
- (6) 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗—国道183号線改良工事に伴う文化財発掘調査報告一』 1982年
- (7) 広島県教育委員会「大唱山古墳群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東A地点遺跡』 1990年
- (9) 庄原市教育委員会『妙見山遺跡』 1999年



第1-1図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

- |           |           |          |           |           |           |
|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 布掛遺跡    | 2 大槻神道跡   | 3 大仙1号遺跡 | 4 大仙2号遺跡  | 5 追田山遺跡   | 6 境ヶ谷北古墳群 |
| 7 境ヶ谷遺跡   | 8 境ヶ谷南古墳群 | 9 唐櫃古墳   | 10 大歳古墳群  | 11 山根古墳群  | 12 寄藤山古墳群 |
| 13 佐田峠墳墓群 | 14 佐田谷墳墓群 | 15 矢崎古墳  | 16 西念寺遺跡  | 17 鐘鉄原古墳群 | 18 広政古墳群  |
| 19 柳谷古墳群  | 20 大坪峠古墳  | 21 永末古墳群 | 22 狐ヶ谷古墳群 | 23 伝神福寺跡  | 24 隙地古墳群  |
| 25 殿畠山古墳群 | 26 妙見山遺跡  | 27 永宗遺跡  | 28 牛塚古墳群  | 29 小和田遺跡  | 30 西山遺跡   |
| 31 和田原遺跡群 | 32 和田原古墳群 | 33 宮脇遺跡  |           |           |           |

## 2 布掛遺跡の既往の調査

布掛遺跡は、西城川右岸の河岸段丘上の南西に面する斜面にあり、日当たりの良好な場所である。遺跡の標高は300m付近にあり、西城川との比高は約30mである。また、今回発掘調査を実施した部分は平成13年度に発掘調査を実施した第1次調査地域の南西側にあたる。

前回の平成13年度の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、土坑、溝状遺構などの各種遺構を検出した。

このうち竪穴住居跡は41軒で、段丘面上に3段に分かれた状況で検出した。また、重複した住居跡が斜面上方を中心には数多くあるうえ、各住居跡も数回の建て替えが行われたことが明らかとなった。出土した遺物などから、集落の継続年代は弥生時代中期から古墳時代前半にかけてのものと推定された。

また、掘立柱建物跡は調査区の中段中央当たりから集中して検出した。棟方向を等高線と平行させたものが多く、規模としては1間×1間あるいは1間×2間程度と小規模のものが多い。掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と重複するものが少ないとから、住居的な機能を有するのではなく、倉庫的な性格のものであったと考えられた。

一方、段状遺構は段丘斜面の南側に位置し、斜面上方側を削り出して大きな平坦面を造成したもので、出土した土器などから中世から近世にかけての遺構であることが判明した。このうち段状遺構1からは比較的規模の大きな掘立柱建物跡が1棟検出されており、中世に住居的な性格の遺構が存在していたものと思われた。

このように第1次調査においては、弥生時代後期以降古墳時代前半にかけての数多くの住居跡や掘立柱建物跡を検出したが、その集落の時間的変遷については、出土遺物の分析等によりおおむね斜面下方から集落が形成され始め、次第に丘陵頂部へと移り変わっていった状況が明らかとなった。

### III 調査の遺跡

1 布掛遺跡

2 大槻神遺跡

# 1 布掛遺跡

## (1) 調査の概要

今回の調査区は、平成13年度調査区（第1次調査区）の南西側斜面にあたる。前回の調査区同様、遺構検出面までには表土層及び黒色土が厚く堆積していることが想定されたため、表土掘削は重機を使用して行い、その後遺構の検出作業を行うこととした。

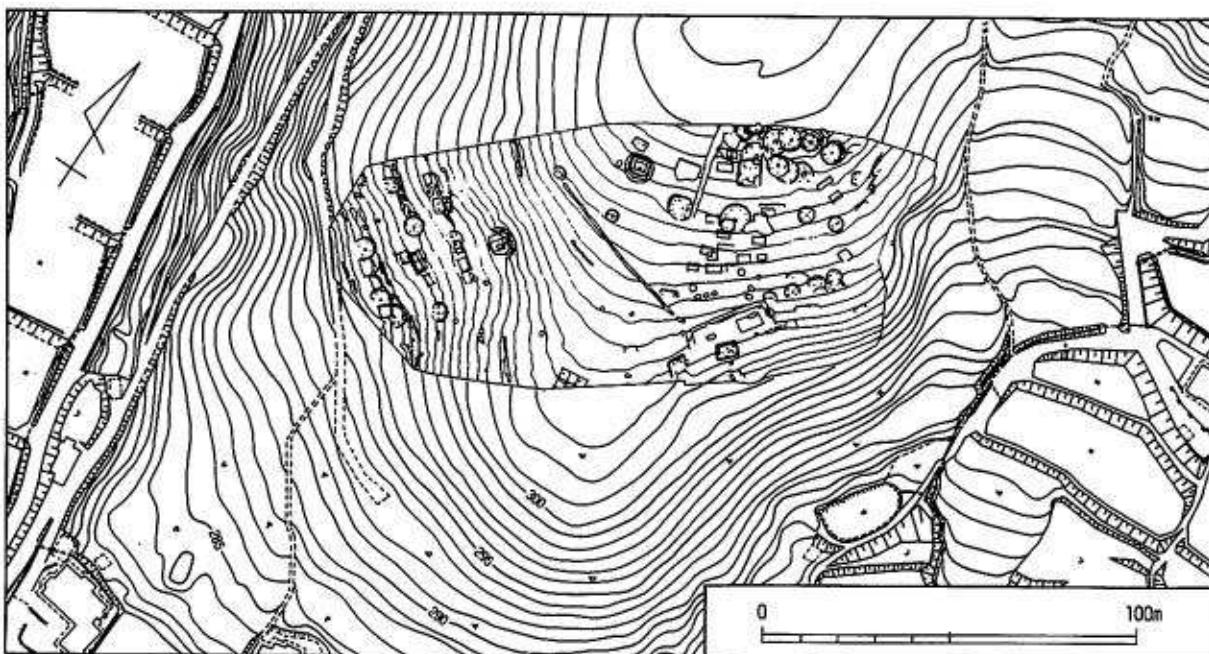
調査の結果、竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡10棟、土坑16基、溝状遺構21条、性格不明の遺構5基等を検出した。

このうち竪穴住居跡には平面円形のもの7軒、方形のもの8軒があり、斜面の等高線に沿って3段に分かれた状況で検出した。多くの住居跡には貼床を施した痕跡が残っていたが、斜面に作られたため斜面下方側の床面はその多くが流失した状況にあった。また、調査区のもっとも下方側の4軒の竪穴住居跡に重複関係が認められたが、他の住居跡には重複関係は認められなかった。

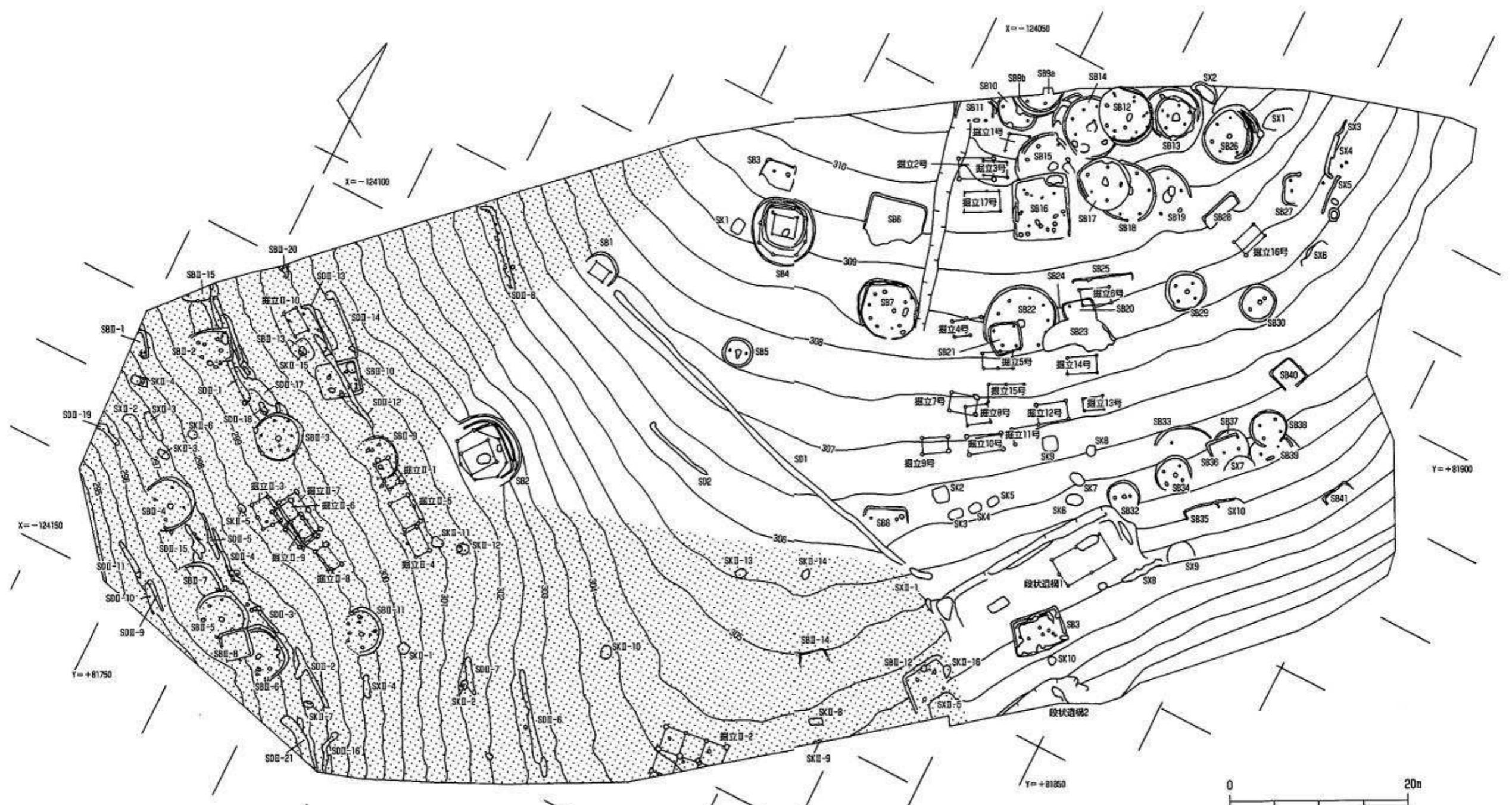
一方、15軒の竪穴住居跡のうち、拡張が確認されたものはわずか1軒に過ぎず、1次調査の竪穴住居跡のなかに立て替え、拡張が認められたものが比較的多く存在した状況とはやや異なっている。

また、15軒の竪穴住居跡の床面積（推定分を含む。）は15～25m<sup>2</sup>で、第1次調査区と比較した場合、その大半が中規模程度の住居と考えられる。

ところで、SB II-8と呼称する小型の方形竪穴住居跡は2本柱構造で、出土した遺物に小型の壺形土器、高杯、ミニチュア土器などがあり、通常の住居とは構造的にも、また遺物的にもやや異なる様相を示している。このことからこの住居跡が何らかの祭祀に関わる遺構であった可能性が考えられる。



第1-2図 布掛遺跡周辺地形図(1:2,000)



第1-3図 布掛遺跡遺構配図(1次・2次分)(1:500)(アミ目:2次分)

掘立柱建物跡10棟のうち1間×1間のものが6棟、1間×2間のものが3棟で、小規模のものがほとんどである。また、位置的には調査区中央付近に集中して検出した。そのほとんどは竪穴住居跡とは重複することはないことから、掘立柱建物跡については住居に付設された倉庫的性格のものと考えられる。このような状況は第1次調査区検出の掘立柱建物跡と共通した状況であり、両集落間の居住空間とそれに付属する倉庫的施設の配置等の空間利用のあり方に共通した傾向があることが窺える。

また、調査区際で検出した掘立柱建物跡II-2は少なくとも3間×2間以上の総柱の建物跡で、他の掘立柱建物跡とは規模的に大きく異なっており、その性格も倉庫的施設以外の機能を有していたものと想定される。

土坑については平面形が方形のものや円形のもので、不整形のものが多い。その一部については風倒木痕と考えられるが、その大半については性格が不明なものである。

また、21条確認した溝状遺構は、そのほとんどが等高線に沿って掘られたもので、長さや深さなどの規模はまちまちである。溝状遺構の中には、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の斜面上方側に掘削されたものがあり、これらの住居や倉庫に付随する遺構であった可能性が考えられる。

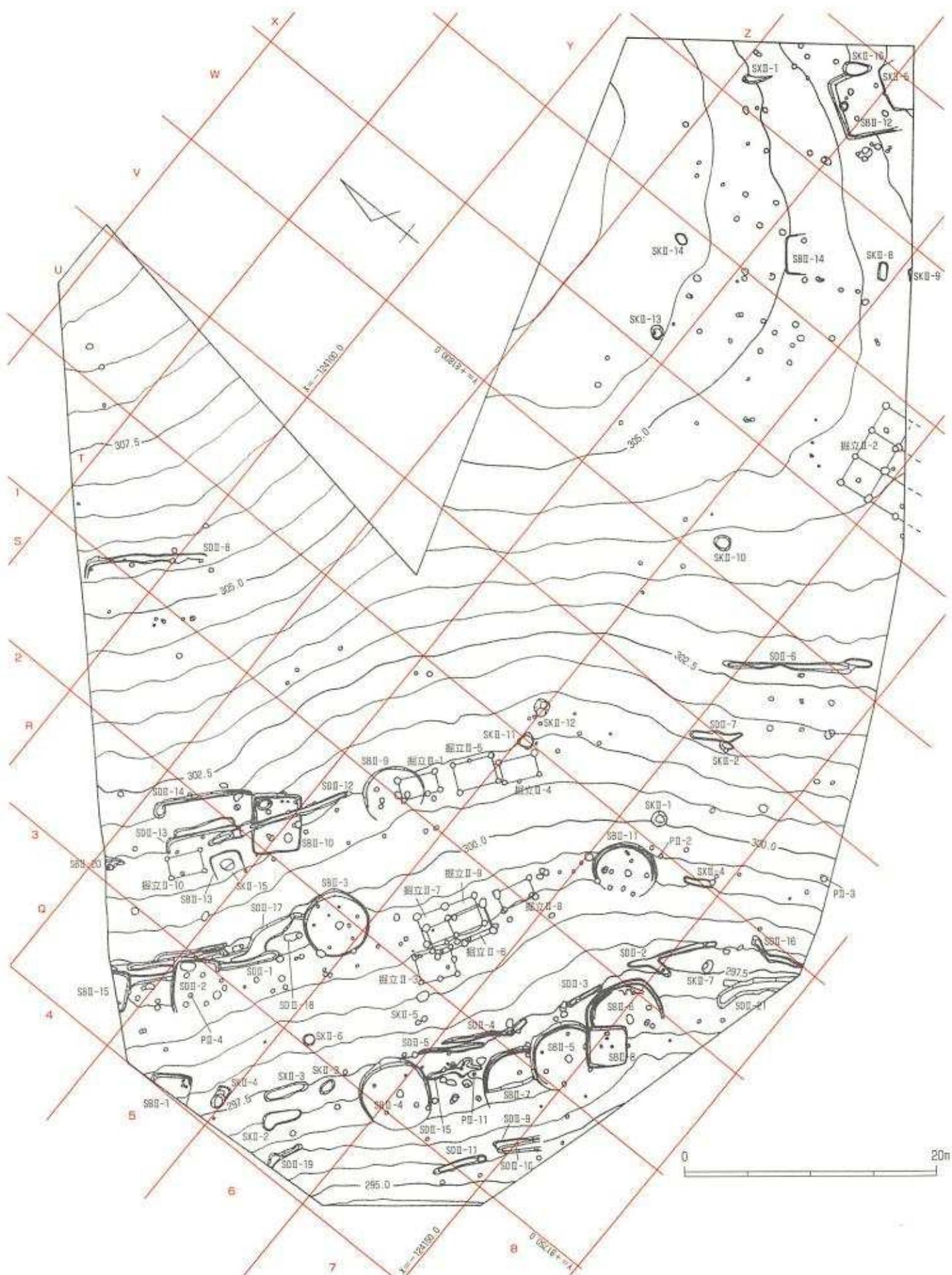
各遺構の内外から出土した遺物としては、弥生時代後期から古墳時代中期頃にかけての弥生土器・土師器などの土器類のほか、石斧・砥石・磨石などの石製品、平鋸先・鉄鎌・鉄鏁などの鉄製品・鉄滓などがある。

なお、各遺構の存続時期については、検出遺構や出土遺物などの状況から弥生時代後期から古墳時代中頃と考えられるが、遺跡の最盛期としてはもっと多くの所属年代を示す遺構を検出した古墳時代初頭頃と考えられる。

以上、今回の調査成果について概要を述べたが、第1次調査区と比較した場合、竪穴住居跡が段状に分かれて分布することや、掘立柱建物跡が集落の中にあって住居空間とは別に集落の中央の空間に存在するなど、その遺構の性格と分布のあり方や遺跡の存続時期などに共通点が多く認められる。

その一方で、第1次調査区検出のSD1を境として両集落間には遺構が存在していない一定の空白地帯がある。このことから両集落を形成した集団は、互いに独立した集団であったと考えることが妥当であろう。

両集落を形成した集団が単純に同一の集団と考えることは困難であるが、両集団が同一丘陵上に、また同一時期に集落を形成しているという事実から、その集団関係が地縁的または血縁的結び付きを有する集団と考えることは妥当であり、両集団間に母集団とその派生集団という関係にあったことを窺わせよう。



第1-4図 布掛け道跡(2次)造構配図(1:400)

## (2) 検出の遺構

### 1 竪穴住居跡

#### SB II-1 (第1-5図、図版1-1・b)

3段に分けられる住居跡群のうち、もっとも最下段に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。調査区際に位置することから、住居跡の大半は調査区外にあり、斜面上方側と北西壁の一部が残存するのみである。残存する北東壁の規模は長さ3.2m、壁溝底面からの高さは約20cmである。また、壁溝は幅15~20cmで、浅い「U」字状を呈する。

床面はやや南西方向に傾斜しており、残存床面でピット3を検出したがいずれも浅いことから柱穴とは認められない。また、調査区際で床面が焼けた痕跡を検出したが、くぼむ状況ではないことから、炉跡とは考えがたい。

出土遺物には、古墳時代中・後期頃の土師器(椀)(第1-31図1・2、図版1-26)などがある。

#### SB II-2 (第1-6図、図版1-1・c、1-2・a)

中段に立地する住居跡群のうち調査区西際に位置する4本柱の方形の竪穴住居跡で、SD II-1・SD II-17と重複し、南西方向の住居跡床面は流失している。住居跡の壁は東隅から北西辺にかけて残存しており、北東辺で長さ3.5m、深さ50cm、北西辺で長さ約4m、深さ35cm残存する。壁溝は幅約15cm、深さ約10cmで、浅い「U」字ないし「V」字状を呈する。床面はほぼ平坦で、住居跡中央で4本の主柱穴(P1~P4)を検出した。

柱穴の規模は径30~40cm、深さ40~50cmの円形で、柱穴間の距離はP1~P2=1.3m、P2~P3=2.3m、P3~P4=1.55m、P4~P1=2.3mである。

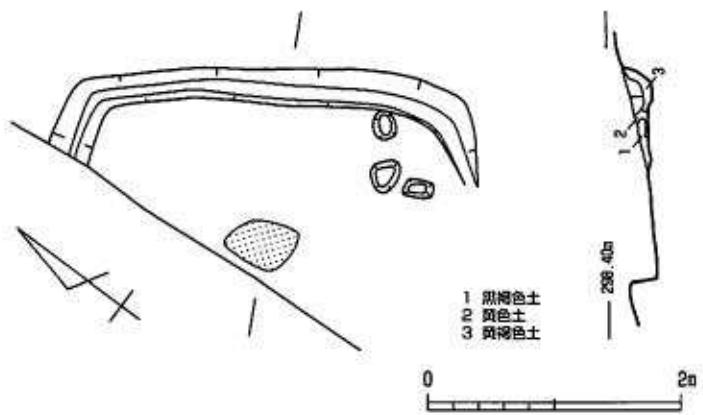
住居跡の東隅から南東辺にかけて焼土と集石部分を出した。焼土は厚さ20cmほどの堆積が認められ、集石についてはカマドのような石組みの遺構となるものではない。

また、P4~P1間の床面で焼けた痕跡を確認した。

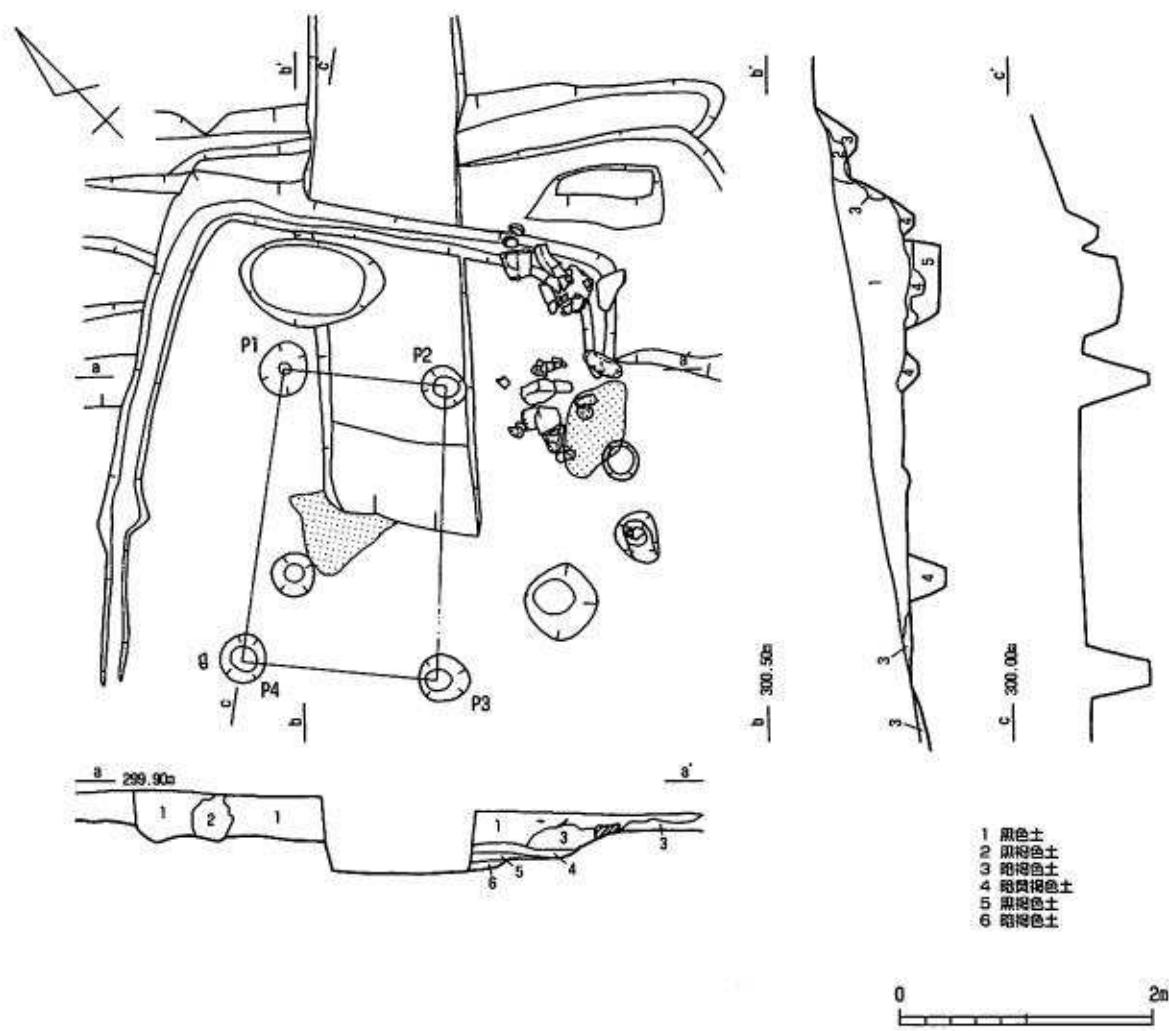
出土遺物には、古墳時代中・後期頃の土師器(壺、高杯、瓶、椀)(第1-31・32図3~15、図版1-26・27)、鉄製品(鍔先)(第1-41図130、図版1-32)、鉄滓、石製品(砥石、敲石)(第1-42・44図134・148、図版1-33)などが焼土と集石付近に集中して出土した。

遺構番号	規 模			時 期	位 置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 別	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱 数				
SB II-1	方・竪穴	—	—	古・中~後	下段	土師器(椀・壺)	遺物少ない
SB II-2	方・竪穴	14.7	2	古・中~後	中段	弥生土器(壺・甌)、土師器(甌・瓶・高杯・椀・手づくね椀)、鐵鍔先、鐵滓、石製品(砥石、敲石)	2箇所で集石部分を検出

第1表 遺構計測表1



第1-5図 SB II-1 実測図 (1:60)

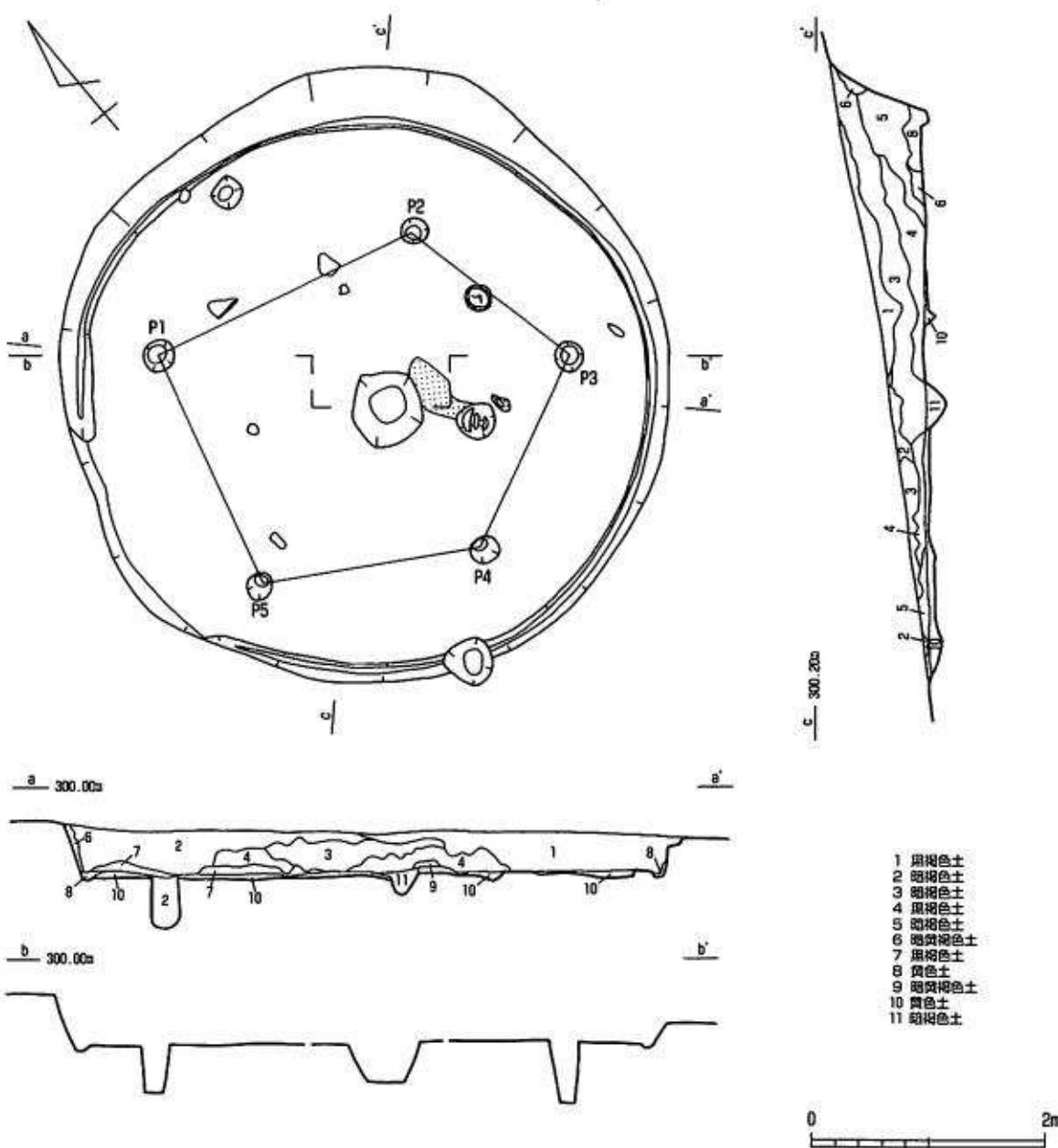


第1-6図 SB II-2 実測図 (1:60) (アミ目: 烧土)

### SB II-3 (第1-7図、図版1-2・b, c)

中段に位置する住居跡群のうち中央付近に立地する5本柱と考えられる円形の竪穴住居跡である。規模は直径5.3~5.4m、壁面は斜面上方側の北東側の残存状況がもっとも良好で、高さ85cmで、南西側は壁溝が残存するだけである。壁溝は幅4~10cm、深さは4~8cmで、深い「U」字ないし逆台形を呈する。また壁溝は全周するのではなく、西側の一部分が切れている。

床面はほぼ平坦で、床面の中央から南西半分には厚さ4~10cmの黄色土の貼床が認められる。また、床面中央で炉跡を検出した。規模は径約60cmの円形で、深さは約10cmで、焼土が充填していた。この炉跡に近接して焼土塊を検出した。



第1-7図 SB II-3 実測図(1:60)(アミ目:焼土)

主柱穴は5本（P 1～P 5）で、規模は径25～30cm、深さ40～55cmの円形で、柱穴間の距離はP 1～P 2 - 2.4m, P 2～P 3 - 1.7m, P 3～P 4 - 1.8m, P 4～P 5 - 1.9m, P 5～P 1 - 2.15mである。

出土遺物には、弥生時代後期後半の弥生土器（甕、高杯）（第1-32図16～19、図版1-27）、石製品（台石、敲石）（第1-43～45図139・140・143・149・159・160、図版1-33）がある。

#### SB II-4（第1-8図、図版1-3・a, b）

最下段の住居跡群の中央西端に位置する4本柱の円形の竪穴住居跡で、斜面下方側の南西方向では床面が流失している。規模は径5.5mほどで、壁面はもっとも残存状況が良好な北西壁で高さ約50cmである。壁溝は床面が流失している北西側では確認できなかったが、残存部分では幅5～12cm、深さは4～6cmで、浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、中央から南側にかけて厚さ3～10cmほどの黄色土による貼床が認められる。床面のほぼ中央には長径60cm、短径50cm、深さ20cmほどの炉跡があり、その北東側の2箇所で焼土を検出した。

主柱穴は4本（P 1～P 4）で、規模は径22～30cm、深さ約50cmの円形で、柱穴間の距離はP 1～P 2 - 2.65m, P 2～P 3 - 2.45m, P 3～P 4 - 2.5m, P 4～P 1 - 2.3mである。

出土遺物には、弥生時代後期後半の弥生土器（甕、壺、鉢）（第1-32図20～26、図版1-27）、石製品（台石、敲石）（第1-44・45図150～152・156・157・162、図版1-33）がある。

#### SB II-5（第1-9図、図版1-3・c）

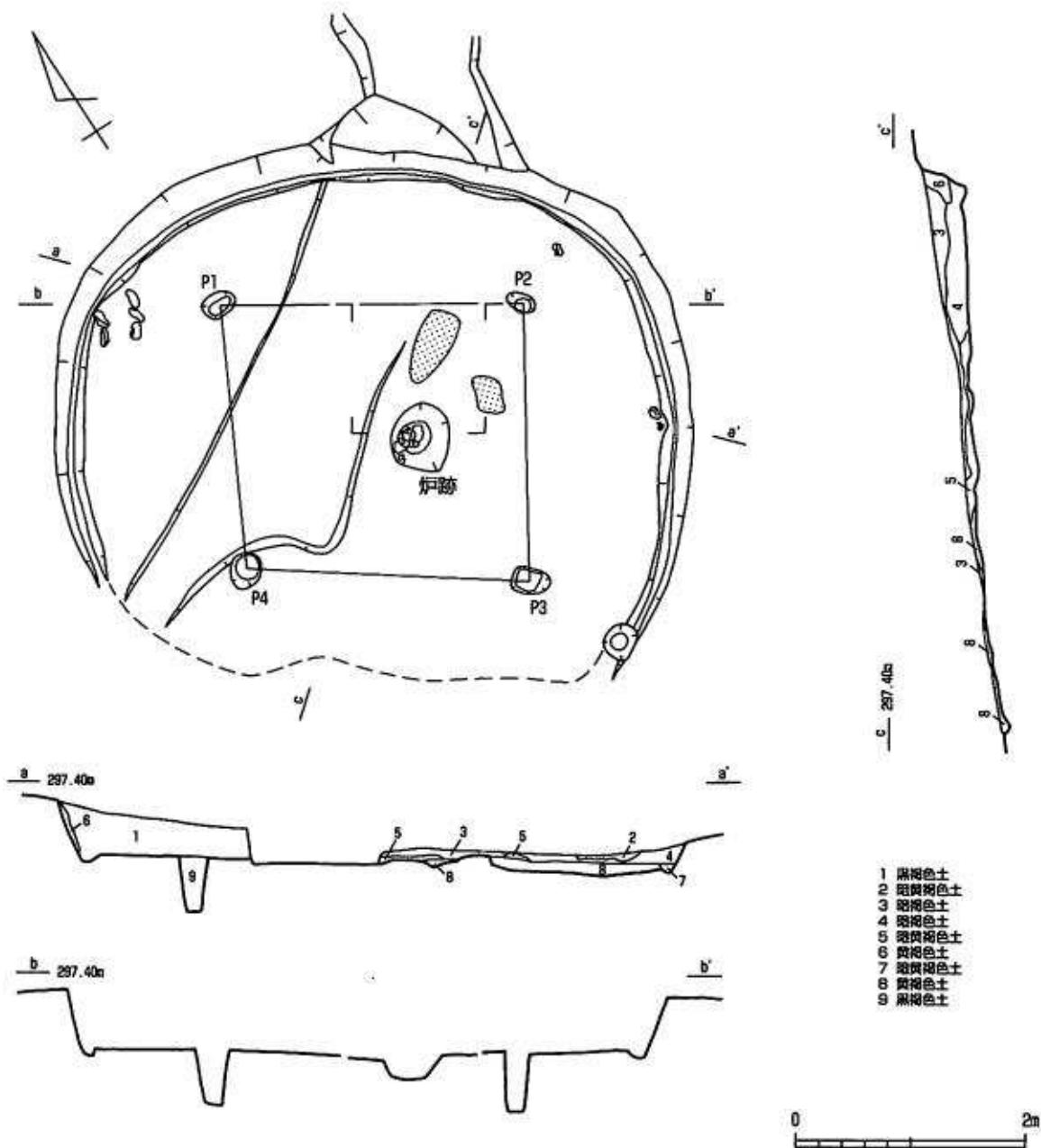
最下段の住居跡群のほぼ中央に位置し、SB II-6～8と重複する6本柱の円形の竪穴住居跡で、斜面下方側の南方向では床面が流失している。規模は径5.7mほどで、壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約70cmである。壁溝は床面が流失している南側では確認できなかつたが、残存部分では幅10～20cm、深さは5～10cmで、浅い逆台形を呈する。

床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ5～10cmほどの黄色土による貼床が認められる。床面のほぼ中央には直径60cm、深さ35cmほどの炉跡があり、その北西側と北東側の2箇所で焼土を検出した。

主柱穴は6本（P 1～P 6）で、規模は径20～40cm、深さ約50cmの円形で、柱穴間の距離はP 1～P 2 - 2.5m, P 2～P 3 - 1.7m, P 3～P 4 - 1.9m, P 4～P 5 - 2.3m, P 5～P 6 - 1.7m, P 6～P 1 - 1.65mである。

出土遺物には、弥生時代後期後半の弥生土器（甕、壺、高杯、大型甕、大型器台）（第1-33図27～36、図版1-27・28）、石製品（台石、敲石）（第1-44・46図153・154・165、図版1-33）がある。

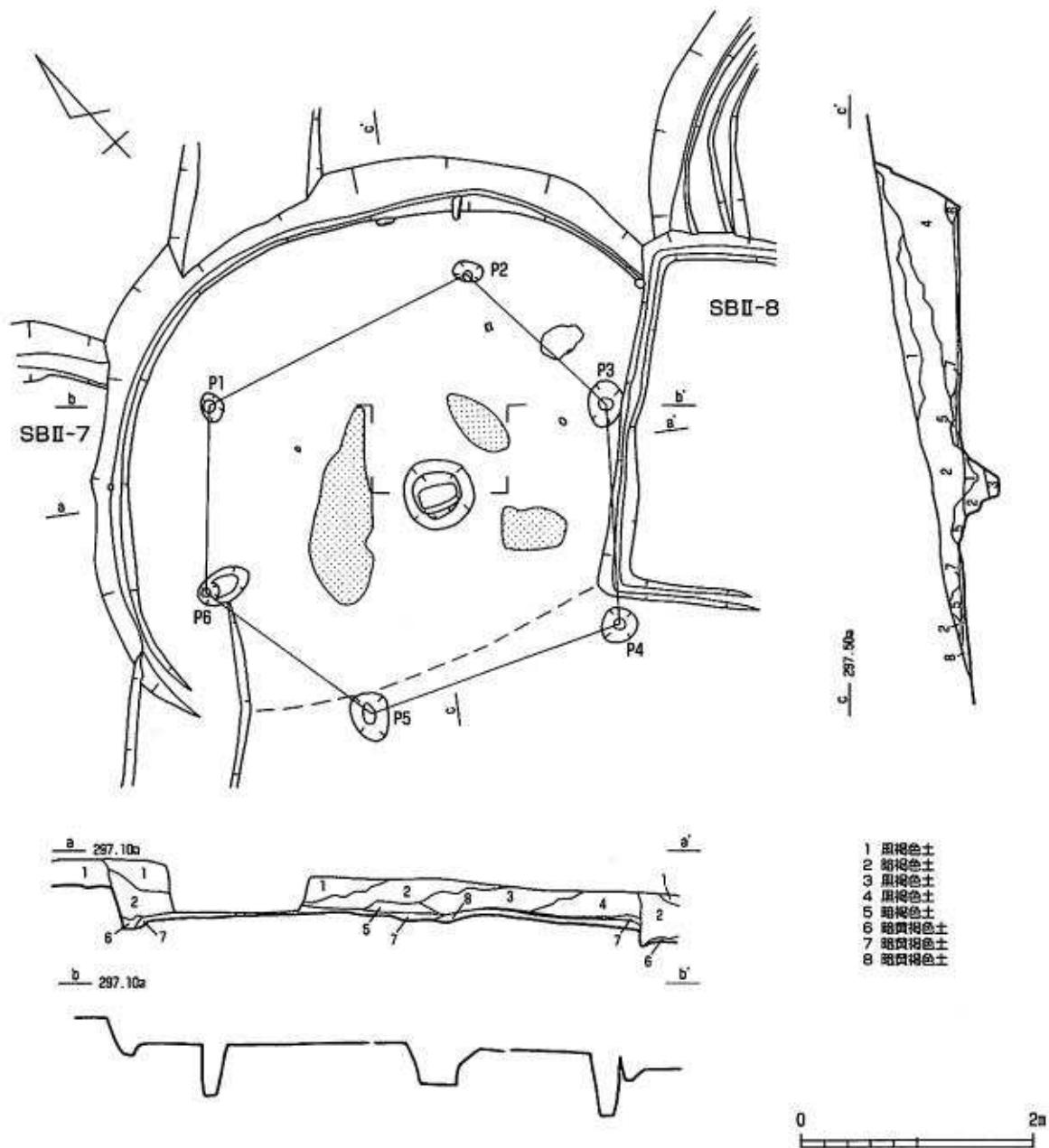
なお、重複関係はSB II-7→5→8である。



第1-8図 SB II-4実測図 (1:60) (アミ目: 焼土)

遺構番号	規 模			時期	位置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 別	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱数				
SB II-3	円・竪穴	17.6	5	弥・後・後	中段	弥生土器(甕・高杯・鼓形器台) 台石, 敷石	貼床あり
SB II-4	円・竪穴	19.7	4	弥・後・後	下段	弥生土器(甕・壺・鉢), 台石, 敷石	貼床あり

第2表 遺構計測表2



遺構番号	規 模			時期	位置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 別	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱数				
SB II - 5	円・竪穴	20.5	6	弥・後・後	下段	弥生土器(甕・壺・高杯), 大型瓶, 大型器台, 台石, 礫石	貼床あり
SB II - 6	円・竪穴	24.1	6	古・前	下段	弥生土器(甕), 古式土師器(壺・高杯・線刻土器), 鉄タガネ, 礫石, 礫石	貼床あり, 炭化材出土

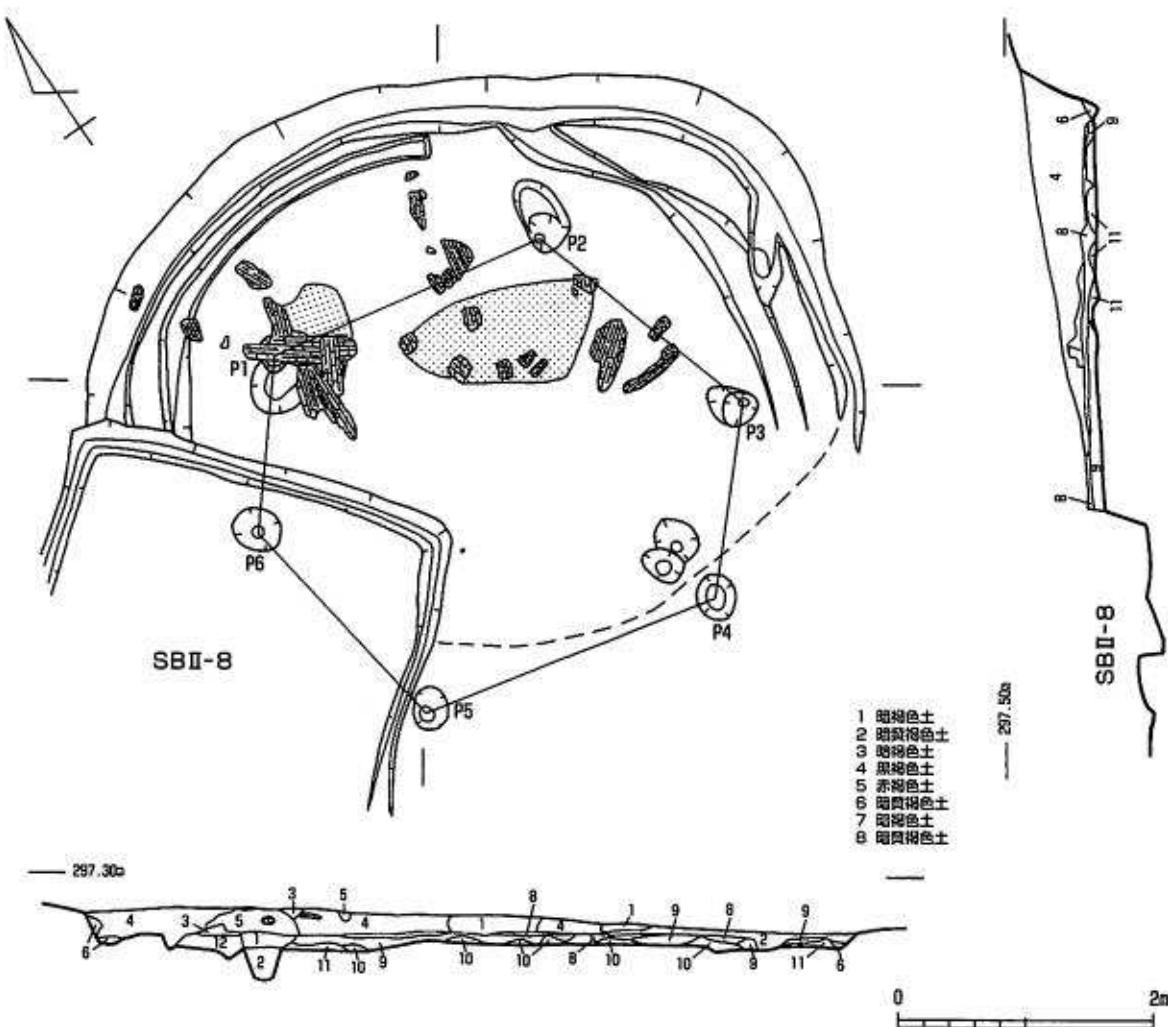
第3表 遺構計測表3

### SB II-6 (第1-10図、図版1-4・a~c)

最下段の住居跡群の中央の南東端に位置し、SB II-5とSB II-8と重複する6本柱の円形の竪穴住居跡で、南方向の床面が流失している。一回の拡張した痕跡が認められ、最初の床面の規模は径5mほどで、拡張後の規模は径6m前後と考えられる。拡張後の壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約60cmである。壁溝は南半部では確認できなかったが、残存部分では拡張前で幅10~25cm、深さは約10cm、拡張後で幅6~12cm、深さは約10cmで、断面はいずれも浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ8~15cmほどの黄色土による貼床が認められる。炉跡は確認できなかったが、P1周辺とP1からP3にかけての床面で炭化材を検出したほか、P1からP2にかけて焼土を検出した。

主柱穴は6本 (P1~P6) で、規模は径20~35cm、深さ10~60cmのほぼ円形で、柱穴間の距離はP1~P2=2.3m、P2~P3=2.1m、P3~P4=1.55m、P4~P5=2.5m、P5~P6=2.0m、P6~P1=1.4mである。



第1-10図 SB II-6 実測図 (1:60) (アミ目: 焼土)

出土遺物には、古墳時代前期の土器（壺、線刻のある壺、高杯）（第1-34図37～44、図版1-28）、鉄製品（鑿）（第1-41図131、図版1-32）、石製品（砥石、敲石）（第1-42・43図135・136・144、図版1-33）がある。

なお、重複関係はSBII-6→8で、SBII-5との先後関係は不明である。

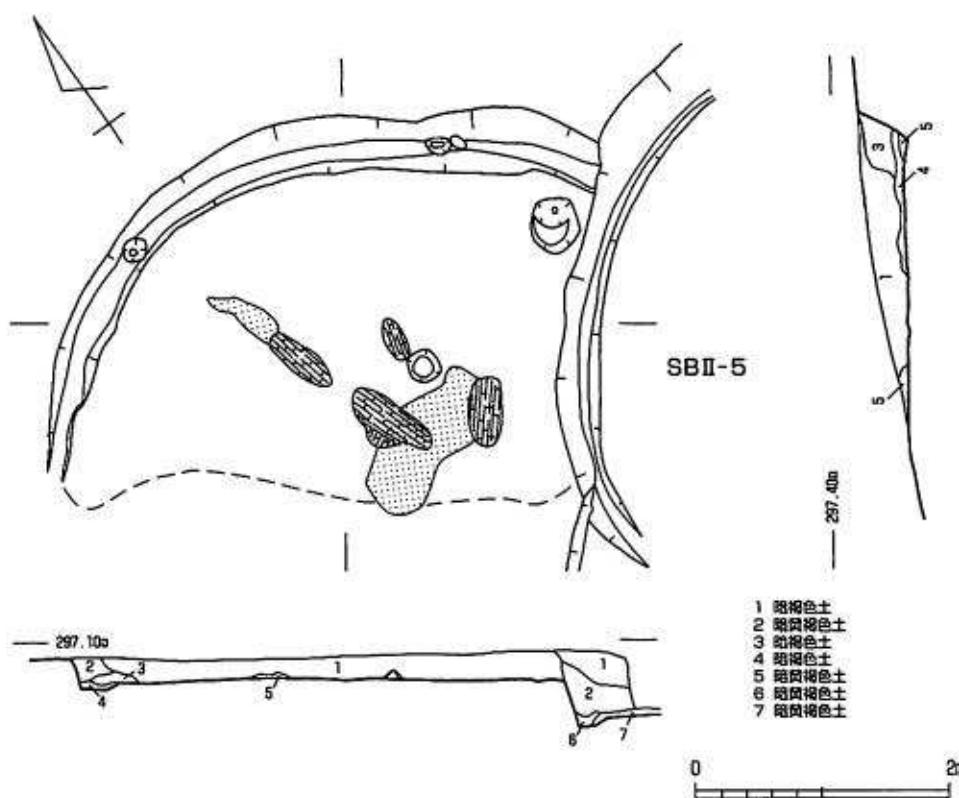
#### SBII-7 (第1-11図、図版1-5-a)

最下段の住居跡群の中央の北西端に位置し、SBII-5と重複する円形の竪穴住居跡で、SBII-5によって切られる南東床と南西方向の床面が流失し北半部のみが残存している。規模は壁面の大半が失われているため、不明である。壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約40cmで、壁溝は残存部分では幅15～20cm、深さは約2～5cmとごく浅く、断面は「U」字ないし逆台形を呈する。

床面はほぼ平坦で、炉跡は確認できなかったが、床面中央付近で炭化材及び焼土を検出した。床面で2個のピットを検出したが、その位置などからいずれも柱穴とは考えられない。

出土遺物には、弥生時代中期中頃の土器（甕、鉢）（第1-34図45・46、図版1-28）がある。

なお、重複関係はSBII-7→5である。



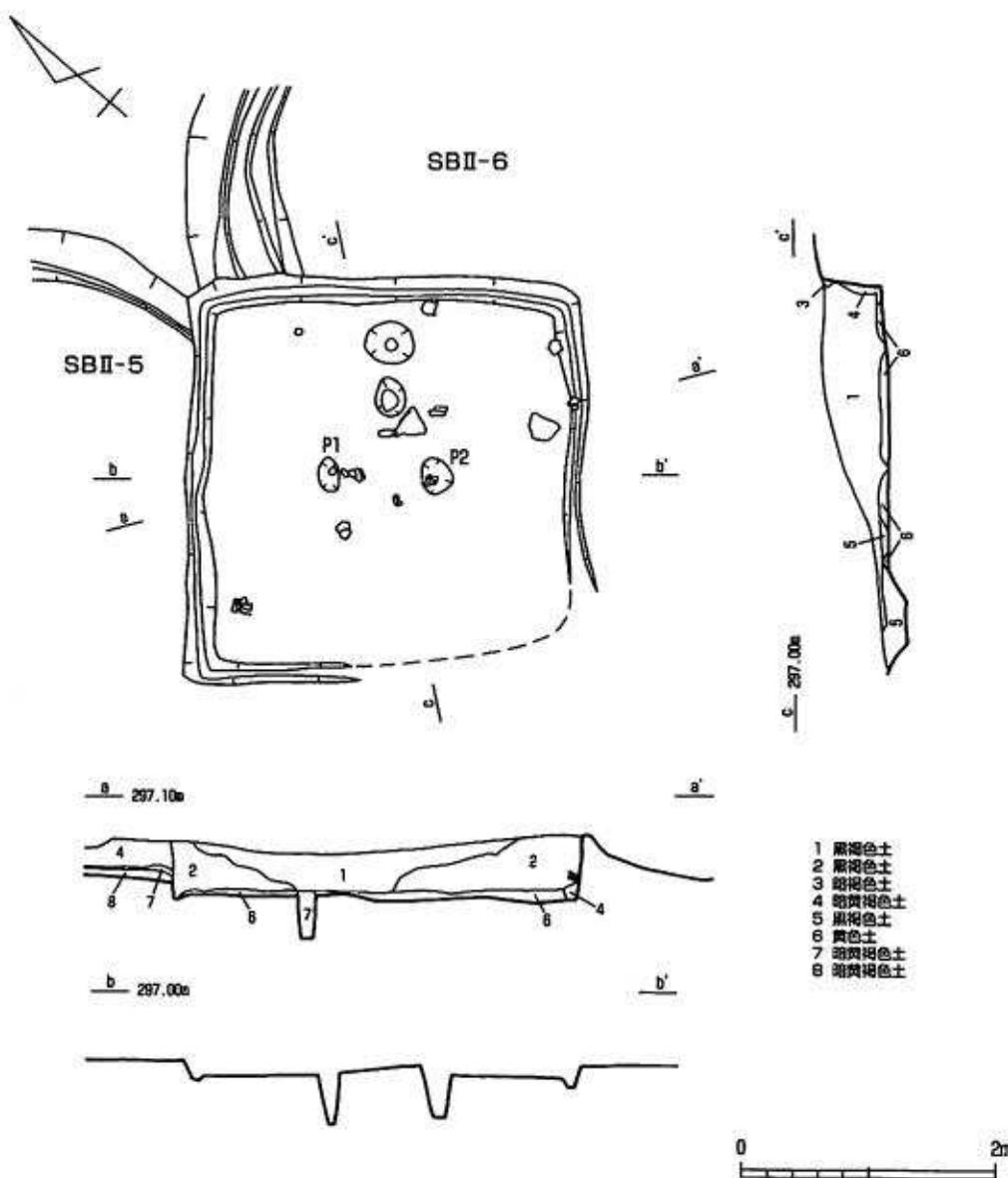
第1-11図 SBII-7実測図 (1:60) (アミ目: 焼土)

SB II-8 (第1-12図、図版1-4・a, 5・b, c)

最下段の住居跡群の中央に位置し、SB II-5・6と重複する2本柱の隅丸方形の竪穴住居跡で、南側の一部の床面が流失している。規模は北東辺で長さ3.1m、北西辺で長さ3.1mである。壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約50cmである。壁溝は南半部では確認できなかつたが、残存部分では幅10~15cm、深さは4~8cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ4~6cmほどの黄色土による貼床が認められる。炉跡は確認できなかった。

主柱穴は2本(P1・P2)で、規模はP1が径15cm、深さ34cm、P2が径25cm、深さ39cmのほぼ円形で、柱穴間の距離は0.8mである。



第1-12図 SB II-8 実測図 (1:60)

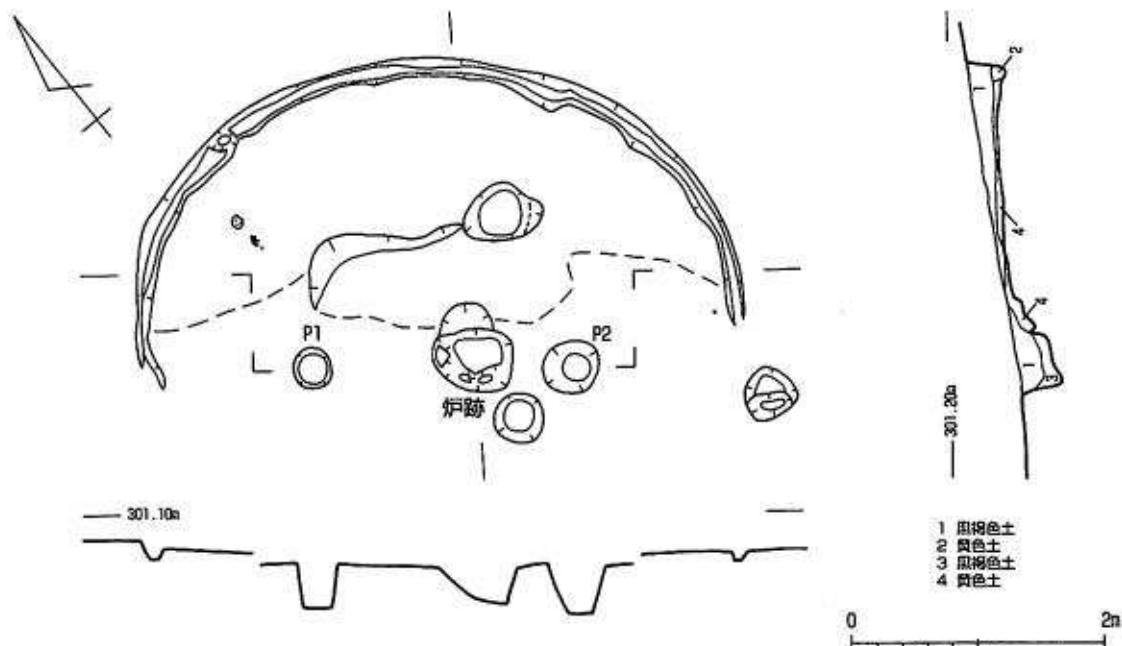
出土遺物には、古墳時代前半の土師器（甕、小型丸底壺、高杯、手捏土器）（第1-35図47～56、図版1-29）、須恵器（壺）（第1-40図128、図版1-32）、石製品（台石、敲石）（第1-43・45図141・145・146・161・163・164、図版1-33）がある。なお、重複関係はSB II-5→8、SB II-6→8である。

#### SB II-9（第1-13図、図版1-6-a, b）

最上段の住居跡群の中央付近に位置する2本柱の円形の竪穴住居跡で、南西半部の床面が流失している。規模は径5m前後と考えられる。壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約30cmである。壁溝は床面を流失している南西半部では確認できなかったが、残存部分では幅10～20cm、深さは7～12cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、床面残存部で厚さ2～4cmの黄色土による貼床が認められる。炉跡はややP2に寄った位置で検出した。規模は長径60cm、短径50cm、深さ約30cmの長円形を呈する。主柱穴は2本（P1・P2）で、規模はP1が径30cm、深さ約35cm、P2が径45cm、深さ約35cmのほぼ円形で、柱穴間の距離は2.1mである。

出土遺物には古墳時代前半の土器（壺、甕）（第1-35図57～60、図版1-29）などがある。



第1-13図 SB II-9実測図（1:60）

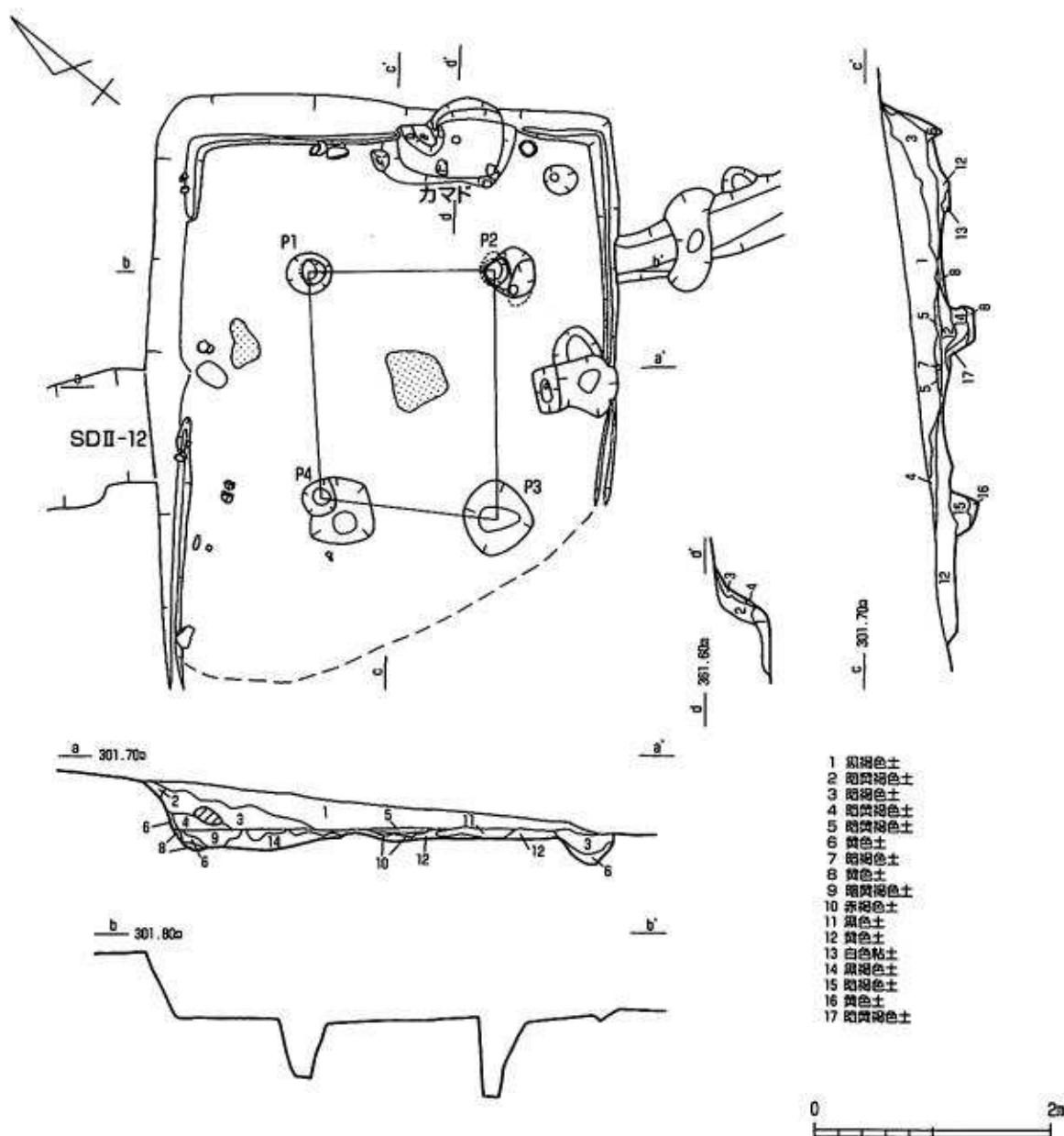
遺構番号	規 模			時期	位置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 別	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱数				
SB II-7	円・竪穴	26.1	—	弥・中・中	下段	弥生土器（甕・鉢）	炭化材出土
SB II-8	方・竪穴	7.9	2	古・前	下段	古式土師器（甕・小型丸底壺・手づくね、高杯）、古式須恵器（甕）、台石（鐵床石）、敲石	貼床あり
SB II-9	円・竪穴	17.2	2	古・前	上段	弥生土器（甕）	貼床あり

第4表 遺構計測表4

SB II-10 (第1-14図、図版1-6・c, 7・a~c)

最上段の住居跡群の中央に位置し、SD II-12と重複する4本柱の隅丸長方形の竪穴住居跡で、南西側の床面が流失している。規模は南東辺で残存長3.3m、北東辺で長さ3.8m、北西辺で残存長5.0mである。壁面はもっとも残存状況が良好な北西壁で高さ約60cmである。

また、北東壁の中央付近では造付けのカマドを検出した。カマドの袖部には礫を立てて使用しており、これに粘土を巻付けて袖としていた。煙出しが明確ではないが、本来住居の外側に延びていたものと考えられる。



第1-14図 SB II-10 実測図 (1:60) (アミ目: 焼土)

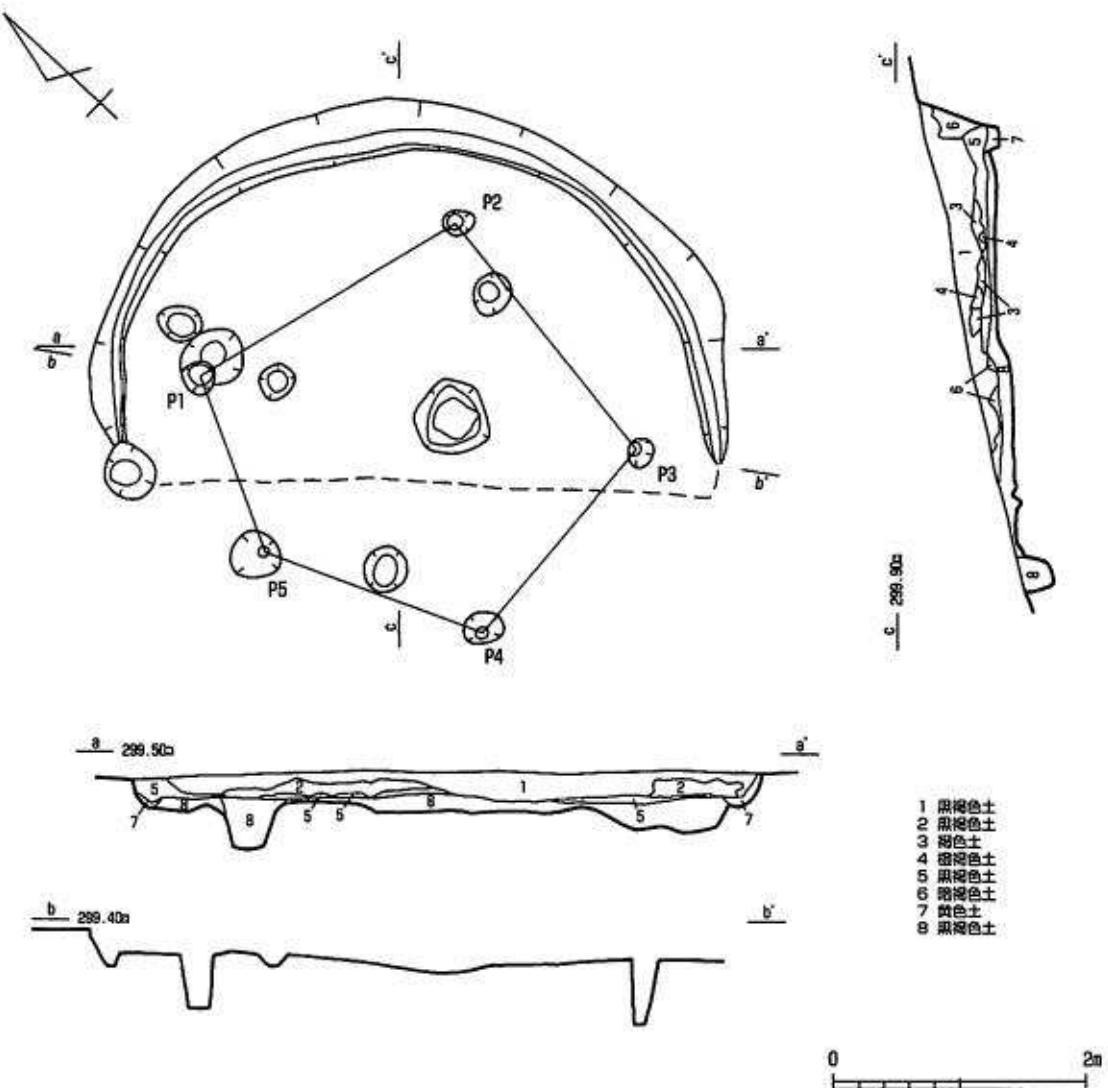
壁溝は南西部では確認できなかったほか、北西壁の一部と北東壁のカマド付近で切れていた。残存部分では幅8~15cm、深さは2~10cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ2~16cmほどの黄色土による貼床が認められる。炉跡は確認できなかったが、住居跡中央付近で焼土を検出した。

主柱穴は4本（P1～P4）で、規模は径25~60cm、深さ20~55cmの円形で、柱穴間の距離はP1～P2=1.6m, P2～P3=2.1m, P3～P4=1.55m, P4～P1=1.95mである。

出土遺物には、土師器（甕、椀）（第1-35図61~63、図版1-29）、鉄製品（鉄鎌）（第1-41図132、図版1-32）、石製品（砥石、台石）（第1-42・46図137・168~170、図版1-33）がある。

なお、重複関係はSBII-10→SDII-12である。



第1-15図 SBII-11実測図(1:60)

### S B II-11 (第1-15図、図版1-8-a)

中段の住居跡群の南東端に位置する5本柱の円形の竪穴住居跡で、南西半部の床面が流失している。規模は径5m前後と考えられる。壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約65cmである。壁溝は南半部では確認できなかったが、残存部分では幅15~20cm、深さは約10cmで、断面は浅い「U」字状ないし逆台形を呈する。

床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ4~10cmほどの黄色土による貼床が認められる。住居跡中央付近で炉跡を確認した。規模は径約60cmのごく浅い不整円形である。

主柱穴は5本(P1~P5)で、規模は径15~40cm、深さ30~45cmのほぼ円形で、柱穴間の距離はP1~P2=2.4m、P2~P3=2.3m、P3~P4=1.9m、P4~P5=1.85m、P5~P1=1.5mである。

出土遺物には、弥生時代後期後半の弥生土器(甕、器台)(第1-36図64・65、図版1-29)、石製品(台石、敲石)(第1-43・46図147・166、図版1-33)などがある。

### S B II-12 (第1-16図、図版1-8-b, c)

調査区の北東隅に位置する4本柱の隅丸方形の竪穴住居跡で、南西側の床面が流失している。規模は南東辺で残存長1.9m、北東辺で長さ5.0m、北西辺で残存長3.9mである。壁面はもっとも残存状況が良好な北東壁で高さ約35cmである。壁溝は南半部では確認できなかったが、残存部分では幅10~15cm、深さは6~8cmで、断面は浅い逆台形を呈する。

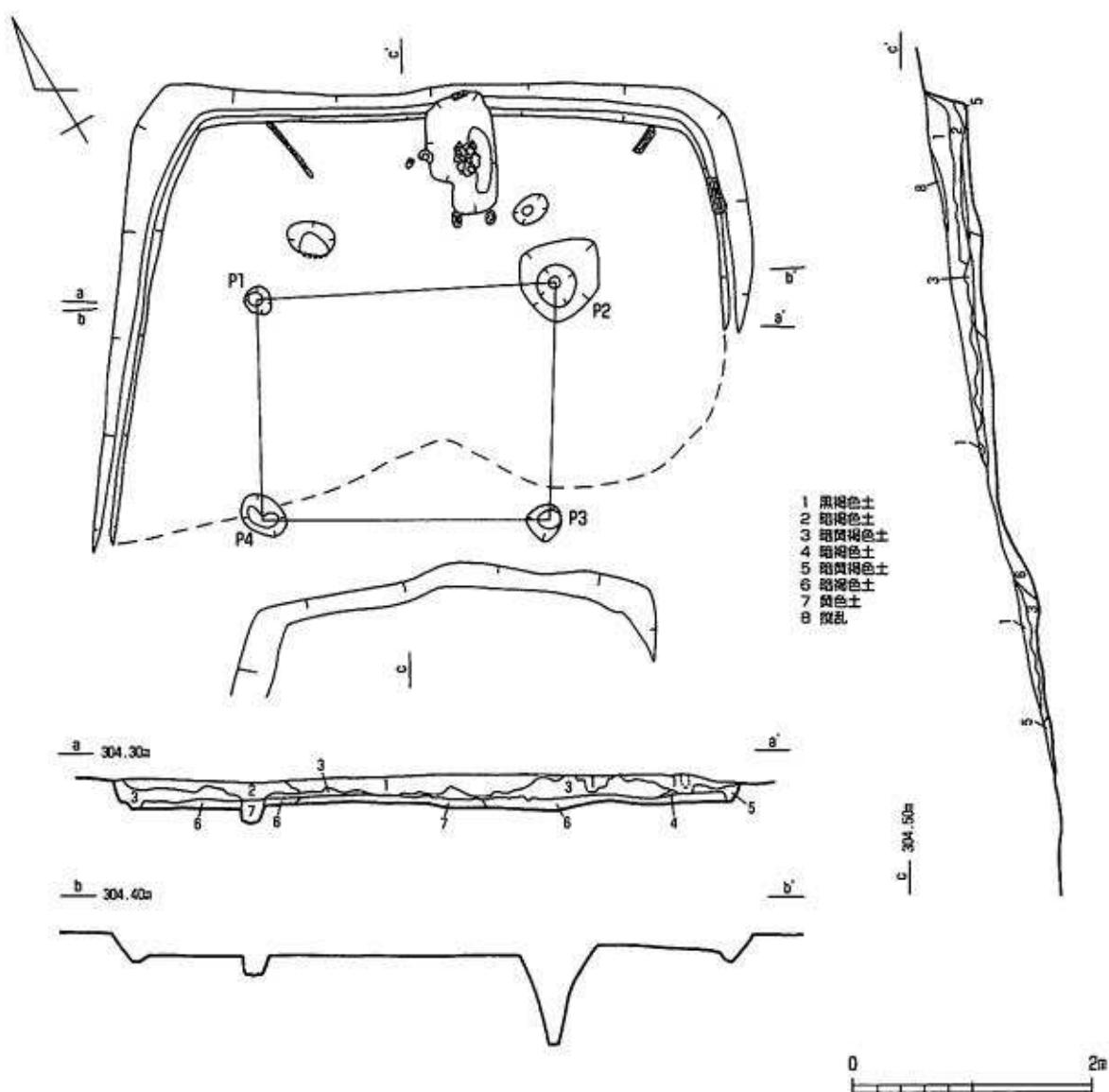
床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に厚さ6~10cmほどの黄色土による貼床が認められる。炉跡は確認できなかった。また、北西壁付近で散漫的に炭化物を検出した。

主柱穴は4本(P1~P4)で、規模は径20~60cm、深さ20~65cmの円形で、柱穴間の距離はP1~P2=2.5m、P2~P3=2.0m、P3~P4=2.4m、P4~P1=1.8mである。

出土遺物には、古墳時代中・後期の土師器(甕、高杯)(第1-36図66~75、図版1-29・30)、石製品(砥石、台石、敲石)(第1-42~44・46図138・142・155・167、図版1-33)がある。

遺構番号	規 模			時 期	位 置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 别	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱 数				
S B II-10	方・竪穴	16.9	4	古・後	上段	土師器(甕・椀)、鐵滓、鐵鎌、台石、砥石	カマドあり、貼床あり、鐵滓多し、工房的な性格
S B II-11	円・竪穴	20.1	5	弥・後・後	下段	弥生土器(甕・器台)、被熱砥石、台石、敲石	貼床あり
S B II-12	方・竪穴	20.9	4	古・中~後	—	弥生土器、古式土師器、土師器(甕・高杯)、台石、砥石、敲石	貼床あり

第4表 遺構計測表4



第1-16図 SB II-12実測図 (1:60)

#### SB II-13 (第1-17図、図版1-9-a)

上段の住居跡群に位置する隅丸方形の竪穴住居跡で、南西側半部の床面が流失している。規模は北東辺で長さ2.2m、壁面は北東壁で高さ約15cmである。壁溝は確認できなかった。

床面はほぼ平坦であるが、床面中央にSK II-15があるため、詳細は不明である。また主柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては、少量の弥生土器片などがある。

#### SB II-14 (第1-17図、図版1-9-b)

調査区の北東部に位置する壁溝が残存するだけの隅丸方形の竪穴住居跡で、南西側半部以上の床面が流失している。規模は北東辺で長さ約3mである。壁溝は幅10~18cm、深さは2~8cmで、

断面は浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、主柱穴は確認できなかった。

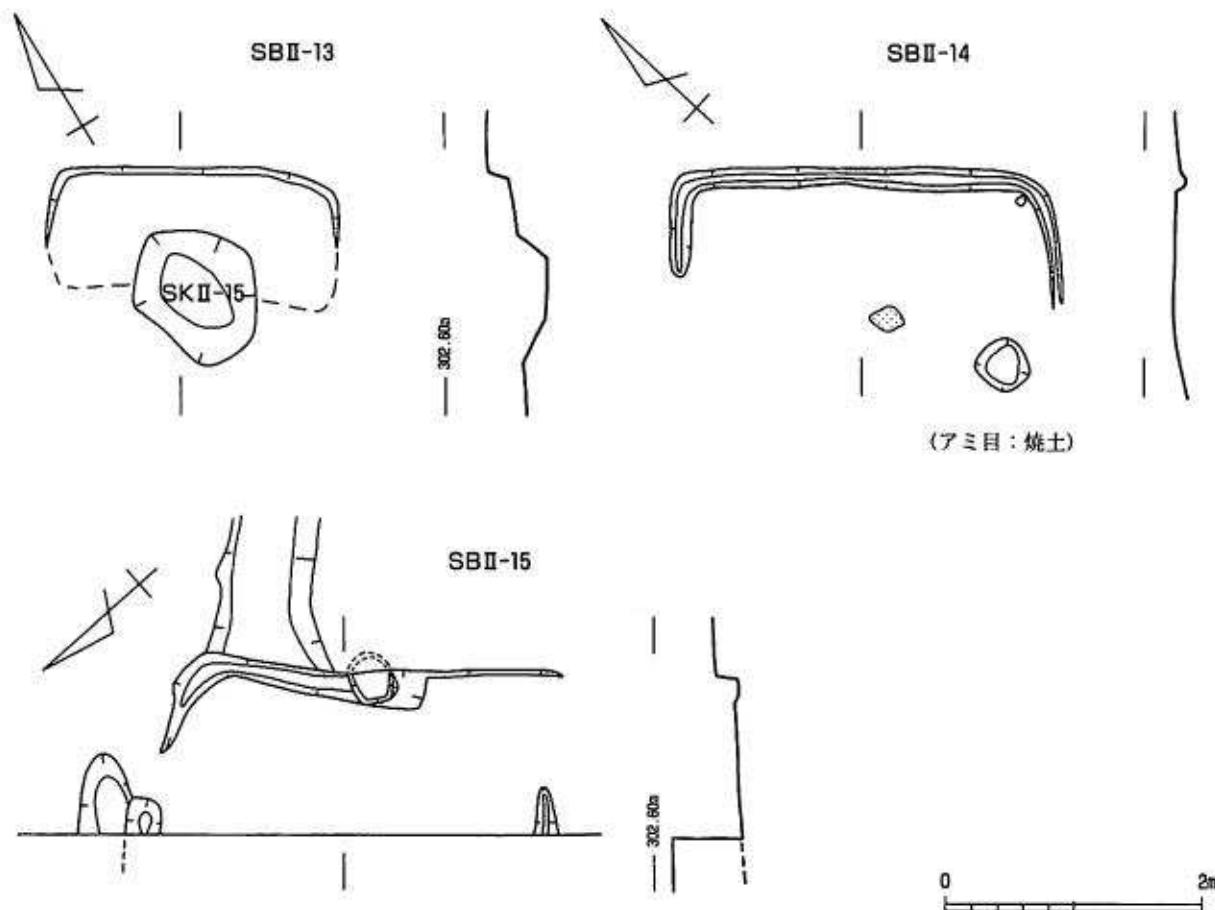
出土遺物としては、少量の弥生土器などがある。

### SB II-15 (第1-17図、図版1-9・c)

調査区の北西隅に位置する隅丸方形の竪穴住居跡で、住居跡の大半が調査区外に延びるため、全体の状況については不明である。残存部では南東辺の一部が残存するだけで、北西辺の残存長は約3m、壁溝は残存壁の中央から北側が残っている。壁の高さは壁溝底面から18cmで、壁溝は幅20cm、深さ5cmほどで、断面は浅い「U」字状を呈する。

床面はほぼ平坦で、柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては、弥生時代後期後半の土器(第1-32図76、図版1-30)などがある。



第1-17図 SB II-13~15実測図(1:60)

遺構番号	規 模			時期	位置	出 土 遺 物	特 記 事 項
	種 别	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱数				
SB II-13	方・竪穴	—	—	—	上段	弥生土器片	
SB II-14	方・竪穴	—	—	—	—	弥生土器片	
SB II-15	方・竪穴	—	—	弥・後・後	中段	弥生土器	

第6表 遺構計測表6

## 2 掘立柱建物跡

### 掘立柱建物跡 II-1 (第1-18図、図版1-10・a)

上段の住居跡群の中央付近に位置し、SB II-9と重複する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行：P 1～P 2-3.1m, P 3～P 4-3.15m, 梁行：P 2～P 3-1.6m, P 4～P 1-1.6mである。

棟方向はN 57° Wを指向する。出土遺物はない。

### 掘立柱建物跡 II-2 (第1-19図、図版1-10・b)

調査区の南側の中央付近に位置する総柱の掘立柱建物跡である。規模は3間×2間以上で、それぞれの柱間距離はP 1～P 2-2.4m, P 2～P 3-2.4m, P 3～P 4-2.4m, P 5～P 6-2.4m, P 6～P 7-2.4m, P 2～P 5-2.6m, P 3～P 6-2.6m, P 4～P 7-2.6m, P 7～P 8-2.6mである。

棟方向はN 8° Wを指向する。出土遺物としては土師器片が少量ある。

### 掘立柱建物跡 II-3 (第1-20図、図版1-10・c, 11・c)

中段の住居跡群の中央付近の西端に位置し、掘立柱建物跡II-6と重複して、掘立柱建物跡II-7・9と近接する。規模は1間×2間で、桁行：P 1～P 2-1.6m, P 2～P 3-1.5m, P 4～P 5-1.5m, P 5～P 6-1.5m, 梁行：P 3～P 4-2.3m, P 6～P 1-2.1mである。

棟方向はN 53° Wを指向する。出土遺物はない。

### 掘立柱建物跡 II-4 (第1-21図、図版1-11・a)

上段の住居跡群の東端に位置し、掘立柱建物跡II-5と近接する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行：P 1～P 2-2.9m, P 3～P 4-2.95m, 梁行：P 2～P 3-1.7m, P 4～P 1-1.7mである。

棟方向はN 55° Wを指向する。出土遺物には弥生土器がある。

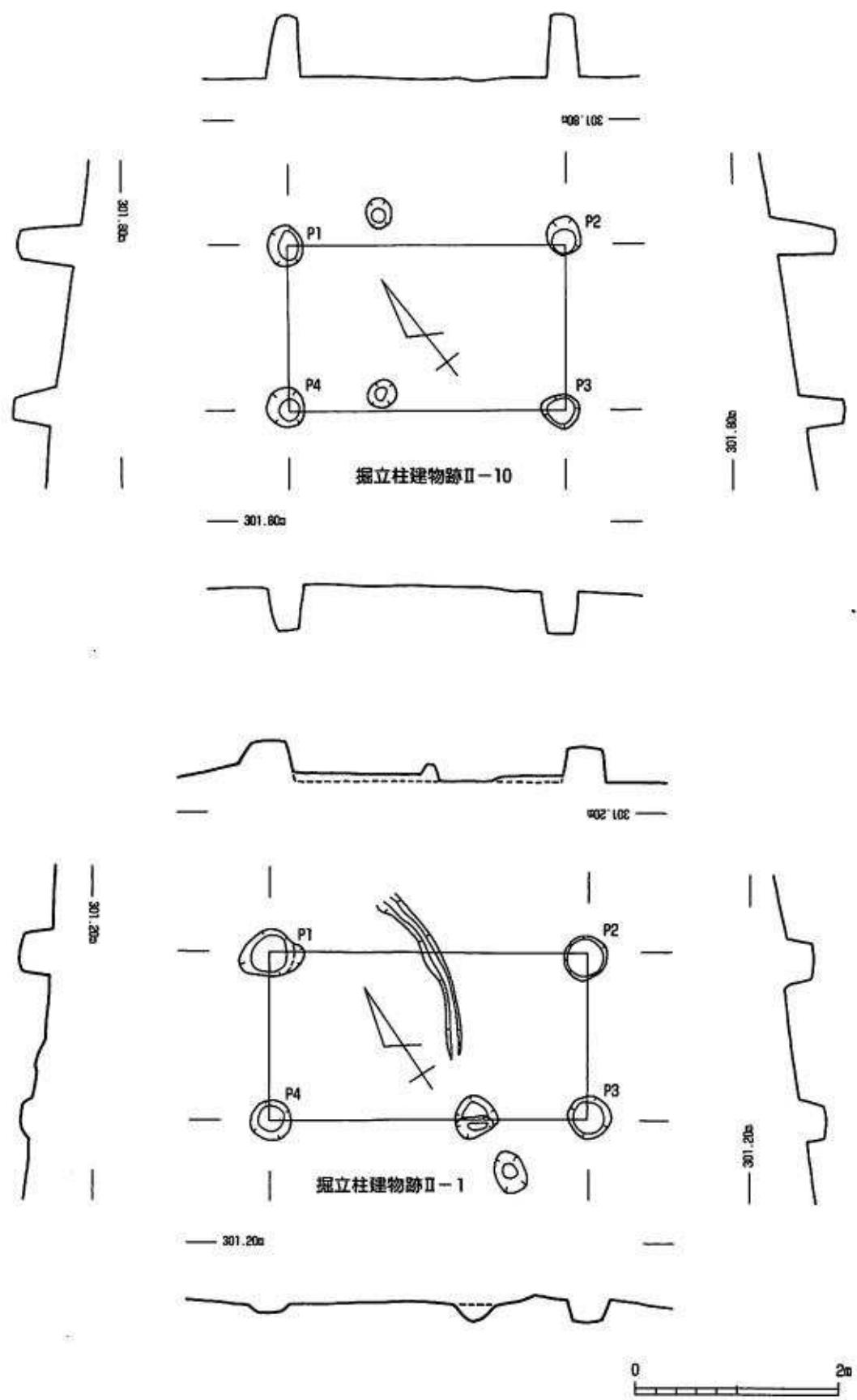
### 掘立柱建物跡 II-5 (第1-21図、図版1-11・b)

上段の住居跡群の西半部に位置し、掘立柱建物跡II-4の西側に近接する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行：P 1～P 2-3.2m, P 3～P 4-3.15m, 梁行：P 2～P 3-2.1m, P 4～P 1-2.2mである。

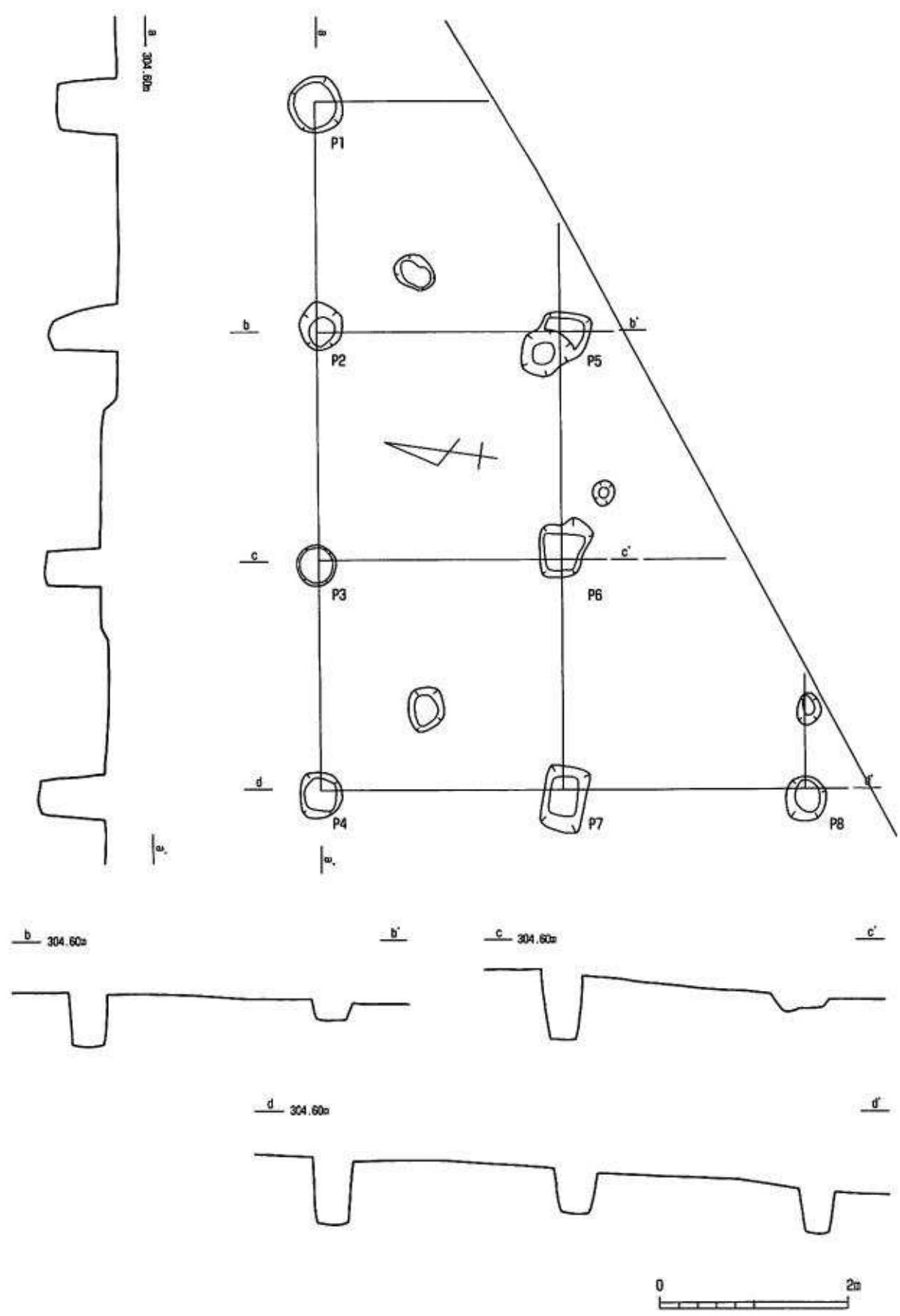
棟方向はN 55° Wを指向する。出土遺物はない。

### 掘立柱建物跡 II-6 (第1-20図、図版1-11・c)

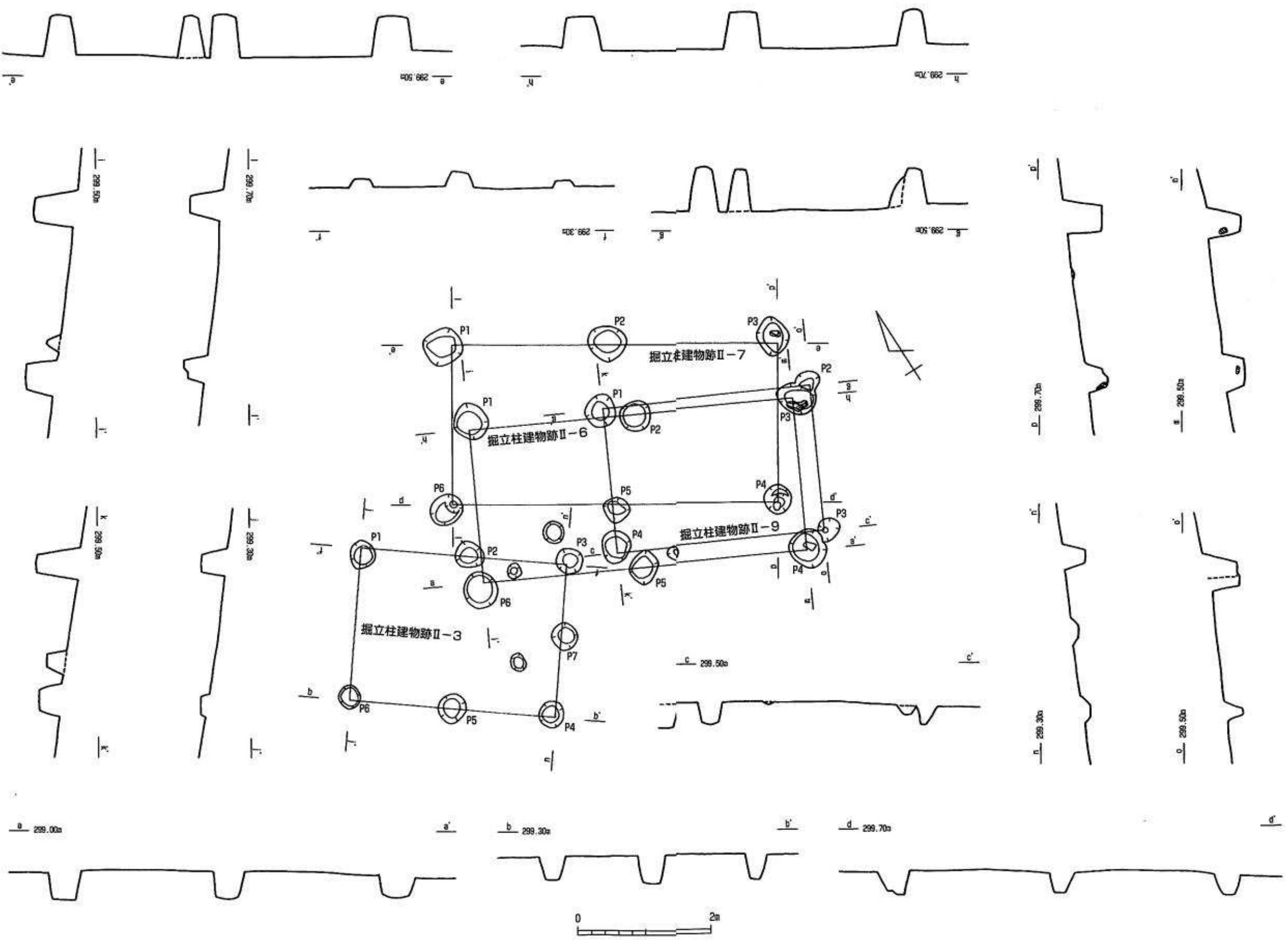
中段の住居跡群の中央付近に位置し、掘立柱建物跡II-3・7・9建物跡と重複する掘立柱建物跡である。規模は2間×1間で、桁行：P 1～P 2-2.45m, P 2～P 3-2.4m, P 4～P 5-



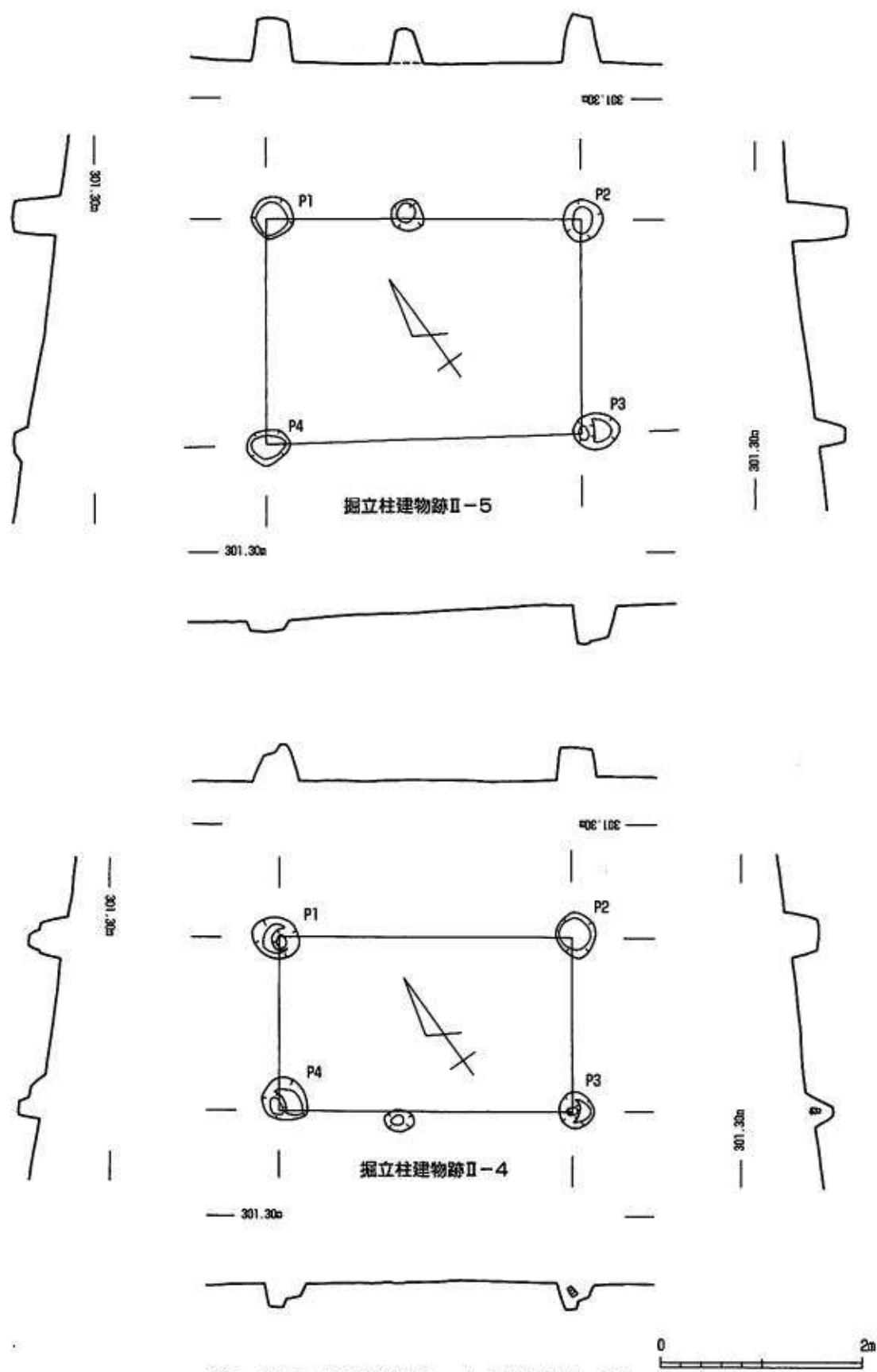
第1-18図 掘立柱建物跡 II-1・10実測図 (1:60)



第1-19図 挿立柱建物跡II-2実測図 (1:60)



第1-20図 掘立柱建物跡 II-3・6・7・9 実測図 (1:60)



第1-21図 掘立柱建物跡II-4・5実測図(1:60)

2.5m, P 5～P 6 - 2.4m, 梁行: P 3～P 4 - 2.2m, P 6～P 1 - 2.2mである。

棟方向はN 63° Wを指向する。出土遺物としては土師器片が少量ある。

#### 掘立柱建物跡 II - 7 (第1-20図, 図版1-11・c)

中段の住居跡群の中央付近に位置し、掘立柱建物跡 II - 6・9と重複する掘立柱建物跡である。規模は2間×1間で、桁行: P 1～P 2 - 2.4m, P 2～P 3 - 2.5m, P 4～P 5 - 2.5m, P 5～P 6 - 2.35m, 梁行: P 3～P 4 - 2.4m, P 6～P 1 - 2.3mである。

棟方向はN 58° Wを指向する。出土遺物はない。

#### 掘立柱建物跡 II - 8 (第1-22図, 図版1-12・a)

中段の住居跡群の南東端に位置し、掘立柱建物跡 II - 6・9に近接する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行: P 1～P 2 - 2.9m, P 3～P 4 - 2.8m, 梁行: P 2～P 3 - 1.5m, P 4～P 1 - 1.5mである。

棟方向はN 64° Wを指向する。出土遺物はない。

#### 掘立柱建物跡 II - 9 (第1-20図, 図版1-11・c)

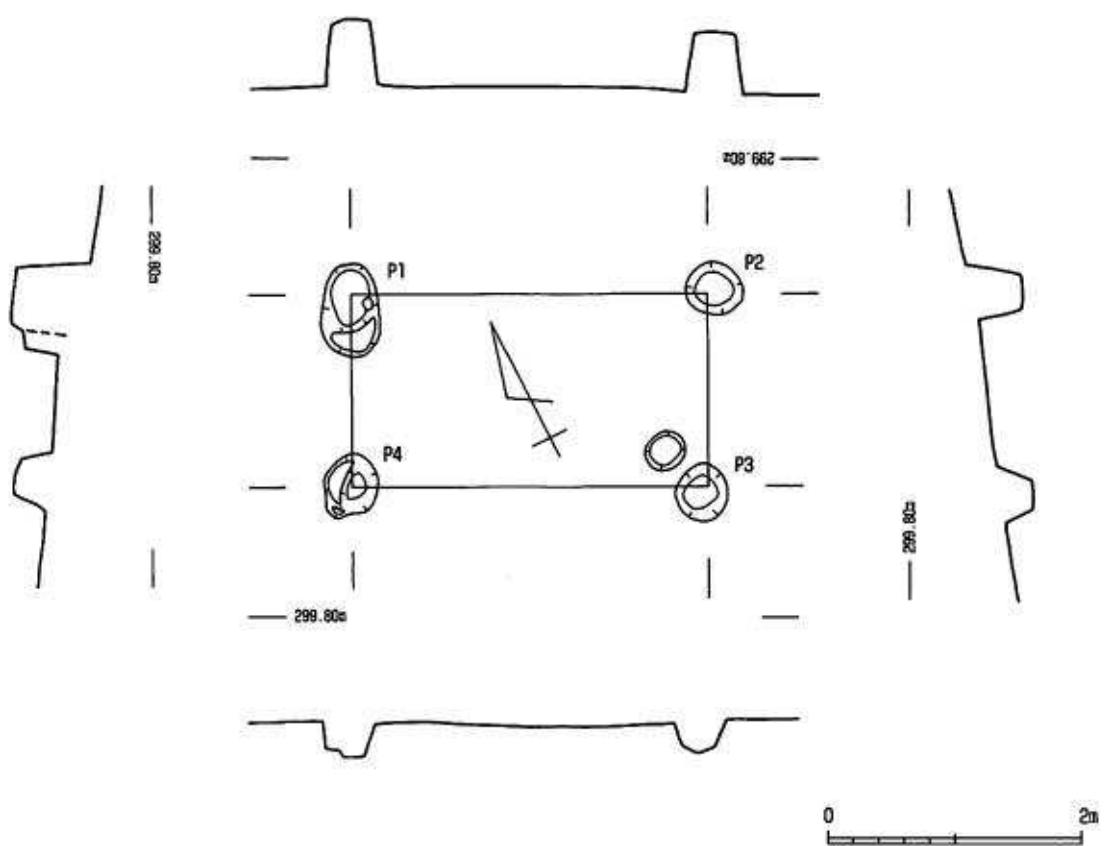
中段の住居跡群の中央付近に位置し、掘立柱建物跡 II - 6・7と重複する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行: P 1～P 2 - 3.1m, P 3～P 4 - 3.1m, 梁行: P 2～P 3 - 2.1m, P 4～P 1 - 2.1mである。

棟方向はN 64° Wを指向する。出土遺物はない。

#### 掘立柱建物跡 II - 10 (第1-18図, 図版1-12・b)

上段の住居跡群の北西端に位置する掘立柱建物跡である。規模は1間×1間で、桁行: P 1～P 2 - 2.7m, P 3～P 4 - 2.7m, 梁行: P 2～P 3 - 1.6m, P 4～P 1 - 1.6mである。棟方向はN 53° Wを指向する。出土遺物はない。

なお、北東側に近接して位置するSD II - 13は、掘立柱建物跡 II - 10の棟方向と平行しており、掘立柱建物跡 II - 10と何らかの関連する溝状遺構の可能性も考えられる。また、SD II - 13からは古墳時代中頃の遺物が出土しており、掘立柱建物跡 II - 10の時期も推定できよう。



第1-22図 挖立柱建物跡II-8実測図(1:60)

遺構番号	規 模			時期	位置	出 土 遺 物
	平面形	柱間	規模 (m)			
掘立II-1	長方形	1×1	3.15×1.6	—	上段	
掘立II-2	総柱	3×2以上	7.3×5.2以上	—	—	土師器片(P6・11)
掘立II-3	長方形	1×2	3.1×2.3	—	中段	
掘立II-4	長方形	1×1	2.95×1.7	—	上段	弥生土器
掘立II-5	長方形	1×1	3.15×2.2	—	上段	
掘立II-6	長方形	1×2	4.9×2.2	—	中段	土師器片(P1・2・7)
掘立II-7	長方形	1×2	4.9×2.4	—	中段	
掘立II-8	長方形	1×1	2.9×1.5	—	中段	
掘立II-9	長方形	1×1	3.1×2.1	—	中段	
掘立II-10	長方形	1×1	2.7×1.6	古・前?	上段	

第7表 遺構計測表?

### 3 土坑(第1-22~25図、図版1-12・c~17・c)

調査区内では16基の土坑を検出した。その分布状況は散発的であり、集中する傾向はない。また、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に必ずしも近接して位置するものではなく、貯蔵穴などのように住居跡や建物跡と有機的に関連するものとは認めがたい。

土坑には平面形が円形のもの(SK II-1・3・5・6・13)、方形のもの(SK II-4・7・8・16)、不整形のもの(SK II-2・9~12・14・15)があり、SK II-4・5・7・8・11・16のように比較的底面が平坦で安定しているものもある。

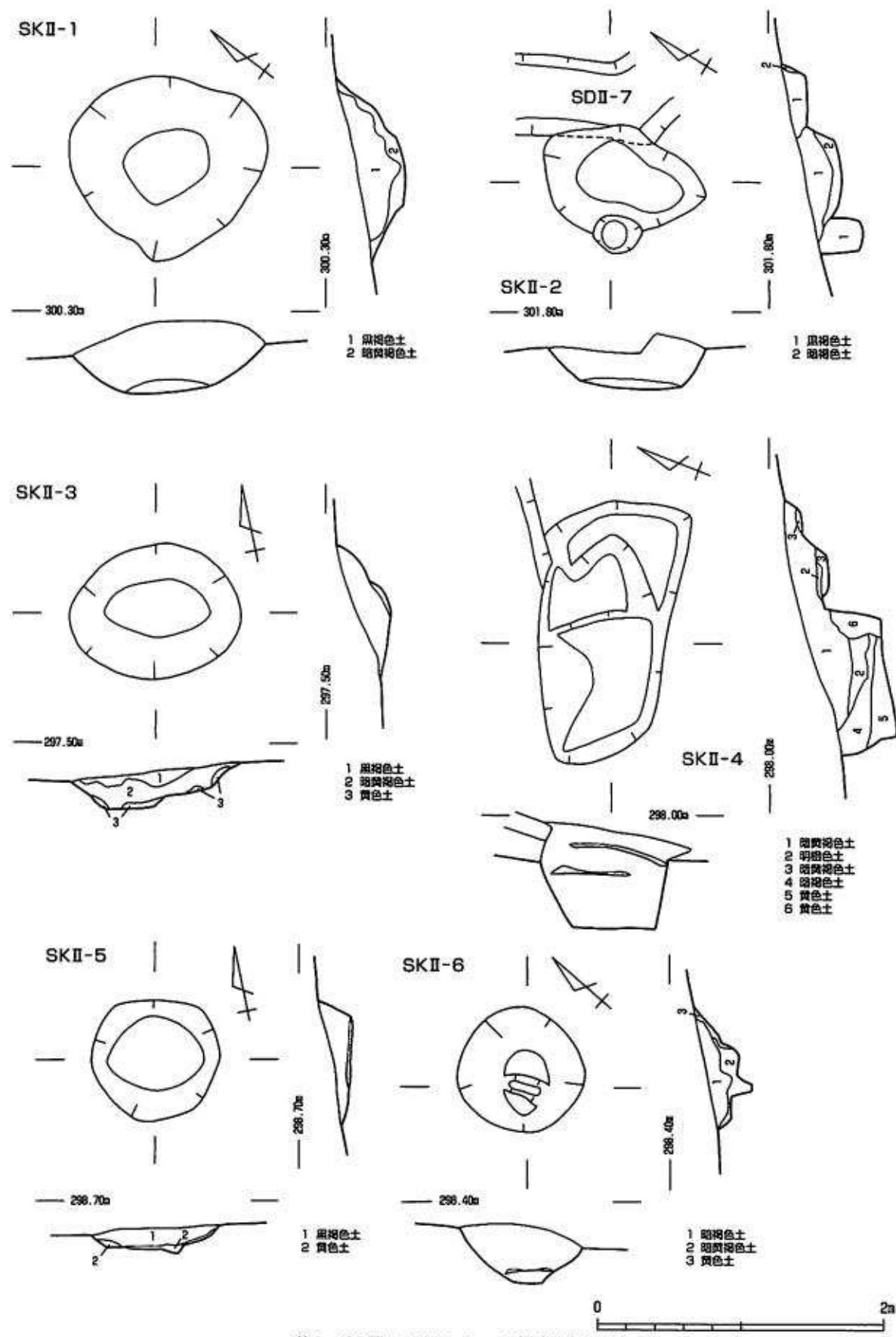
ただし、前述のようにその性格については明確ではなく、またその時期についても土坑に伴つて出土した遺物が少量であることから明確ではない。

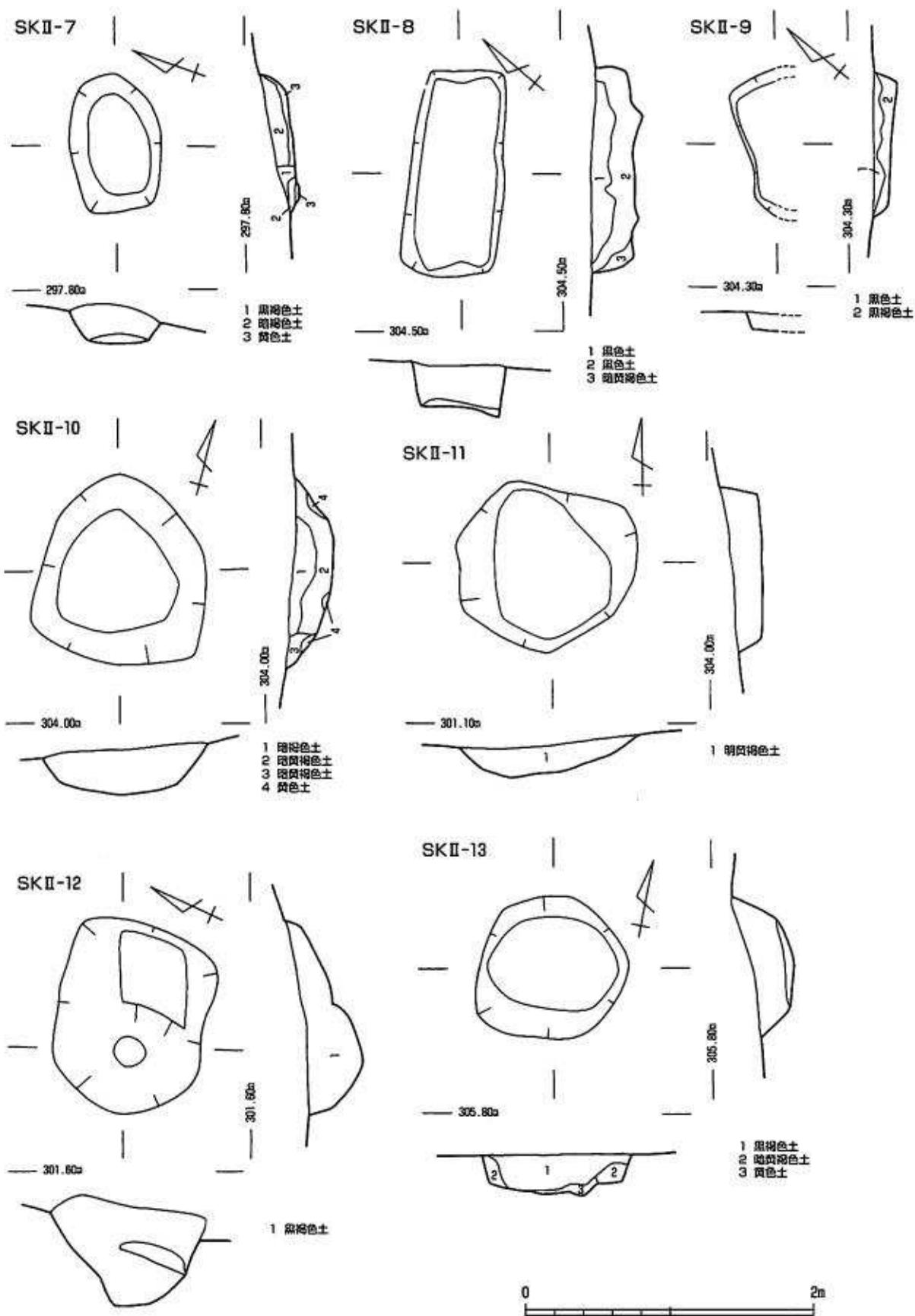
### 4 性格不明の遺構(第1-25・26図、図版1-24・c, 25・a~c)

性格不明の遺構として5基の遺構を検出した。土坑と同様に分布のあり方は散発的で、集中することはなく、平面形も不整形のものが大半で、深さもかなり浅いものである。遺物も土坑同様にほとんど出土していないことから、その存続時期も不明である。

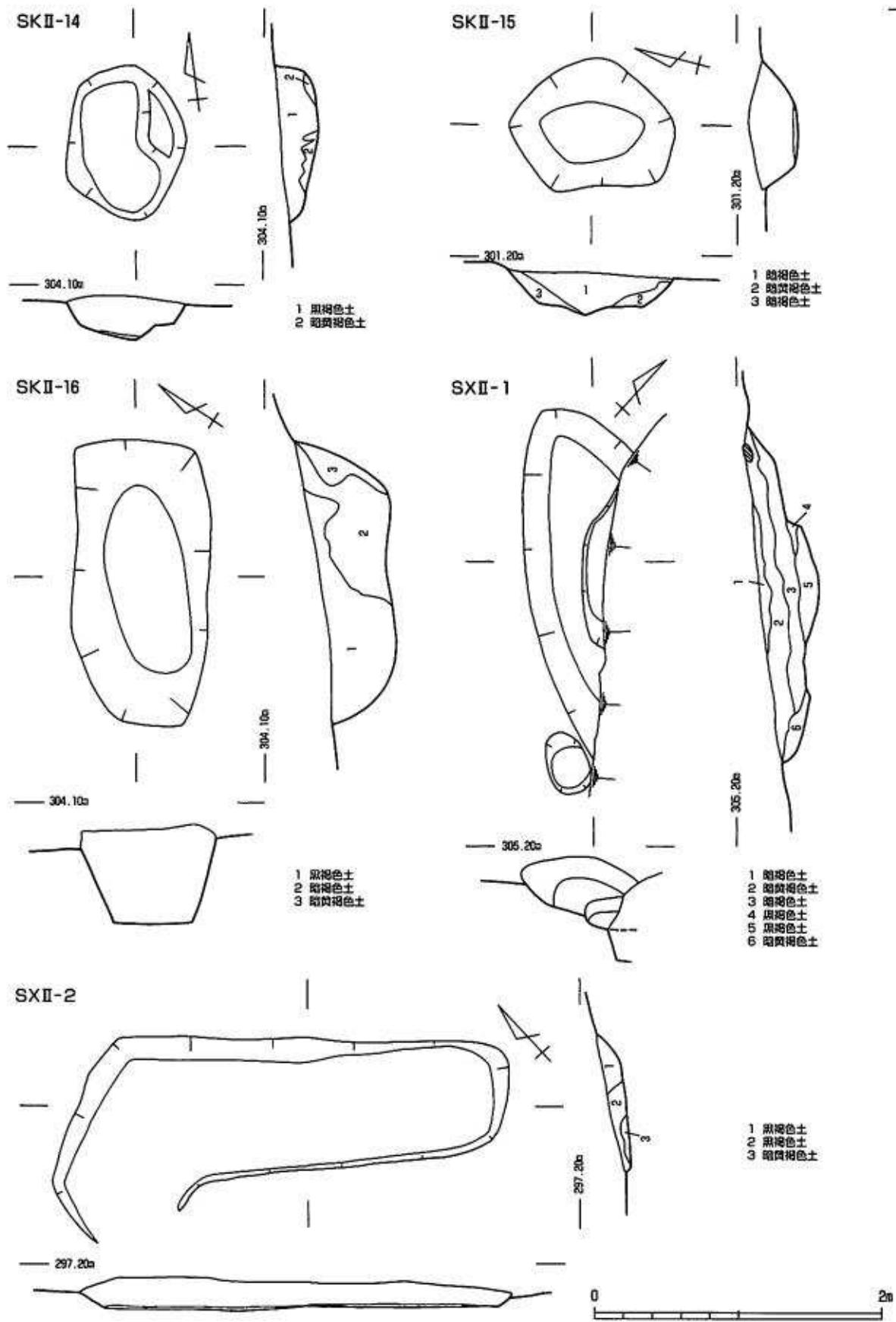
遺構番号	規 模				出土遺物・その他	遺構番号	規 模				出土遺物・その他
	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SK II-1	不整円形	2.1	1.9	50		SK II-12	不整形	1.9	1.5	50	2段掘り
SK II-2	不整形	1.7	1.2	40	SD 7に切られる	SK II-13	不整円形	1.5	1.5	50	
SK II-3	不整円形	1.8	1.4	40		SK II-14	不整形	1.6	1.2	40	2段掘り
SK II-4	不方整形	2.8	1.4	70	弥生土器(円形浮文の壺)、土師器片	SK II-15	不整形	1.7	1.3	40	
SK II-5	円形	1.3	1.2	30		SK II-16	不整方形	3	1.4	80	
SK II-6	円形	1.3	1.3	30	2段掘り	S XII-1	不整形	—	—	60	
SK II-7	不方整形	1.4	1	25		S XII-2	不整形	4.9	1.6	15	
SK II-8	方形	2.1	1	50		S XII-3	不整形	5.2	1.4	19	
SK II-9	不整形	—	—	15		S XII-4	不整形	3.9	0.9	20	
SK II-10	不整形	2	1.7	45		S XII-5	不整形	—	—	25	土師器(高杯)
SK II-11	不整形	1.8	1.8	40							

第8表 遺構計測表8

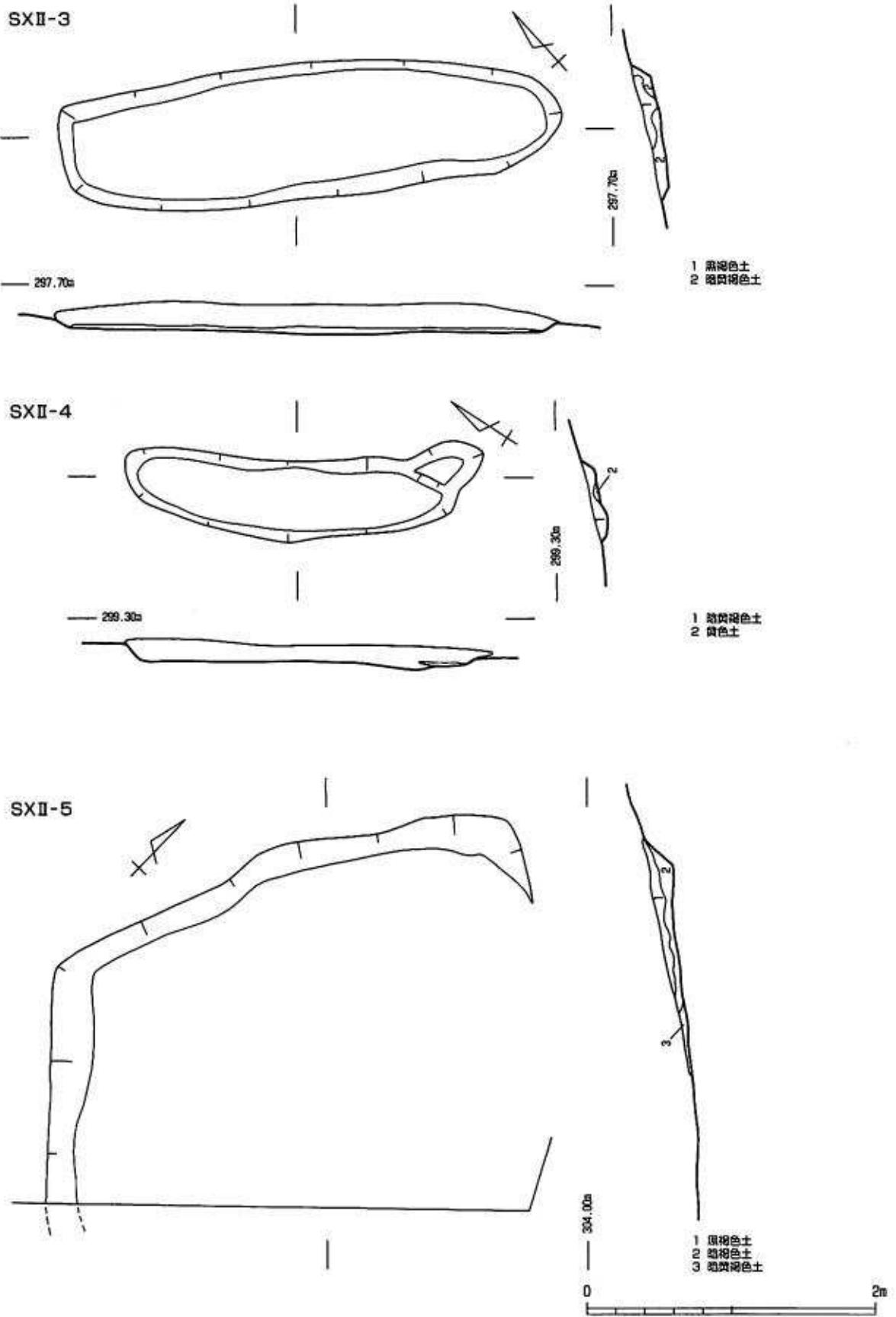




第1-24図 SK II-7~13実測図 (1:40)



第1-25圖 SK II-14~16・SX II-1・2 実測図 (1:40)



第1-26図 SX II-3~5 実測図 (1:40)

## 5 溝状遺構（第1-27～30図、図版1-18・a～24・b）

調査区内において21条の溝状遺構を検出した。いずれも等高線と平行して掘削されており、また3段に分かれる住居跡群と近接して掘られているものが多い。溝状遺構の中からは弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物（第1-37・38図77～102、図版1-30・31）を包含するものが比較的多く確認され、集落が形成されていた時代とほぼ同時期に掘削され、機能していたと思われる。

SD II-8（第1-29図、図版1-20・b）は、調査区の北西隅で検出した溝状遺構で、遺構の両端がわずかに「L」字状に屈曲している。周辺部からは柱穴らしきものは検出されていないが、わずかに平坦面が前面に存在することから、住居状の遺構に伴う溝である可能性が考えられる。

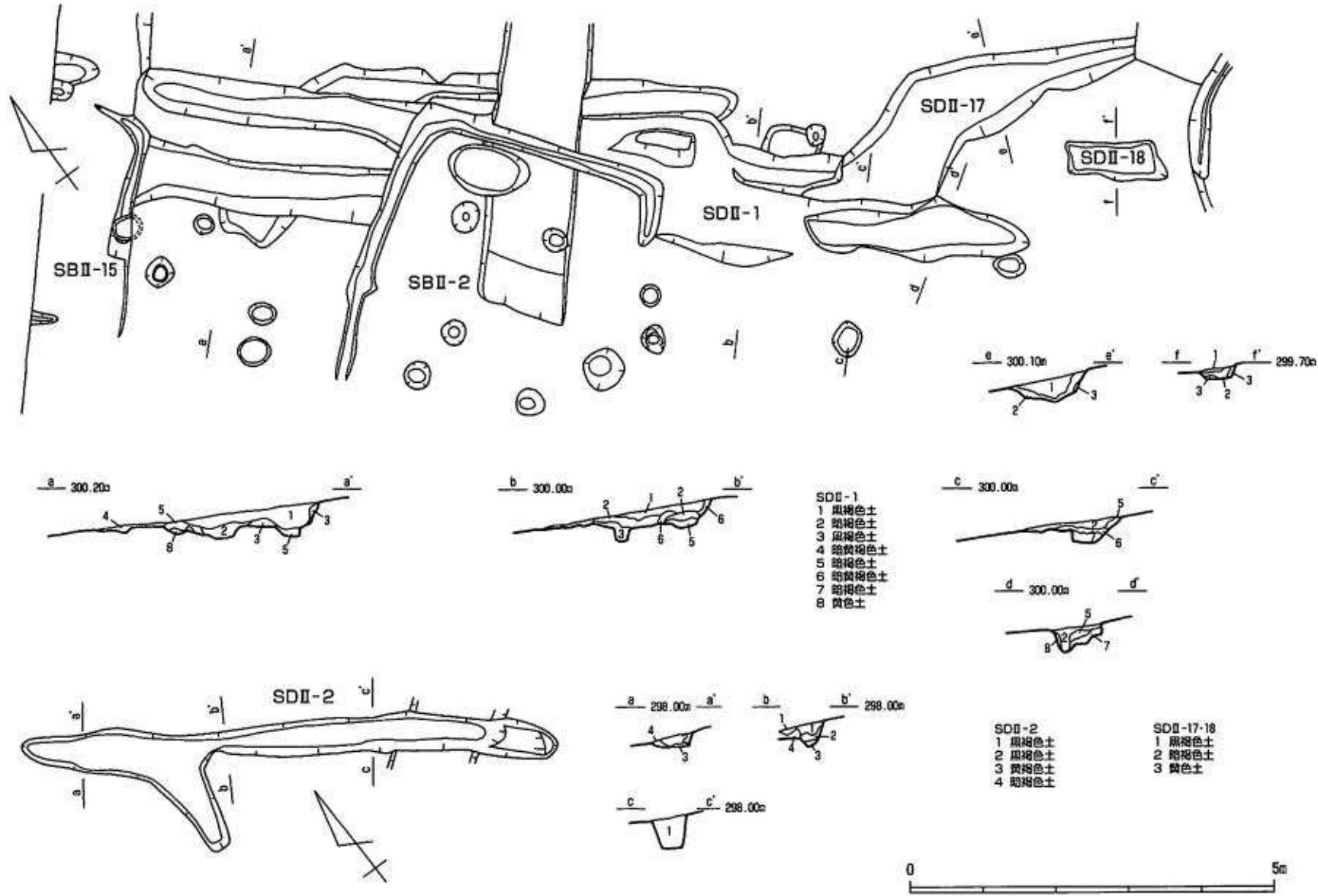
SD II-12～14（第1-29図、図版1-21・b～22・a）は、上段に位置する住居跡群と重複ないし近接して掘削されている。このうち、SD II-13は近接する掘立柱建物跡II-10の棟方向と平行しており、掘立柱建物跡II-10に伴うものと考えられる。また、SD II-14も近接して柱穴を確認しており、何らかの住居状の遺構に伴う可能性が考えられる。

SD II-1・17（第1-27図、図版1-18・a、20・a）は中段の住居跡群に伴うもので、いずれも前面に平坦面を伴うことから、住居状の遺構に伴う溝状遺構の可能性が考えられる。特にSD II-1はSB II-2をはさんで両側に平坦面があり、柱穴も検出されていることから掘立柱建物状の遺構が存在した可能性が考えられよう。

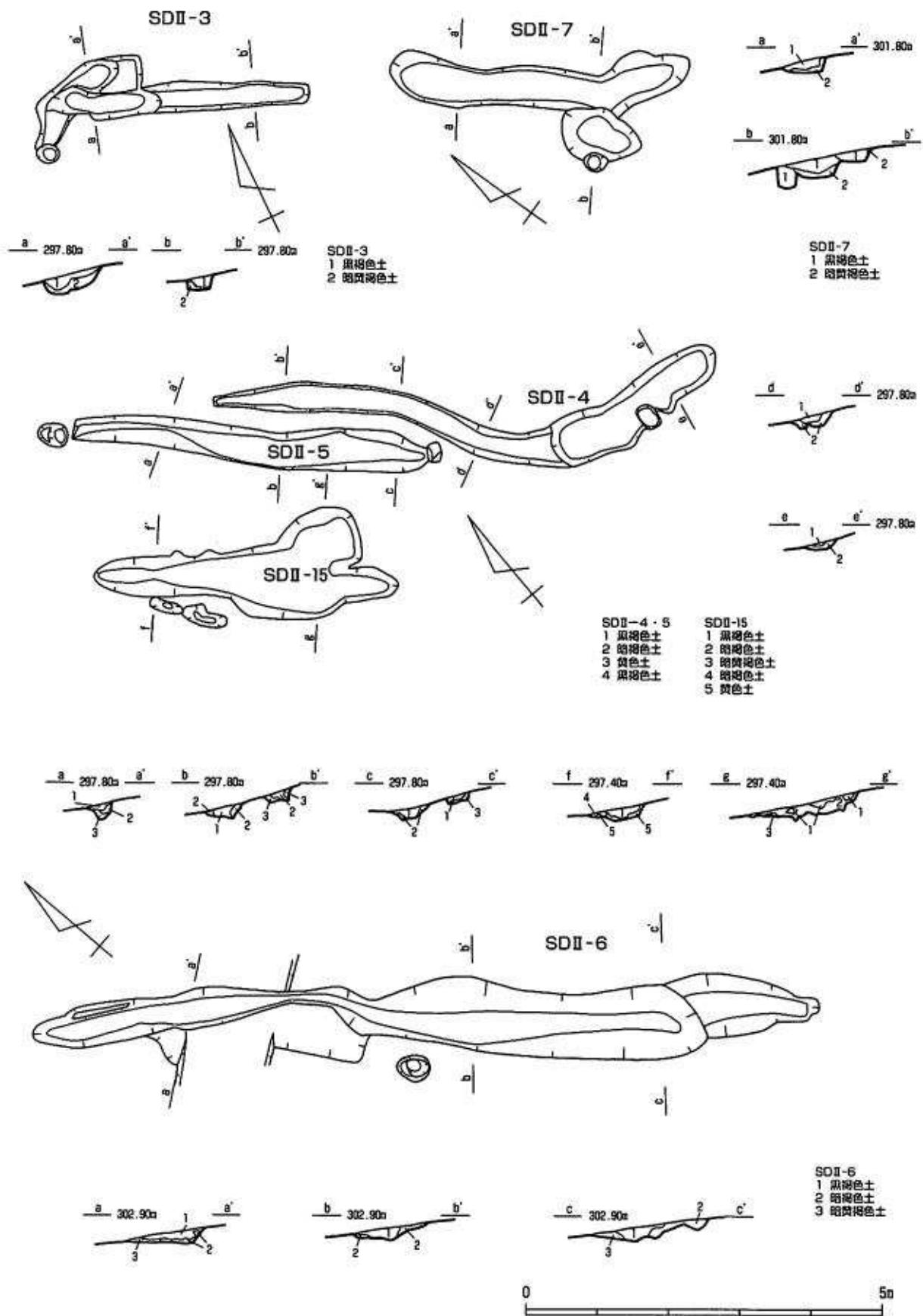
SD II-2～5（第1-27・28図、図版1-18・b～19・b）は、下段住居跡群の斜面上方側に位置する溝状遺構で、不連続ではあるがほぼ直線的に同一等高線上にある。しかし、下段の住居跡群は5軒の竪穴住居跡から構成されており、近辺には掘立柱建物跡が検出されていないことから、直接竪穴住居跡に伴う遺構とは考えがたい。

遺構番号	規 模			時期	出 土 遺 物	遺構番号	規 模			時期	出 土 遺 物
	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)				長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)		
SD II-1	9.25	40～90	25～30	弥・後・後	弥生土器(甕・壺・高杯)、鐵石	SD II-11	3.5	25～55	15～20	弥・後・後	弥生土器(甕)
SD II-2	5.6	25～40	15～35	弥・後・後	弥生土器(甕・高杯)	SD II-12	9.2	25～55	10～30	弥・後・後	弥生土器(鼓形器台・高杯)
SD II-3	2.8	20～25	10～20	弥・後・前	弥生土器、磨製石斧	SD II-13	4	—	5～30	古・中	丸底壺
SD II-4	—	20～40	5		弥生土器	SD II-14	5.9	30～80	10～20	古・中	上師器(甕)
SD II-5	6.2	25～75	10～15		弥生土器	SD II-15	3.2	40～80	10～15	古・中	土師器(甕)
SD II-6	8.3	15～80	10～15	弥・後・後	古式土師器(甕・小型丸底壺)	SD II-16	—	20～45	8～15		?
SD II-7	3.1	35～50	25～55		弥生土器(壺)	SD II-17	—	25～80	8～30	古・前	古式土師器(小型丸底壺)
SD II-8	7.6	35～50	5～10	古・前	土師器(甕・小型丸底壺・高杯)	SD II-18	1	35～40	7～20	弥・後・後	弥生土器
SD II-9	2.8	—	5～10	弥・後・後	弥生土器(甕)	SD II-19	—	20～30	8～10		?
SD II-10	2.7	50～70	5～10		?	SD II-20	—	—	10～30	弥・後・後	弥生後期土器
						SD II-21	—	—	30～60		?

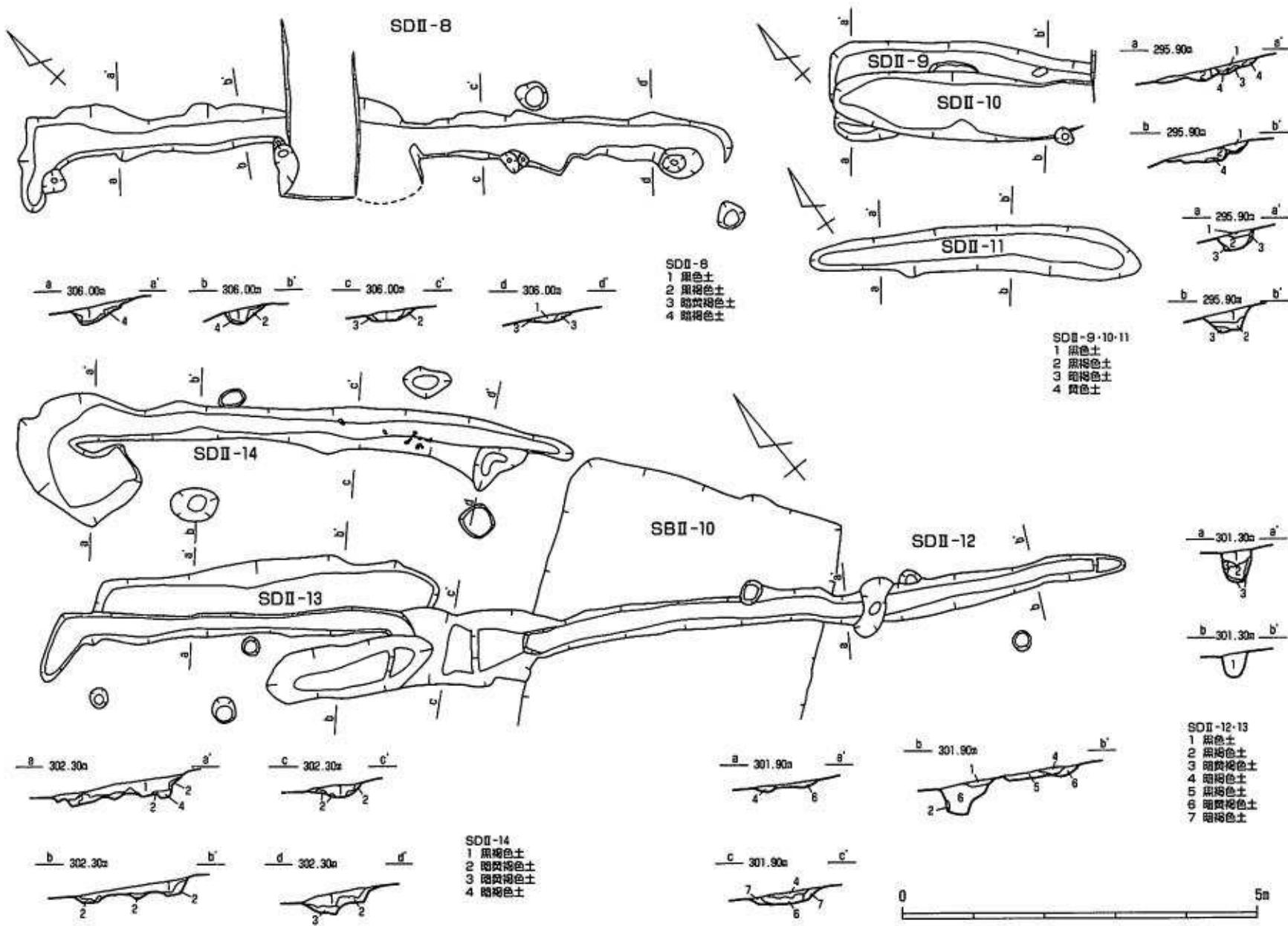
第9表 遺構計測表9



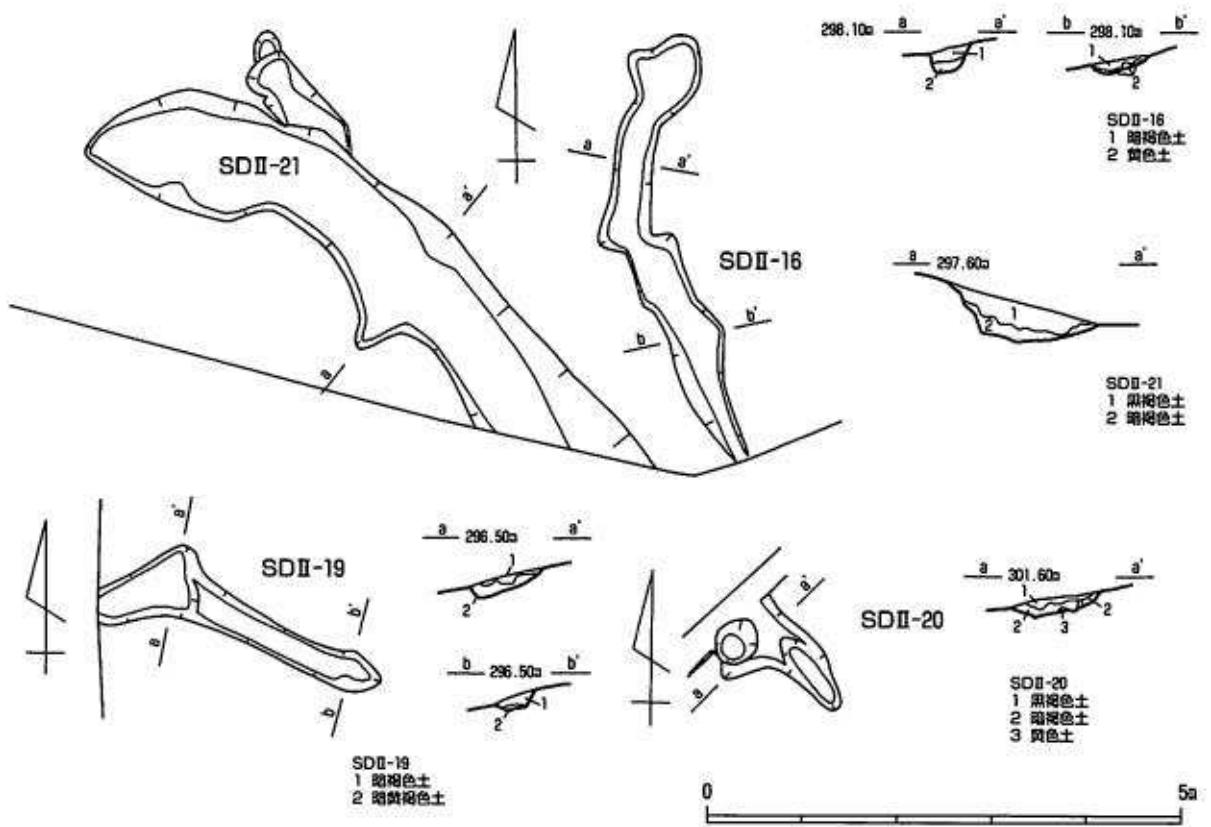
第1-27図 SD II-1・2・17・18実測図 (1:80)



第1-28図 SD II - 3 ~ 7 · 15 実測図 (1 : 80)



第1-29図 SD II-8~14実測図 (1:80)



第1-30図 SD II - 16・19~21実測図 (1:80)

### (3) 出土遺物

竪穴住居跡を中心に弥生時代中期中頃以降、古墳時代後期までの土器や石器、鉄器などが出でている。特徴としては、弥生時代中期のSBII-7や出土遺物の少ないSBII-1・9・13～15を除いた弥生時代後期以降の竪穴住居のほとんどから、河原石を利用した敲石や台石などが出土していることがあげられる。敲石の使用痕や熱を受けた台石の存在などから、これらの多くが鉄器の鍛造や研磨などに用いられた可能性が高く、集落全体が弥生時代後期以降、家内加工的な鍛冶作業に関わっていたと推定される。また土器類では、古墳時代後期の土師器に伴う須恵器が少ないことも特徴である。須恵器は表土層から出土した7世紀前半ごろの杯身と高杯（第1～39図125・126）のほかは、初期須恵器の破片が3片（第1～40図127～129）出土したのみである。以下では、1土器、2須恵器、3鉄製品、4石器に分けて記述する。

#### 1 土器

最も古い時期の土器はSBII-7の弥生時代中期中頃の土器で、終末は古墳時代後期の土師器である。これらのなかには、煮沸と吹きこぼれ痕跡のある高杯の杯部（第1～32図19）や山陰系の大型甌形土器（第1～33図36）、線刻のある壺（第1～34図38）などやや特殊なものもある。

SBII-1（第1～31図1～2）1・2は椀で、内外面ともナデ調整。2は内面を強くナデて、口縁下に段差をつくりだす。時期は古墳時代後期である。

SBII-2（第1～31・32図3～15）3は壺と推定され。丸底の底部に球形の胴部がつく。内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整の後、指頭圧痕をのこすナデとする。4～6は甌で、4は丸底の底部に球形の胴部、外反する口縁部がつく。口縁部内外面を横ナデ、胴部外面はハケ目調整とし、胴部内面は頸部までヘラケズリするもの（5）、頸部下までヘラケズリするもの（6）、胴部最大径付近までしかヘラケズリしないもの（4）がある。7～10は椀で、全体をナデ仕上げとするが、体部外面や内底面に指頭圧痕を残すものが多い。10は成形時に口縁部が変形して不整梢円形を呈する。意図的に変形したものか、焼成時に偶然変形したものかは判然としない。11・12は高杯で、脚柱部は中実で脚裾部内面のえぐりは浅い。杯部は屈曲のない皿状、あるいは半球形を呈する。13は甌で、底部は円形に開口し、底部側面に焼成前の非対称の穿孔が二箇所ある。口縁部はゆるやかに外反し、体部の中央に鉤形の把手がつく。底部外側面はヘラケズリ、体部外面は縦方向のハケ目を残す。体部内外面に成形時の粘土帯接合の痕跡を残し、調整は丁寧ではない。14も甌の口縁部の破片かと思われる。15は移動式カマドである。焚き口の底部の破片で、大きく湾曲している。時期は古墳時代後期である。

SBII-3（第1～32図16～19）16～18は二重口縁の甌で、口縁外面が無文のもの（16）と5条程度の凹線文をめぐらすもの（17）、板状工具によるハケ目を施した上に2条の沈線をめぐらせたもの（18）がある。17は頸部にも2条の凹線文を施し、形態的に壺に近い。口縁端部は丸くおさめるもの（16）とやや矩形を呈するもの（17・18）がある。内面頸部以下をヘラケズリ、その他はナデを多用するが、18は口縁内面や胴部外面にヘラミガキを施し、この時期の甌の調

整としてはやや特異である。19は高杯で、脚柱部より上が完存している。杯部が屈曲して立ち上がるタイプの高杯で、屈曲部より上の外面に太い凹線状の凹面が2条めぐる。杯部内面は中心付近では放射状のヘラミガキ、周縁は横方向のヘラミガキが丁寧に施される。外面はハケ目がわずかに残るナデ調整で一部にヘラミガキを施す。杯部内面には全面に黒色のこげつき状の付着物が認められ、外面には杯部から脚柱部にかけてふきこぼれ状の付着物が認められる。脚柱部の破断面にはこれらの付着はなく、煮沸は脚部が完存していた時に行われたものと思われる。また、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が顯著であるが、これも熱によって変質している。これらのことから、高杯は完形の状態で火にかけられ、杯部で何かを煮沸したものと推測される。こうした通常ではない高杯の使われ方は、何らかの儀式的な行為にこの高杯が使用されたことを思わせる。時期は弥生時代後期後半ごろである。

SB II-4 (第1-32図20~26) 20は壺で、短く開く口縁部に球形の胴部がつく。内面は胴部上半以下をヘラケズリとする。21~24は二重口縁の甕で、外反して短く開く口縁部は端部を丸くおさめる。口縁外面は無文であるが、21は下端を強くナデて突出させている。内面は頸部以下をヘラケズリとし、24の頸部下には一部ヘラミガキを施す。25は鉢で、「く」の字状に短く外反する口縁部にポール状の体部がつく。体部内面は板状工具によるハケ目、外面は布などによる細かいナデ調整を施す。26は壺の底部で、やや張り出し気味の大きな底部の内面は丁寧にヘラケズリされ、器壁は均一に薄くつくられている。内面の底部側面にはこげつきが顯著に認められ、煮炊きに使用されたことが明らかである。一方、外面には赤色顔料が塗布された痕跡も認められ、壺の形態をとりながら煮炊きに使用されたことなどを含めて、やや特殊な用途に使用された土器の可能性が高い。時期は、弥生時代後期後葉ごろを主体とし、20の壺や25の鉢は古墳時代前期に含まれる可能性がある。

SB II-5 (第1-33図27~36) 27は壺で、口縁部は短く開き、球形の胴部がつくようである。胴部内面はヘラケズリで、口縁部の内外面に横方向のハケ目がのこる。28~32は二重口縁の甕で、口縁部外面は無文のものが多いが、31の口縁部外面には、わずかながら凹線文風の凹凸がめぐる。頸部下には貝殻腹縁によるノの字状刺突文を施す28やヘラによる「ノ」の字状文を施す30がある。すべて内面頸部以下はヘラケズリとする。33・34は高杯の杯部と脚部で、杯部は屈曲して開き、口縁部は内傾して拡張する。拡張面に不明瞭な凹線状の凹凸がめぐる。脚部は、やや太い脚柱部に短く開く裾部がつく。端面は丸くおさめ、脚柱部内面はヘラケズリ、その他はヘラミガキとする。35は器台の受け部で、柱部からゆるやかに開き、受け部は二重口縁状に屈曲して開く。内外面ともナデ仕上げで、外面にわずかにハケ目がのこる。36は管状把手のつく大型甕形土器で、口縁部はラッパ状に開く。内面上半はヘラミガキ、下半はナデとし、外面にはハケ目がのこる。把手内部の使用痕跡などは明瞭ではなく、外面の煤の付着も認められない。時期は、弥生時代後期後半頃である。

SB II-6 (第1-34図37~44) 37~39は壺で、短く開く口縁部に球形の胴部、丸底の底

部がつくと推定される。38の胴部上半にはヘラによる不規則な沈線文が施されるが、明確な絵画や記号として把握できるものではない。37と38の外面には煤が付着しており煮炊きに用いられたことがわかる。胴部内面はヘラミガキを主体とし、外面はハケ目をのこす。39の口縁端面はハケ目状のナデが施される。40～42は二重口縁の甕で、口縁外面は無文化したものである。43・44は高杯の杯部で、杯部は湾曲して開き口縁端部は尖り気味に仕上げる。44の杯部内面は、櫛歯状工具による粗いハケ目を明瞭にのこし、高杯としてはやや特異な調整を行う。時期は古墳時代前期である。

**S B II-7** (第1-34図45・46) 45は鉢で、「く」の字に短く屈曲する口縁部にボール状の体部がつく。口縁端部は跳ね上げ気味に仕上げ、体部には頸部下に1条の沈線をめぐらせ、中央部に貝殻腹縁による「ノ」の字状刺突文を施す。体部外面下半および内面はヘラミガキで、体部外面上半にはハケ目がのこる。46は甕で、「く」の字に短く屈曲する口縁部に長胴の胴部がつく。口縁端部は跳ね上げ気味になり、端面には浅い凹線文を1条めぐらせる。胴部中央には櫛歯状工具による「ノ」字状刺突文がめぐる。櫛歯の本数は8本である。内外面ともハケ目調整のうちにヘラミガキとし、特に内外面とも下半は丁寧にヘラミガキを施す。胴部下半には煤が付着し、煮炊きに使用されたことがわかる。時期は弥生時代中期中頃である。

**S B II-8** (第1-35図47～56) 47・48は小型丸底壺で、直線的に開く口縁部に球形の胴部がつく。外面はナデ調整を主体に一部にハケ目がのこる。胴部内面はヘラケズリである。49は小型の甕で、短く開く口縁部に球形の胴部がつく。外面はハケ目を明瞭にのこし、内面はヘラケズリする。外面には煤が付着する。50・51は手づくねの小型土器である。52・53は甕で、短く開く口縁部に球形の胴部がつく。52は口縁端部が尖り気味になり、53は内傾して端面がやや窪む。胴部外面はハケ目、内面は指頭圧痕をのこすナデ調整である。53の胴部内面には明瞭な粘土帯接合痕がのこり、胴部最大径付近には煤が付着している。54～56は高杯で、54では杯部が屈曲して開く。脚柱部の内面はヘラケズリする。時期は古墳時代前半である。

**S B II-9** (第1-35図57～60) 57・58は小型丸底壺で、58では胴部外面はハケ目がわずかにのこるナデ調整、内面はヘラケズリとする。59・60は二重口縁の甕で、59の口縁部外面には、櫛歯状工具による5条の凹線状の文様が二段に重複して施される。内面頸部以下はヘラケズリとする。時期は古墳時代前半である。

**S B II-10** (第1-35図61～63) 61は鉢で、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整とする。62・63は甕で、ゆるやかに湾曲して開く口頸部に長胴の胴部がつく。62は器壁の厚い小型の甕、63は通常の甕である。時期は古墳時代後期である。

**S B II-11** (第1-36図64・65) 64は二重口縁の甕で、口縁部外面は板状工具によるナデの痕跡がのこる。65は器台の受け部で、ラッパ状に開く受け部の内面はヘラミガキ、外面はハケ目がのこる。時期は弥生時代後期後半である。

**S B II-12** (第1-36図66～75) 66～71は甕で、66・67は口縁部が直立気味に短く開く。68～70は二重口縁の甕で、69は形態的に壺になる可能性が高い。71は口縁部が「く」の字状に

開く。完形品の70では胴部外面はハケ目調整とし、内面も粗いハケ目調整とする。外面の大半に煤が付着し、日常の煮炊きに使用されたことがわかる。72～75は高杯の杯部で、屈曲をもつて開く杯部である。時期は古墳時代後半である。

SB II-15 (第1-36図76) 76は二重口縁の甕で、口縁部は外反気味に短く立ち上がり、外面は無文である。時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-1 (第1-37図77～83) 77は小型丸底壺で、外湾気味に開く口縁部にやや扁平な胴部がつく。外面にハケ目がのこり、内面は指頭圧痕をのこし無調整である。78～82は二重口縁の甕で、口縁部は外反気味に短く開く。口縁端部は肥厚して丸くおさめ、外面は無文。完形品の82では、安定感のある平底がつき、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリとする。83は高杯の脚柱部で、脚柱部外面は面取り状にナデ調整がなされ、内面はヘラケズリとする。杯部内面はハケ目がのこるナデ調整。時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-2 (第1-37図84～86) 84・85は二重口縁の甕で、口縁部は外反して立ち上がり外面は無文である。84の頸部下には板状工具によるノの字状刺突文がめぐる。86は高杯の杯部で、口縁部は屈曲して立ち上がる。内外面ともヘラミガキとナデを多用し、時期は弥生時代後期後葉。

SD II-3 (第1-37図87) 87は高杯、または鉢の口縁部で、口縁部がわずかに屈曲して外に開く。内外面ともヘラミガキを丁寧に施す。時期は弥生時代後期前葉である。

SD II-6 (第1-37図88) 88は二重口縁の甕で、口縁部は外傾して開き、外面に櫛齒状工具による10条程度の浅い凹線状の文様を施す。時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-8 (第1-37図89～93) 89は小型丸底壺で、やや外傾して直線的に開く口縁部に球形の胴部がつく。外面には棒状工具で刺突した円文が不規則に施される。胴部内面はヘラケズリに似た強い横ナデ、外面にはハケ目をのこす。90・91は短頸壺で、短く立ち上がる口縁部に球形の胴部がつくようである。92・93は高杯の脚部で、脚柱部からゆるやかな屈曲をもって脚裾部が開く。外面にハケ目の痕跡がのこり、内面はヘラケズリとする。時期は古墳時代前期である。

SD II-9 (第1-38図94・95) 94・95は二重口縁の甕で、口縁部は外傾して開き、外面は無文である。内面は頸部以下をヘラケズリとする。時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-11 (第1-38図96) 96は二重口縁の甕で、口縁部はやや外湾気味に開き、外面は無文で、時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-12 (第1-38図97・98) 97は二重口縁の甕で、口縁部は外湾気味に開くようで、外面は無文である。内面は頸部付近をヘラミガキ、それ以下をヘラケズリとする。98は高杯の杯部で、杯部は内湾して口縁端部は尖り気味となる。外面にハケ目をのこし、内面はナデ調整。時期は弥生時代後期後葉である。

SD II-13 (第1-38図99) 99は丸底壺の胴部で、胴部はやや扁平なタマネギ形を呈し、外面のハケ目をのこし、内面は指頭圧痕をのこす。時期は古墳時代中期である。

SD II-14 (第1-38図100・101) 100は短頸壺の口縁部で、短く立ち上がる口縁部の内面は横方向のハケ目調整で、口縁端部には粘土帶を折り返したような筋がある。101は二重口縁

の甕で、口縁部はやや外傾して開く。成形は70に類似している。時期は古墳時代中期である。

S D II - 15 (第1-38図102) 102は甕で、口縁部が「く」の字状に開き球形の胴部がつく。口縁端部及び頸部下にヘラによる沈線を1条めぐらす。内外面ともハケ目をのこし、内面の頸部以下はヘラケズリとする。時期は古墳時代中期である。

P II - 3・11 (第1-38図103) 103は丸底壺で、口縁部はやや外傾して開き口縁端部は強くナデてやや外反させる。胴部はやや肩の張った形態で、内面に指頭圧痕と粘土帶接合痕を明瞭にのこす。口縁部 (P II - 3) と胴部 (P II - 11) は別々のピットから出土しており、これらが互いに離れていることから、本来別個体の可能性もある。時期は古墳時代前期である。

P II - 4 (第1-38図104) 104は二重口縁の壺で、口縁部は直立し外面に櫛歯状工具による櫛描文を施し、同様の手法で頸部にも櫛描文をめぐらせる。頸部内面以下をヘラケズリとする。時期は弥生時代後期後葉である。

P II - 2 (第1-38図105) 105は小型丸底壺で、頸部のくびれが弱く胴部と口縁部の境界は明瞭ではない。外面に横方向のハケ目をのこし、内面はヘラケズリ状の強いナデによる成形を行う。時期は古墳時代中期である。

S K II - 4 (第1-38図106) 106は壺または高杯、鉢の口縁部で、大きく開く口縁部の端面を拡張し、上面に半裁竹管による2条の斜線文と円形浮文を施す。時期は弥生時代中期中葉。

遺構に伴わない土器 (第1-39図107~126) 107は壺の胴部で、胴部上半に断面三角形の貼付突帯を3条めぐらせ、その上方にヘラによる斜線文を施す。内面はハケ目、外面はヘラミガキを多用する。時期は弥生時代中期後葉である。108は短頸壺の口縁部で、短く立ち上がる口縁部の端部は強くナデて外反させる。時期は古墳時代中期である。109~117は二重口縁の甕で、109~112・114・115・117のように口縁部が外傾して開くものと、113・116のようにほぼ直立するものがある。直立するものでは口縁部外面に明瞭な凹線文を施し、外傾するものでは無文のものが多い。110には赤色顔料による彩色が施される。時期は113・116が弥生時代後期前葉、109~112・114・115が弥生時代後期後葉で、117が弥生時代後期末葉である。118~120は高杯の杯部で、118のように杯部に屈曲がなく口縁端部を拡張するものと、119・120のように杯部が屈曲して開き、口縁端部が尖り気味になるものがある。時期は118が弥生時代後期前葉、119が弥生時代後期末葉、120が古墳時代前期である。121は器台の受け部で、受け部上方は二重口縁状を呈し、外面に櫛歯状工具による櫛描文が施される。時期は弥生時代後期前葉である。122~124は壺の底部である。時期は122が弥生時代後期後葉、123が弥生時代後期前葉、124が弥生時代後期末葉頃であろう。125は須恵器の杯身で、立ち上がり部は外湾気味、受け部は内湾気味に成形され、底部は回転ヘラ切り。126は須恵器の高杯の脚部で、裾部は折り返して成形した低脚の高杯である。時期はとともに7世紀前葉。

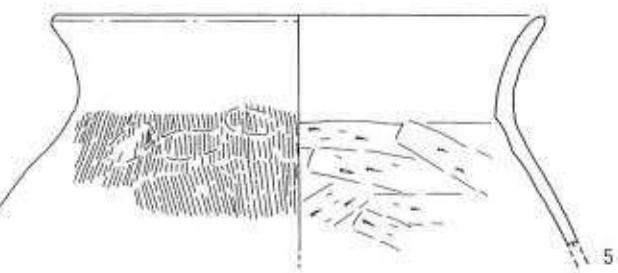
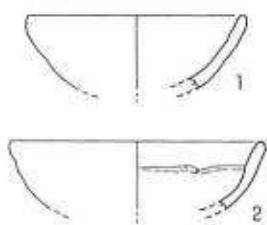
第10表 造物観察表1

遺構番号	種別	揮団番号	器種	大きさ(cm)			色調(外面)	胎土	時期	備考
				口径	高さ	最大径				
SBII-1	土師器	1	椀	8.8	—	—	淡黄褐色	細砂粒含	古・中～後	
		2	椀	10.2	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		
		3	壺	—	—	16.6	淡黄褐色	長石・石英粒含		
		4	甕	21	31.5	28.8	明黄褐色	砂粒含		
		5	甕	18.7	—	—	淡茶褐色	長石・石英粒含		
		6	甕	17.4	—	—	淡黄褐色	長石粒含		
		7	椀	9.4	3.8	—	淡黄褐色	長石・石英粒含		
		8	椀	9.9	4.6	—	灰茶褐色	長石粒含		
		9	椀	10.6	5.5	—	灰茶褐色	長石・石英粒含		
		10	椀	9.7	5.7	—	明黄褐色	長石粒含		口縁歪む
SBII-2	土師器	11	高杯	—	—	—	淡茶褐色	長石粒含	古・中～後	
		12	高杯	12.8	8.5	—	黃褐色	長石・石英粒含		
		13	甕	21.4	21	19.1	黃褐色	長石・石英粒含		底部側面に2孔
		14	甕	24.8	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		
		15	カマド	—	—	—	淡赤褐色	細砂粒多含		
		16	甕	13.8	—	—	淡茶褐色	長石粒含		
		17	甕	13.7	—	—	黃褐色	細砂粒含		頸部に凹線2条
		18	甕	24.2	—	—	淡黄褐色	砂粒・小礫含		
		19	高杯	23	—	—	淡黄褐色	長石・雲母粒含		杯部に煮沸痕跡
		20	壺	12	—	—	黃褐色	砂粒・小礫含		
SBII-3	弥生土器	21	甕	16.2	—	—	淡黄褐色	細砂粒含	弥・後・後	
		22	甕	17.5	—	—	暗茶褐色	長石粒含		
		23	甕	16.8	—	—	淡黄褐色	長石粒含		
		24	甕	21.3	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		
		25	鉢	11.4	—	5	淡黄褐色	細砂粒含		
		26	壺(底)	—	—	—	淡灰褐色	長石・石英粒含		外面に赤彩痕跡
		27	壺	16.4	—	—	黃褐色	砂粒・小礫含		
		28	甕	13.6	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		貝殻腹縁文
		29	甕	14.7	—	—	淡茶褐色	細砂粒含		
		30	甕	14	—	—	淡黄褐色	砂粒・小礫含		
SBII-4	弥生土器	31	甕	17.8	—	—	淡灰褐色	長石・石英粒含	弥・後・後	
		32	甕	19	—	—	淡茶褐色	細砂粒含		
		33	高杯	24.8	—	—	暗褐色	細砂粒含		
		34	高杯	—	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		
		35	器台	—	—	—	淡茶褐色	凝灰岩粒含む		大型器台
		36	大型甕	32	—	—	淡灰褐色	長石・石英粒含		管状把手
		37	壺	—	—	11	黃褐色	長石・石英粒含		
		38	壺	—	—	19.5	淡赤褐色	凝灰岩粒含む		線刻模様
		39	壺	17.6	—	—	明黄褐色	長石・石英粒含		
		40	甕	15.2	—	—	淡茶褐色	砂粒含		
SBII-5	弥生土器	41	甕	15.6	—	—	淡茶褐色	砂粒含	弥・後・後	
		42	甕	16.5	—	—	淡茶褐色	砂粒含		
		43	高杯	13.8	—	—	黃褐色	砂粒含		
		44	高杯	16	—	—	淡黄褐色	石英粒含		杯部内面に粗いハケ目
		45	鉢	15.6	—	14.2	淡黄褐色	石英粒含		貝殻腹縁文
		46	甕	16.6	—	20.2	淡黄褐色	細砂粒含		櫛齒状工具の刺突文
		47	壺	9.8	8.9	9	明褐色	細砂粒含		
		48	壺	9.6	—	10.2	明褐色	砂粒含		
		49	甕	10.6	10.9	11.9	黃褐色	長石・石英粒含		
		50	壺	4.7	5.1	5.2	淡褐色	細砂粒含		
SBII-6	弥生土器	51	壺	3.5	4.7	5.3	淡褐色	細砂粒含	古・前	
		52	甕	14.4	—	—	暗褐色	細砂粒含		
		53	甕	15.8	—	—	暗灰褐色	砂粒多含		
		54	高杯	—	—	—	暗灰褐色	砂粒多含		
		55	高杯	—	—	—	明褐色	細砂粒含		
		56	高杯	—	—	—	淡灰褐色	長石・石英粒含		
		57	壺	—	—	—	明褐色	砂粒含		
		58	壺	—	—	10.2	暗褐色	長石・石英粒含		
		59	甕	21.2	—	—	淡黄褐色	砂粒含		
		60	甕	20.5	—	—	淡黄褐色	砂粒含		
SBII-7	弥生土器	61	鉢	12	4.3	—	茶褐色	長石・石英粒含	古・中・中	
		62	甕	12.4	—	13.4	淡茶褐色	長石・石英粒含		
		63	甕	18.2	—	—	茶褐色	砂粒含		
		64	甕	19.8	—	—	淡黄褐色	細砂粒含		
SBII-8	土師器	65	器台	16.6	—	—	淡黄褐色	細砂粒含	古・前	
		66	甕	—	—	—	明褐色	砂粒含		
SBII-9	弥生土器	67	甕	—	—	—	明褐色	砂粒含	古・前	
		68	甕	—	—	—	暗褐色	砂粒含		
		69	甕	—	—	—	淡灰褐色	砂粒多含		
		70	甕	—	—	—	暗灰褐色	砂粒多含		
SBII-10	土師器	71	甕	—	—	—	明褐色	砂粒含	古・中～後	
		72	甕	—	—	—	暗褐色	砂粒含		
		73	甕	—	—	—	淡灰褐色	砂粒含		
SBII-11	弥生土器	74	甕	—	—	—	明褐色	砂粒含	古・後・後	
		75	器台	—	—	—	暗褐色	砂粒含		

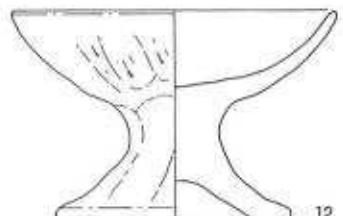
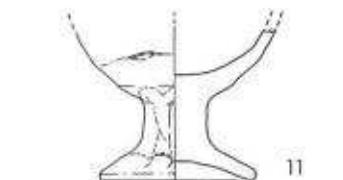
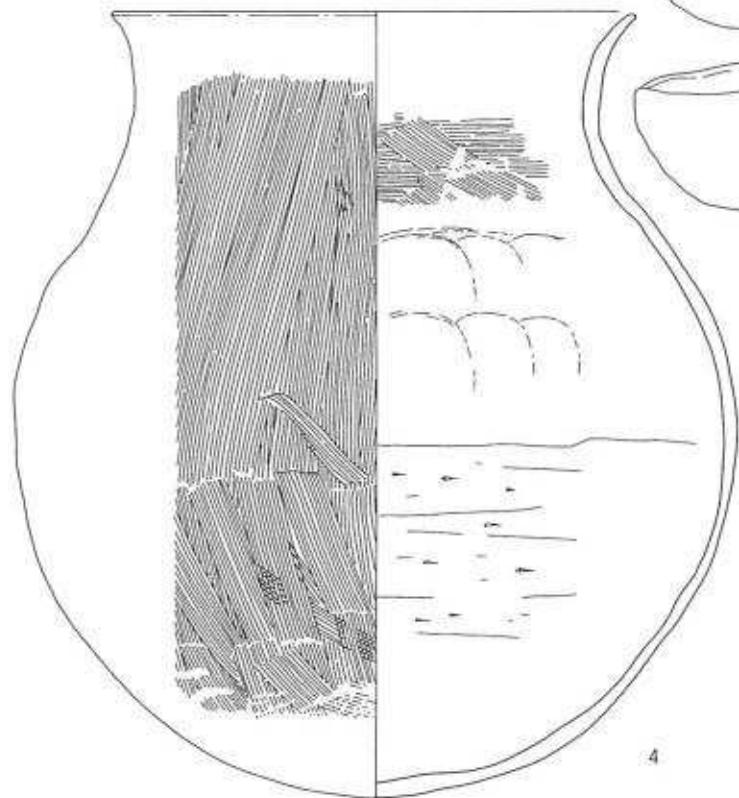
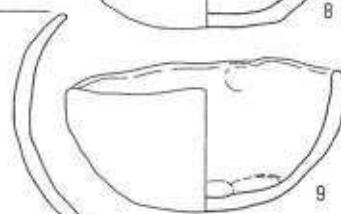
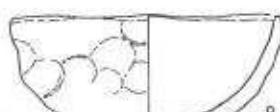
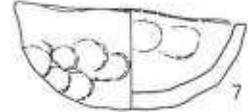
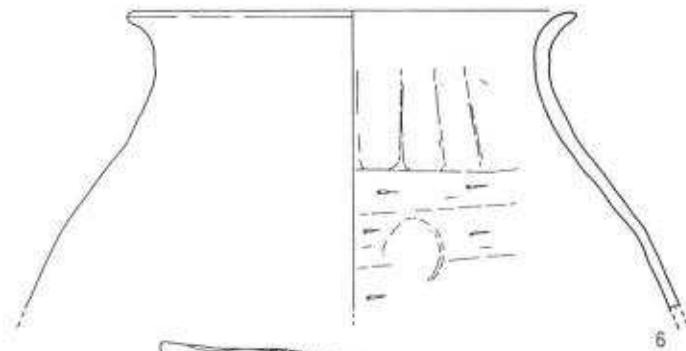
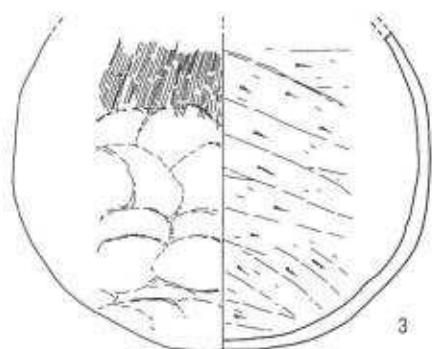
遺構番号	種別	拂図番号	器種	大きさ(cm)			色調(外面)	胎土	時期	備考
				口径	高さ	最大径				
SB II - 12	土師器	66	甕	12.2	-	-	茶褐色	細砂粒含	古・中～後	外面に煤付着顯著
		67	甕	15.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		68	甕	15.6	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		69	甕	15.6	-	-	淡茶褐色	砂粒含		
		70	甕	11.7	21.4	21	淡茶褐色	長石粒含		
		71	甕	14.8	-	-	茶褐色	砂粒含		
		72	高杯	-	-	-	明褐色	砂粒含		
		73	高杯	16.2	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		74	高杯	17.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		75	高杯	19	-	-	淡黄褐色	長石・石英粒含		
SB II - 15	弥生土器	76	甕	23.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SD II - 1	弥生土器	77	壺	-	-	7.6	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
		78	甕	13.6	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		79	甕	15.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		80	甕	15.2	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		81	甕	17.4	-	-	淡黄褐色	長石・石英粒含		
		82	甕	21	18.3	19.7	暗黄褐色	長石・石英粒含		
		83	高杯	-	-	-	明褐色	長石・石英粒含		
SD II - 2	弥生土器	84	甕	17.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SD II - 3	弥生土器	85	甕	22.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SD II - 6	弥生土器	86	高杯	13.6	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SD II - 8	土師器	87	高杯	17.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・前	
SD II - 9		88	甕	13.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SD II - 10		89	壺	6.4	8	8	淡黄褐色	長石・石英粒含	古・前	小型丸底壺
SD II - 11		90	壺	10.8	-	-	暗褐色	細砂粒含		
SD II - 12		91	甕	15	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
SD II - 13		92	高杯	-	-	-	明褐色	砂粒含		
SD II - 14		93	高杯	-	-	-	淡黄褐色	長石粒含	古・中	
SD II - 15	土師器	94	甕	15	-	-	淡黄褐色	砂粒含	古・中	
P II - 3・11	土師器	95	甕	15.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含	古・中	
P II - 4	弥生土器	96	甕	16.8	-	-	暗褐色	砂粒含	弥・後・後	
P II - 2	土師器	97	甕	-	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
SK II - 4	弥生土器	98	高杯	12.6	-	-	暗褐色	砂粒含	弥・後・後	
遺構に伴わ ない遺物	土師器	99	壺	-	-	12.6	淡赤褐色	細砂粒含	古・中	
		100	甕	14.8	-	-	淡黄褐色	長石粒含	古・中	
		101	甕	13.4	-	-	淡黄褐色	長石粒含	古・中	
		102	甕	15.4	-	-	暗褐色	砂粒含	古・中	
		103	壺	10.2	16.7	15	暗褐色	砂粒含	古・前	
		104	壺	12	-	-	淡黄褐色	細砂粒含	弥・後・後	
		105	壺	-	-	7.6	淡黄褐色	砂粒含	古・中	
		106	壺	41.2	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・中・中	口縁上面に円形浮文
		107	壺	-	-	-	淡灰褐色	砂粒含	弥・中・後	SB II - 3
		108	甕	16.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含	古・中	Q7区
		109	甕	13.2	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
		110	甕	13.5	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		111	甕	14.5	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		112	甕	13.8	-	-	淡黄褐色	砂粒含		
		113	甕	18.4	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・前	
		114	甕	21	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
		115	甕	21.2	-	-	茶褐色	砂粒含	弥・後・後	
		116	甕	21.6	-	-	淡赤褐色	砂粒含	弥・後・前	
		117	甕	27.8	-	-	淡黄褐色	長石・石英粒含	弥・後・末	
		118	高杯	18.6	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・前	
		119	高杯	19.2	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・末	
		120	高杯	21.2	-	-	黃褐色	砂粒含	古・前	
		121	器台	19.2	-	-	淡茶褐色	砂粒含	弥・後・前	
		122	壺(底)	11.7	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・後	
		123	壺	-	-	-	淡褐色	砂粒含	弥・後・前	
		124	壺	-	-	-	淡黄褐色	砂粒含	弥・後・末	
		125	杯身	12.4	3.4	14.2	暗灰色	砂粒少なし	古・後	表土
		126	高杯	-	-	-	灰白色	砂粒少なし		表土
		127	壺	-	-	-	暗綠灰色	精良		
		128	壺	-	-	-	淡綠灰色	精良	古・中	
		129	壺	-	-	-	暗綠灰色	精良		

註) 時期の項目の弥・中・中は弥生時代中期中ごろ(III-2様式)、弥・中・後は中期後葉(IV様式)、弥・後・前は後期前葉(V-1様式)、弥・後・中は後期中ごろ(V-2様式)、弥・後・後は後期後葉(V-3様式)、弥・後・末は後期末葉(V-3様式)、古・前は古墳時代前期、古・中は古墳時代中期、古・後は古墳時代後期を示している。なお、弥生時代の様式名は、「弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-」(木耳社 1992年)の「備後地域(北部)」によっている。

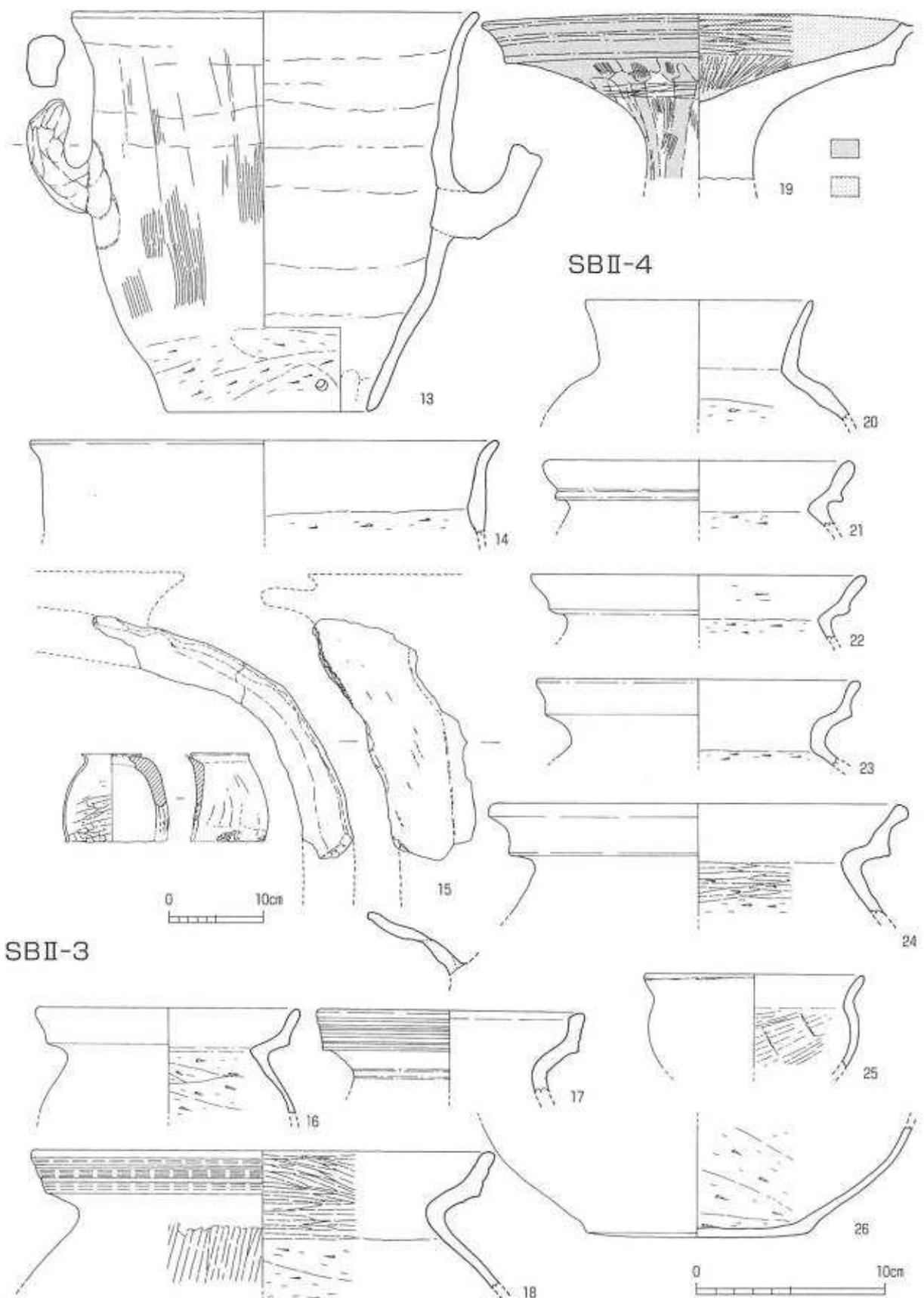
SBII-1



SBII-2

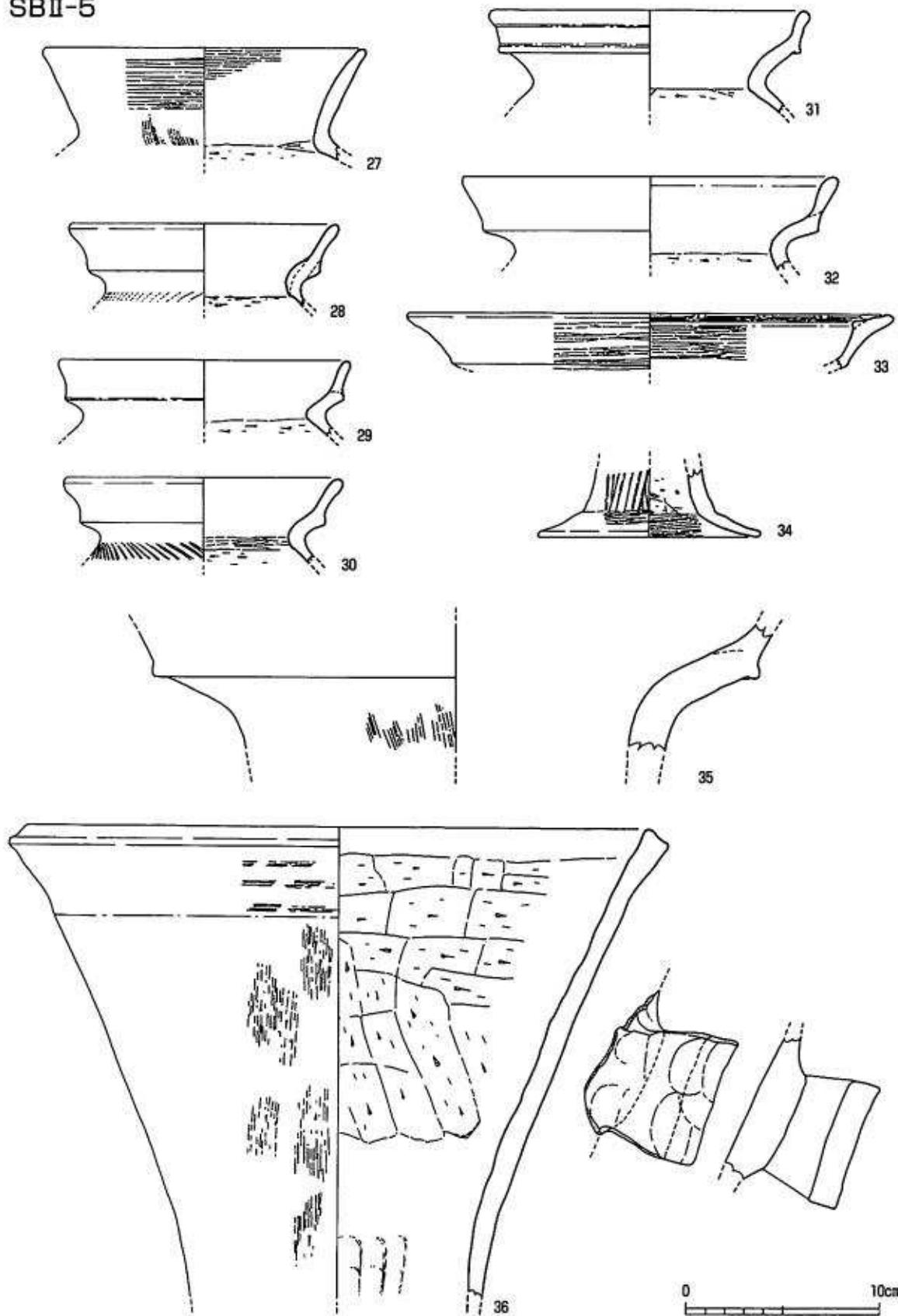


第1-31圖 出土遺物実測図1 (1:3)



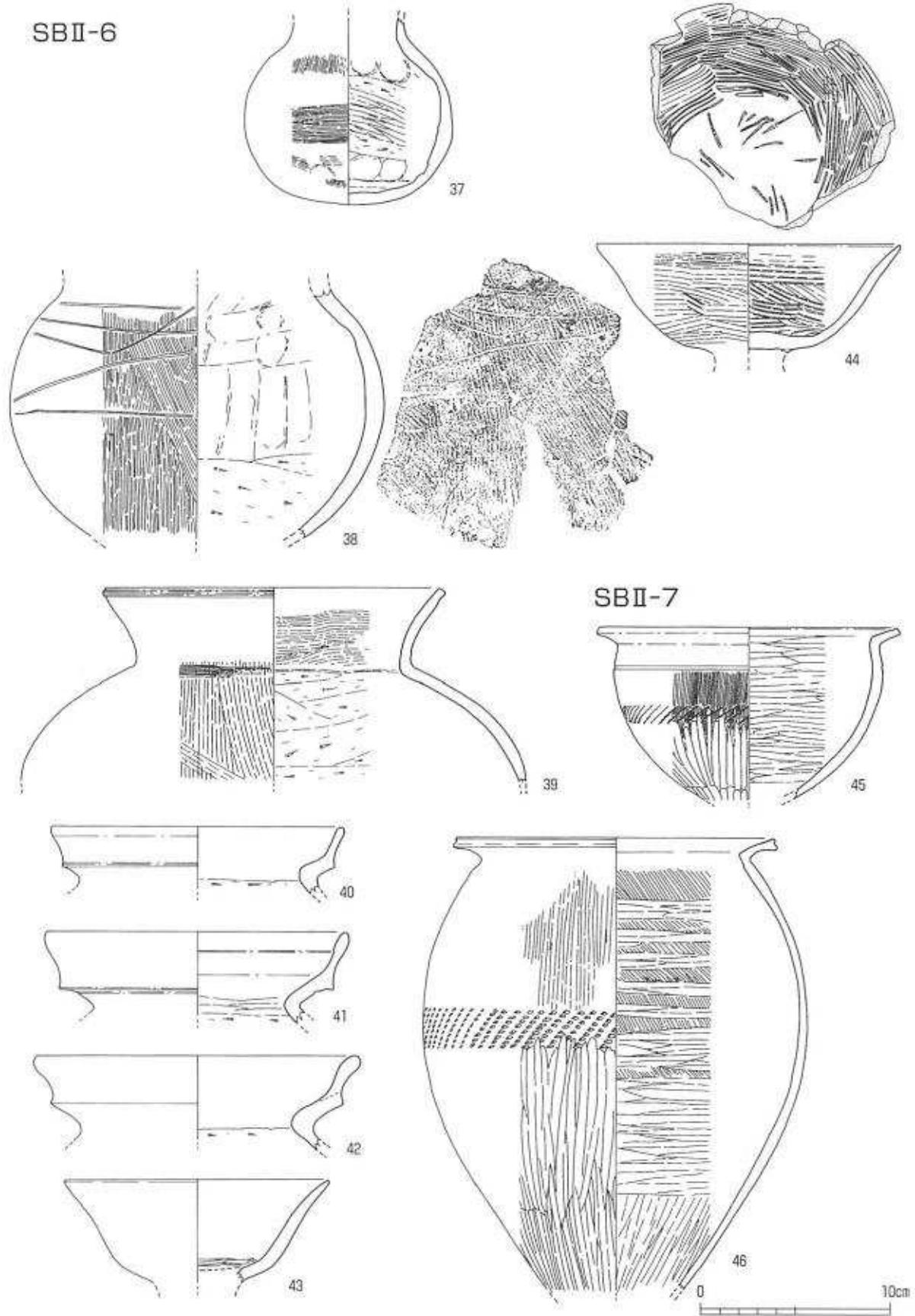
第1-32図 出土遺物実測図Ⅱ (1:3)

SBII-5



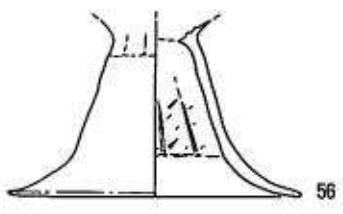
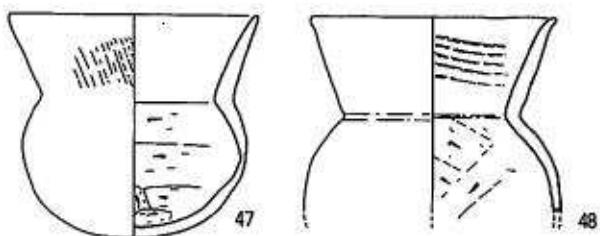
第1-33図 出土遺物実測図Ⅲ (1:3)

SBII-6

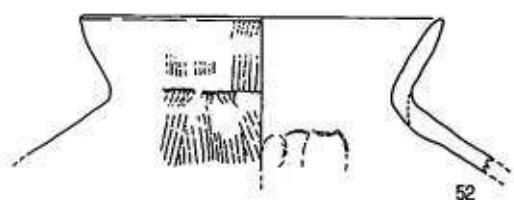
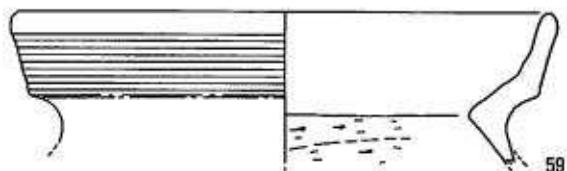
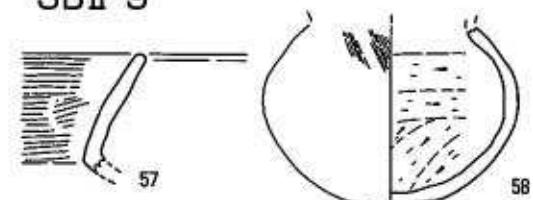
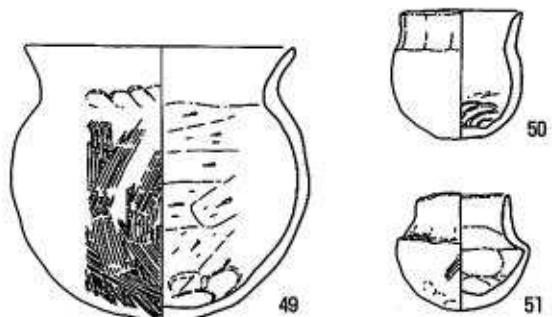


第1-34図 出土遺物実測図IV (1:3)

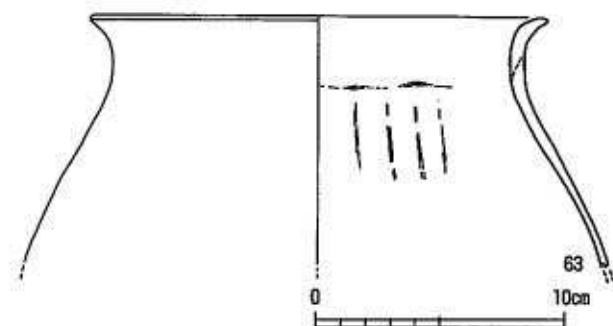
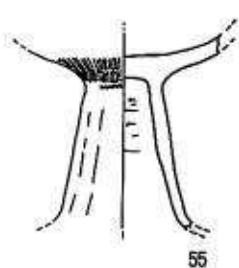
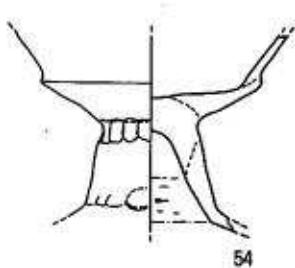
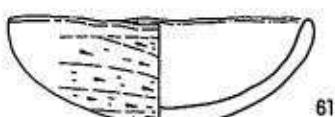
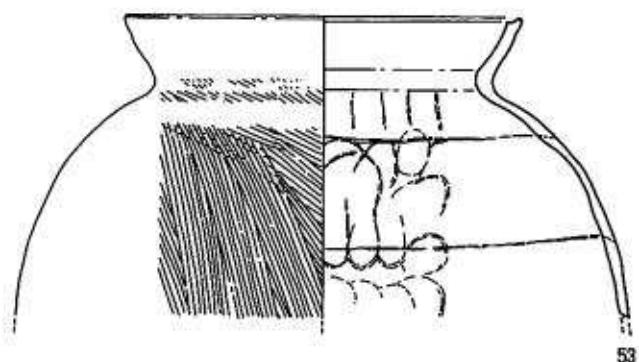
SBII-8



SBII-9

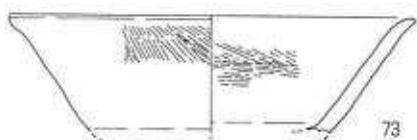
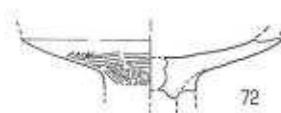
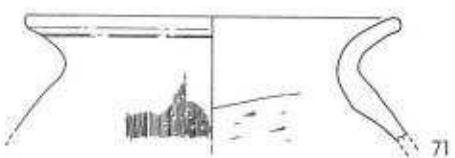
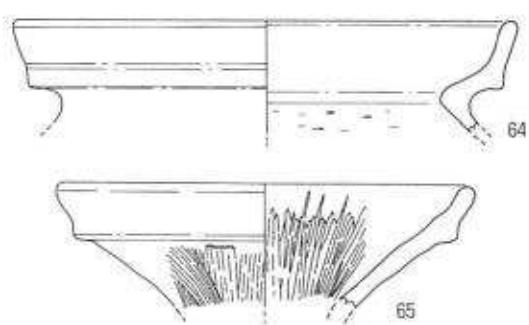


SBII-10

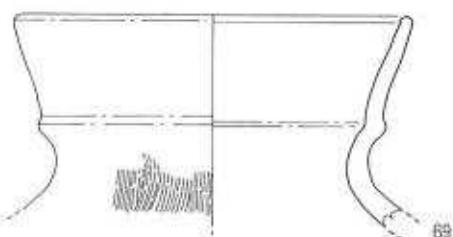
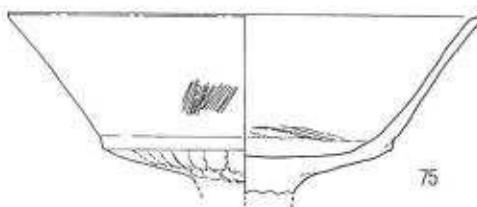
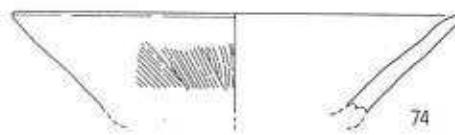
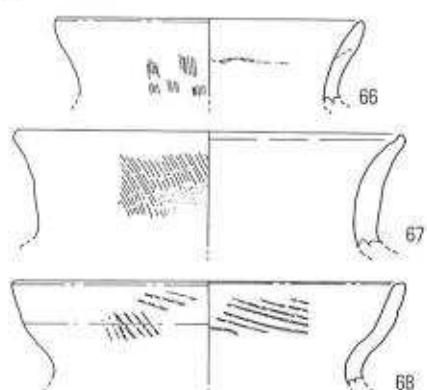


第1-35図 出土遺物実測図V (1:3)

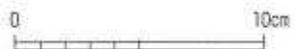
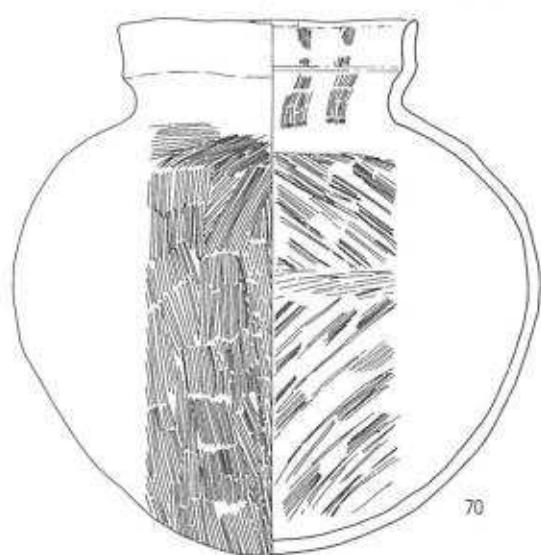
SBII-11



SBII-12

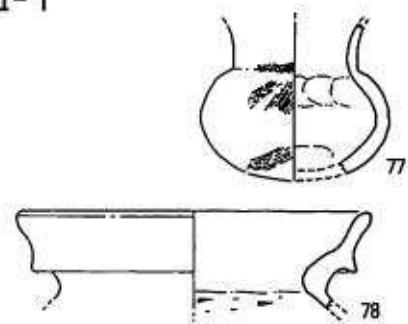


SBII-15

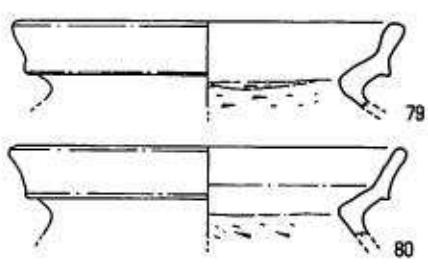
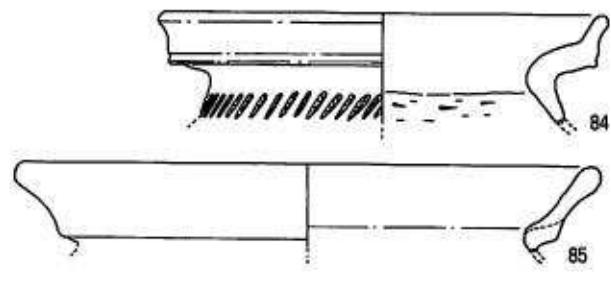


第1-36圖 出土遺物実測図VI (1:3)

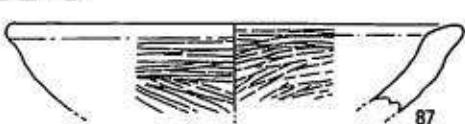
SDII-1



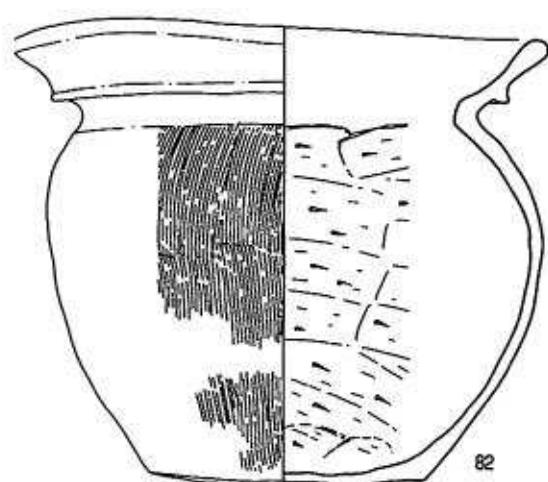
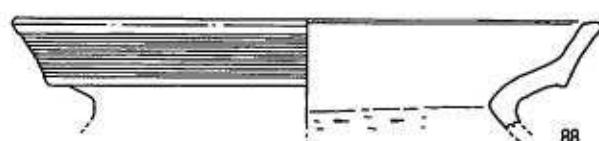
SDII-2



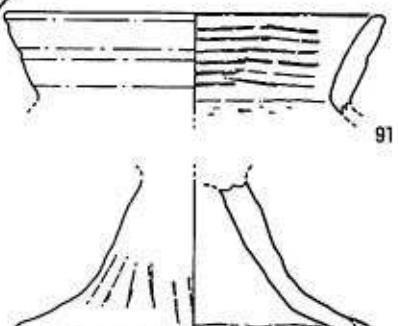
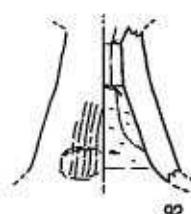
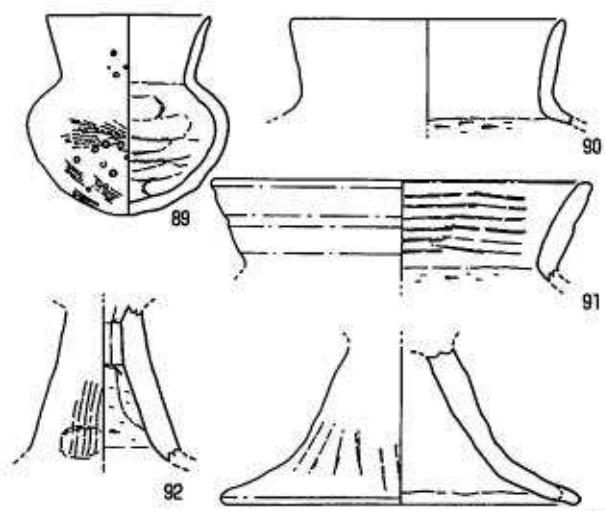
SDII-3



SDII-6

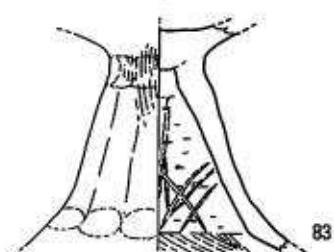


SDII-8

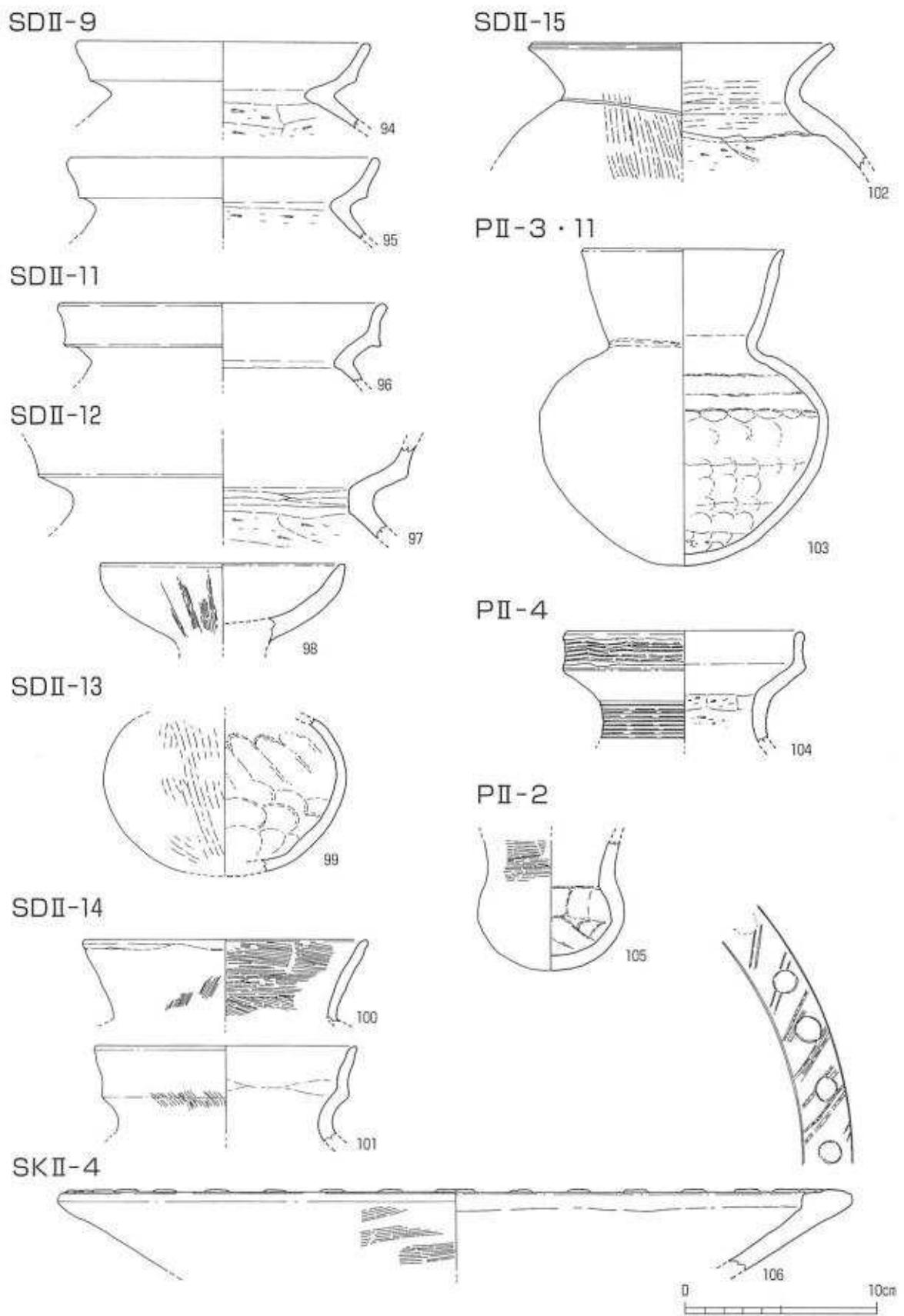


92

93

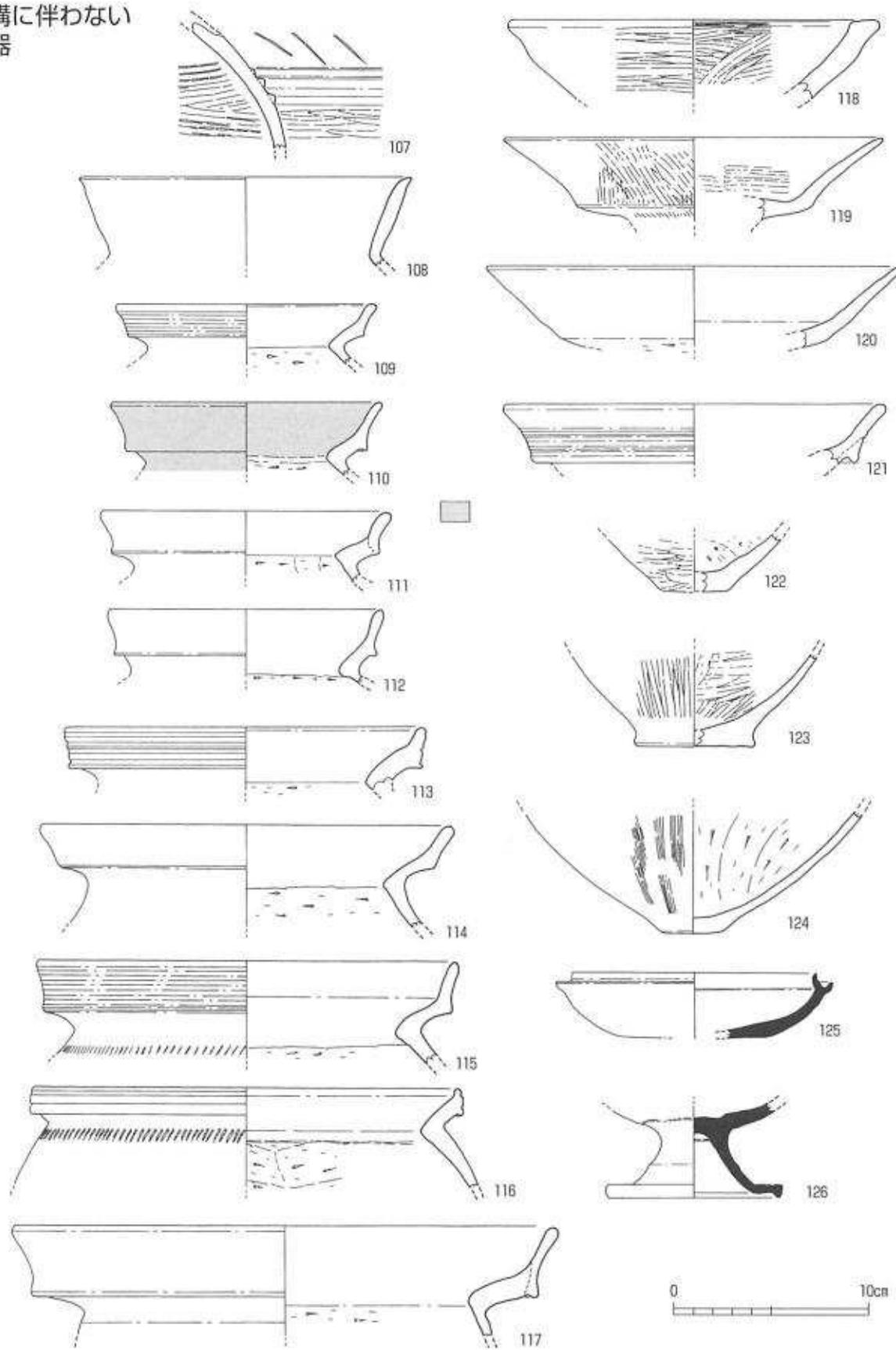


第1-37圖 出土遺物実測図VII (1:3)



第1-38図 出土遺物実測図Ⅷ (1:3)

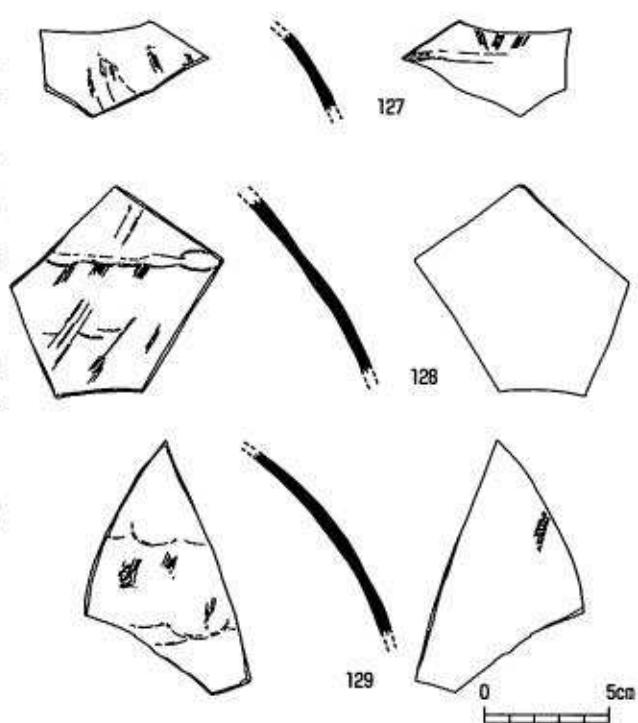
遺構に伴わない  
土器



第1-39図 出土遺物実測図IX (1:3)

## 2 須恵器 (第1-40図127~129)

SB II-6 (127) や SB II-8 (128) 及び調査区内 (129) から 3 片の古式須恵器が出土している。その他は遺構に伴わずに出土した 125・126 しかなく、本遺跡における導入期の古式須恵器である。これらは壺の胴部上半の破片で、内外面とも成形時のタタキ目や当て具の痕跡を丁寧にナデ消している。色調は暗緑灰色で、断面はセピア色である。胎土には砂をほとんど含まず、焼成は極めてよい。これら 3 片は別個に出土したが、諸特徴からみて同一個体の可能性もある。



## 3 鉄製品 (第1-41図130~132)

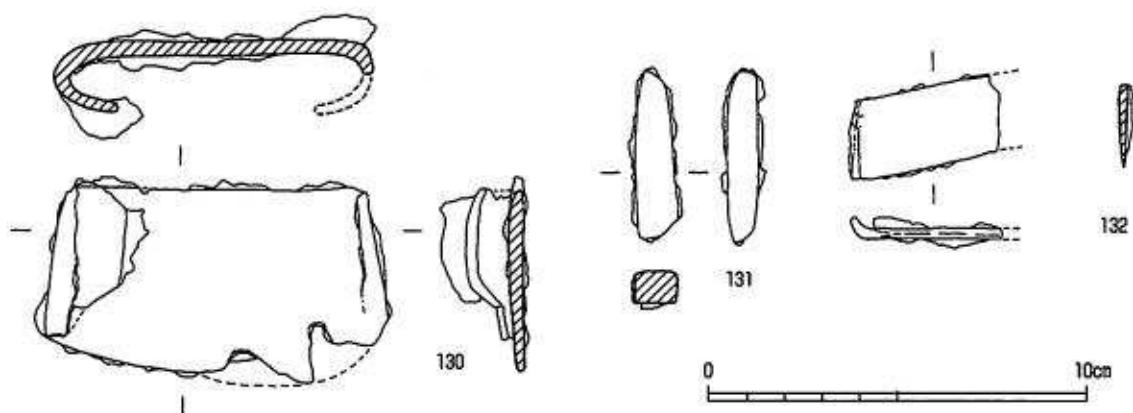
SB II-2・6・10 から鉄製品が出土している。 第1-40図 出土遺物実測図X (1:3)

SB II-2・10 では鉄滓なども出土し、集落内で鍛冶が行われていたと推測される。

**鋤鋸先 (130)** SB II-2 から出土した方形板鋤鋸先である。片方の袋部を欠損しているが、方形の鉄板の両端を曲げて袋部を形成した刃幅 9 cm 程度の小型のものである。

**鑿 (131)** SB II-6 から出土した小型の鑿で、刃先は片刃風に加工され、使用によって磨耗している。後述する叩き石Ⅲ類などとセットになる鉄器加工用の鑿と推定される。

**鎌 (132)** SB II-10 から出土した曲刀鎌で、古墳時代の鎌としては最も小型のものである。鉄板の一端を折り曲げて木柄に刃部をやや鈍角に装着したようである。稲の穂首を摘む鎌としての用途が想定されている小型鎌である。



第1-41図 出土遺物実測図XI (1:2)

#### 4 石器

竪穴住居跡を中心に、砥石や敲石、台石などが多く出土している。これらの多くは鍛冶に関連する石器で、明らかに鉄床石として用いられた痕跡をのこす台石や石鎚として使用されたものがある。とくに弥生時代後期以降、集落全体が何らかの鍛冶作業に関わっていたものとみられる。

**石斧**（第1-42図133）太型蛤刃石斧で、全面に研磨時の擦痕がのこる。刃部には刃と直交あるいは斜交する使用時の擦痕があり、頭部には打撃による剥離が認められる。SDII-3出土、時期は弥生時代後期である。

**砥石**（第1-42図134～138）砥石はきめの細かい小型の砥石（I類、134・135）とややきめの粗い中型の砥石（II類、136）、大型の砥石（III類、137・138）に分けられる。I類には方柱状のもの（134）や三角形など不定形のもの（135）があるが、石材のほとんどの面を砥面として使用したようで、135にはあらゆる面に砥石として使用した擦痕がのこる。これらの擦痕は細かなものが多く、完成した鉄器の研磨や使用中の鉄器の再研磨に使用されたものと推定される。II類やIII類はやや大型の石材を砥石としたもので、主要な研磨面が1面に集中する傾向がある。137などでは石材の長辺方向の4面を使用しているが、主要な使用面は1面に集中する。137では主要研磨面には研磨方向と直交するような使用痕がのこっており、単なる反復運動ではない研磨作業にも使用されたようである。これらII・III類の砥石は、未完成の鉄器の加工研磨やI類の砥石の製作などに主に使用されたものとみられる。134はSBII-2出土・古墳時代後期、135・136はSBII-6出土・古墳時代前期、137はSBII-10出土・古墳時代後期、138はSBII-12出土・古墳時代中期である。

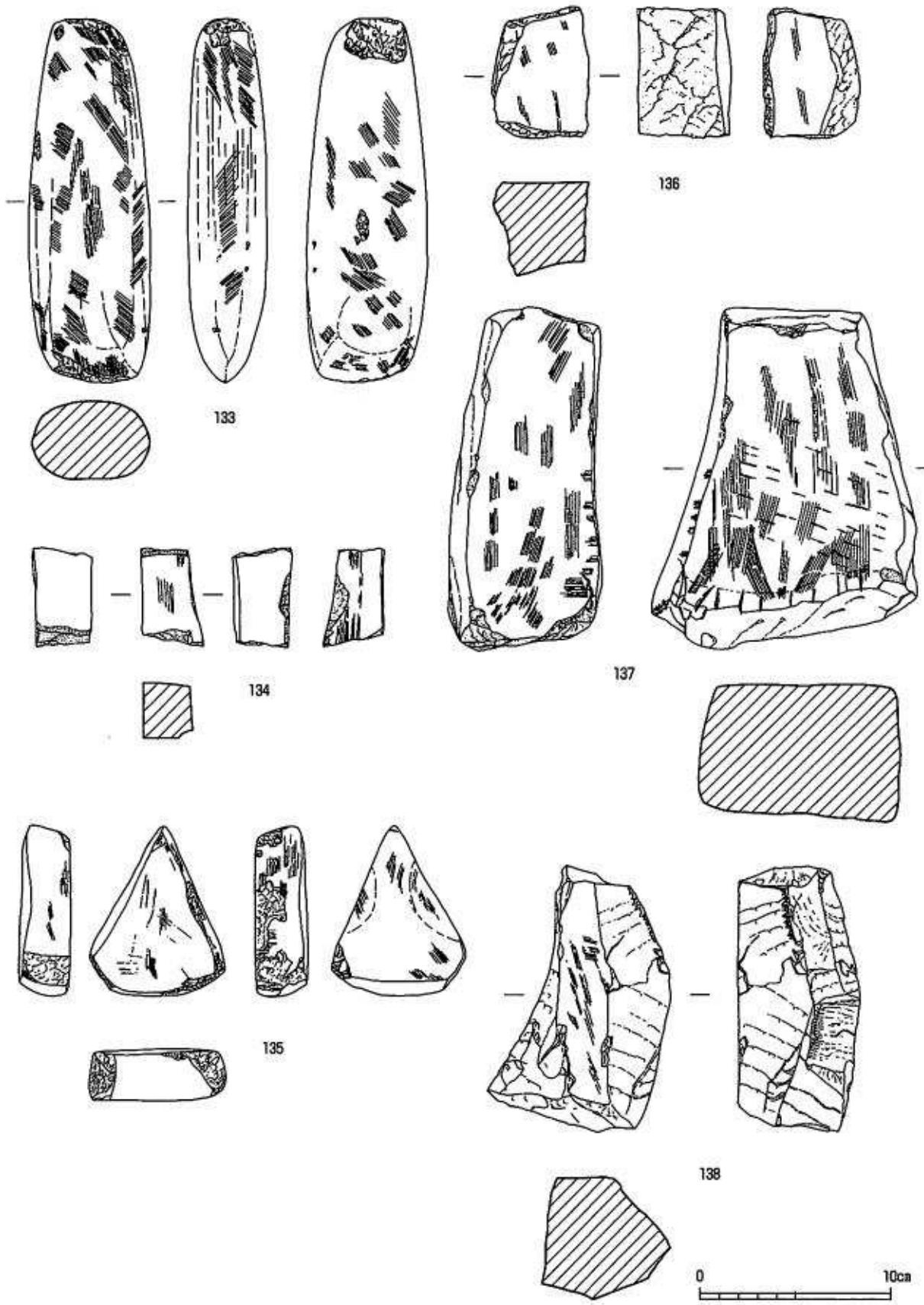
**敲石**（第1-43～45図139～158）敲石は自然石を利用したもので、石材の形状や使用状況などから3類に分けられる。I類（139～142）は円礫を利用したもので、礫の長軸方向の2面を主に打面として使用している。142は敲打によって打面付近が大きく剥離している。II類（143～155）は細長い棒状の自然礫を利用したもので、やはり長軸方向の2面ないし1面を打面として使用している。III類（156～158）は礫の形状はII類と近似するが、使用された打面が長軸方向の2面に加えて側面に1ヶ所存在するもので、これは132などの小型の鉄鑿をこの部分で叩いたものと推定される。いわば鑿用の石鎚としても使用された形跡のあるものである。139・140・143・149はSBII-3出土・弥生時代後期中葉、141・145・146はSBII-8出土・古墳時代前期、142・155はSBII-12出土・古墳時代中期、144はSBII-6出土・古墳時代前期、147はSBII-11出土・弥生時代後期後葉、148はSBII-2出土・古墳時代後期、150～152・156・157はSBII-4出土・弥生時代後期後葉、153・154はSBII-5出土・弥生時代後期後葉、158はSDII-1出土・弥生時代後期後葉。

**台石**（第1-45・46図159～170）台石は自然石を利用した作業台石で、石材の形状や使用状況などから大きく2類に分けられる。I類（159～168）は平板状の石材を使用した台石で、主に使用面は表側1面に限られる。II類（169・170）は断面三角形に近い石材の平たい1面を主に使用したもので、安定させるために地面に埋め込んで使用したとみられる。また他の側面や石材

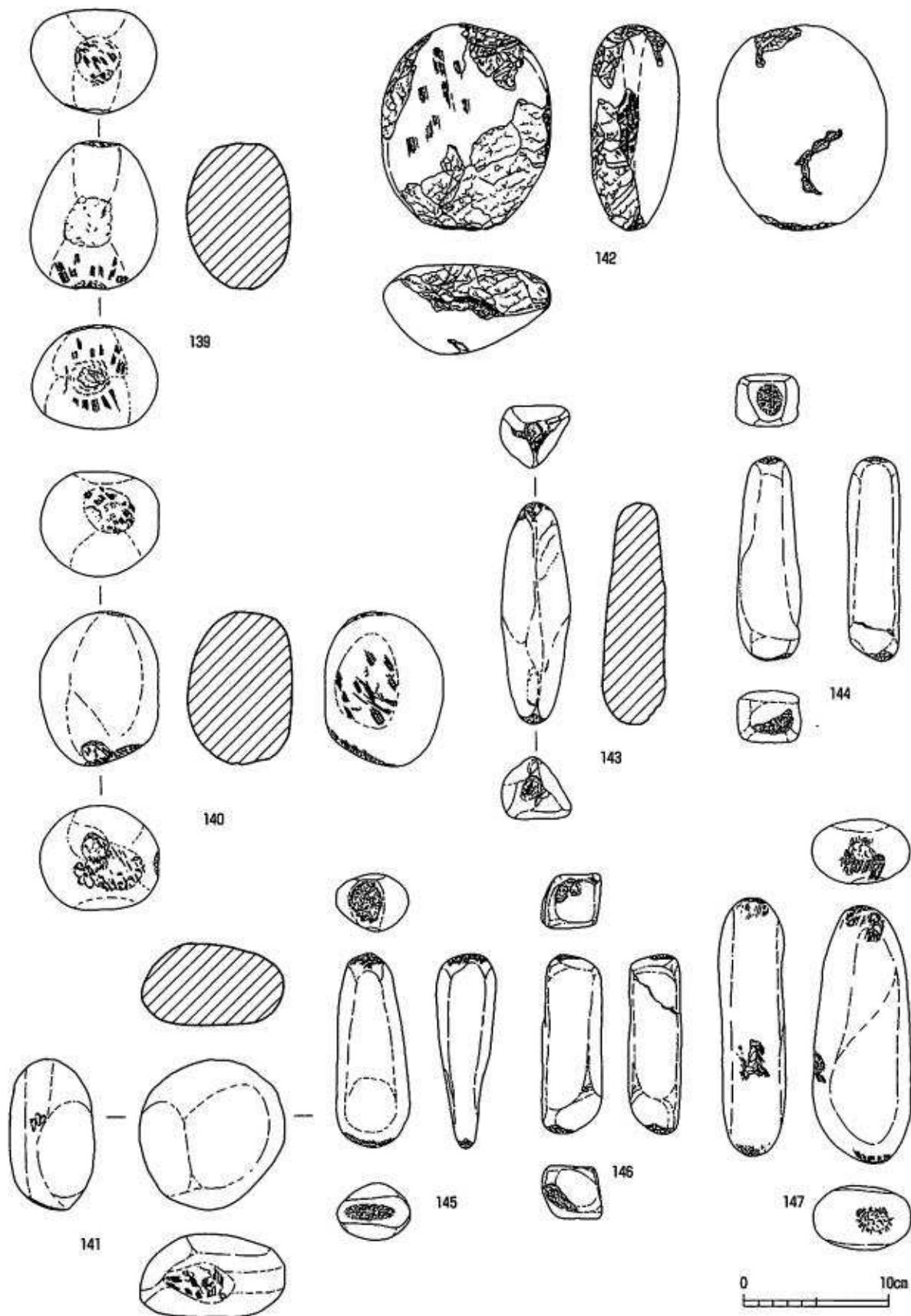
のコーナーなども使用している。I類の中には、使用面に被熱痕跡が明瞭なもの（160・163・164～166）があり、加熱した鉄などの加工に用いられたことがわかる。なかでも164は、使用面全面が赤黒く変色し、熱や打撃によって表面が剥離しており、鉄床石として使用されたことが明らかである。これらI類の台石は、主に擦痕がのこるIa類（159・161・168）と擦痕に加えて敲打痕がのこるIb類（160・162～167）に分けられる。Ib類には被熱痕がのこるものが多く、これらの多くが鉄床石的な使われ方をしたことが想定できる。一方Ia類は砥石的な使われ方をしたものとみられる。II類の台石にも被熱痕は明瞭ではなく、擦痕が多くのこるところから使用方法としてはIa類と似た用途が想定できる。159・160はSBII-3出土・弥生時代後期中葉、161・163・164はSBII-8出土・古墳時代前期、162はSBII-4出土・弥生時代後期後葉、165はSBII-5出土・弥生時代後期後葉、166はSBII-11出土・弥生時代後期後葉、167はSBII-12出土・古墳時代中期、168～170はSBII-10出土・古墳時代後期。

種別	遺構番号	挿図番号	器種	大きさ(cm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
鉄器	SBII-2	130	鍔鍔先	5.1	9.1	0.4	79	鉄	古・後	方形板
	SBII-6	131	鑿	4.4	1.1	0.9	12.6	鉄	古・前	
	SBII-10	132	鎌	3.9	2.1	0.3	6.9	鉄	古・後	
石器	SDII-3	133	磨製石斧	18.9	6.3	4.1	890	細粒閃綠岩	弥・後	I類
	SBII-2	134	砥石	5.1	3.2	3.1	71	半花崗岩	古・後	
	SBII-6	135	砥石	8.9	6.9	2.7	202	細粒凝灰岩	古・前	
	SBII-6	136	砥石	6.8	5.1	4.6	272	花崗玢岩	古・前	
	SBII-10	137	砥石	17.6	13.8	7.3	2680	黒雲母花崗岩	古・後	
	SBII-12	138	砥石	13.6	8.6	6.5	855	細粒凝灰岩	古・中	
	SBII-3	139	敲石	10.2	8.8	7.2	960	細粒凝灰岩?	弥・後・中	
	SBII-3	140	敲石	10.6	8.2	7.3	1097	閃綠玢岩	弥・後・中	
	SBII-8	141	敲石	10.5	10	5	859	結晶凝灰岩	古・前	
	SBII-12	142	敲石	14.2	11.7	6.1	1413	細粒凝灰岩	古・後	
	SBII-3	143	敲石	15.3	4.7	4.3	402	角閃玢岩	弥・後・中	
	SBII-6	144	敲石	14.2	4.4	3.4	379	結晶溶結凝灰岩	古・前	
	SBII-8	145	敲石	13.4	5.1	4.1	329	結晶凝灰岩	古・前	
	SBII-8	146	敲石	12.6	4.2	3.8	331	結晶凝灰岩	古・前	
	SBII-11	147	敲石	17.9	6.8	4.6	881	細粒凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-2	148	敲石	16.7	7.3	5.5	994	細粒凝灰岩	古・後	
	SBII-3	149	敲石	14.7	7.6	4	872	結晶溶結凝灰岩	弥・後・中	
	SBII-4	150	敲石	15.3	6.7	5.2	783	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-4	151	敲石	15.5	7	5.6	961	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-4	152	敲石	13.7	7.3	5.2	781	結晶凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-5	153	敲石	15.9	6	5.2	706	閃雲花崗岩	弥・後・後	
	SBII-5	154	敲石	20.7	7.5	6	1449	結晶凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-12	155	敲石	20.6	7	5.6	1379	細粒閃綠岩	古・中	
	SBII-4	156	敲石	15.9	7.9	5.8	846	結晶凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-4	157	敲石	16.2	7.1	5.1	862	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	
	SDII-1	158	敲石	16.1	5.1	3.2	447	結晶凝灰岩	弥・後・後	
	SBII-3	159	台石	19.3	15.8	4.9	2256	細粒凝灰岩	弥・後・中	Ia類
	SBII-3	160	台石	23	15.6	7.2	3687	結晶凝灰岩	弥・後・中	Ib類
	SBII-8	161	台石	17.6	16.4	7	3259	結晶凝灰岩	古・前	Ia類
	SBII-4	162	台石	26.9	21.3	12.1	7897	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	Ib類
	SBII-8	163	台石	25.5	20	7.4	5233	結晶溶結凝灰岩	古・前	Ib類
	SBII-8	164	台石	25	18.2	6.3	4617	結晶凝灰岩	古・前	Ib類
	SBII-5	165	台石	35.3	26.3	11.4	16190	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	Ib類
	SBII-11	166	台石	29.2	28.6	8	11942	結晶溶結凝灰岩	弥・後・後	Ib類
	SBII-12	167	台石	18	11.2	10.2	2725	結晶凝灰岩	古・中	Ib類
	SBII-10	168	台石	24	21.2	12.1	10564	凝灰岩	古・後	Ia類
	SBII-10	169	台石	17.4	12.6	10.7	3310	結晶凝灰岩	古・後	II類
	SBII-10	170	台石	14.2	13.5	12.6	3090	結晶凝灰岩	古・後	II類

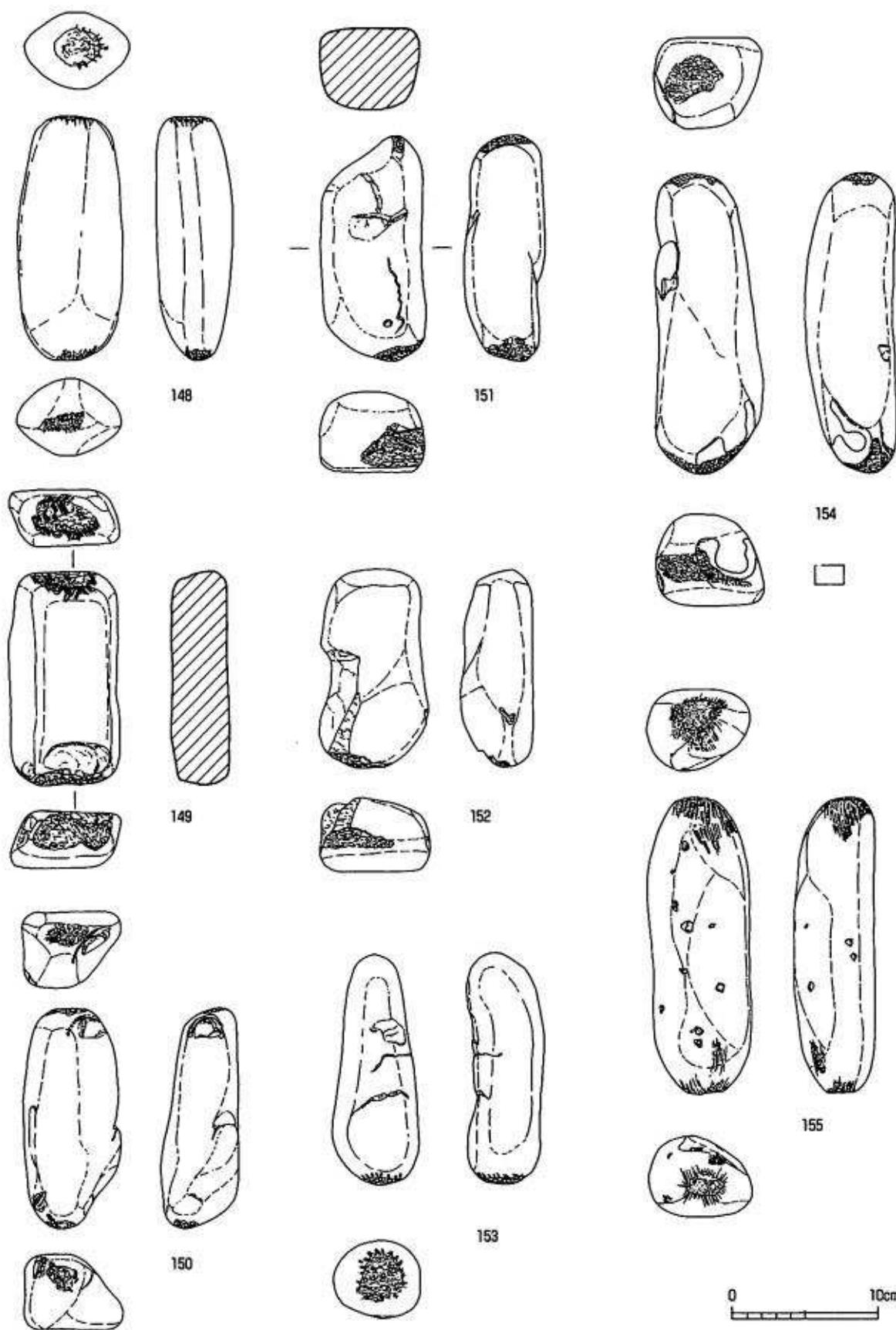
第11表 遺物観察表2



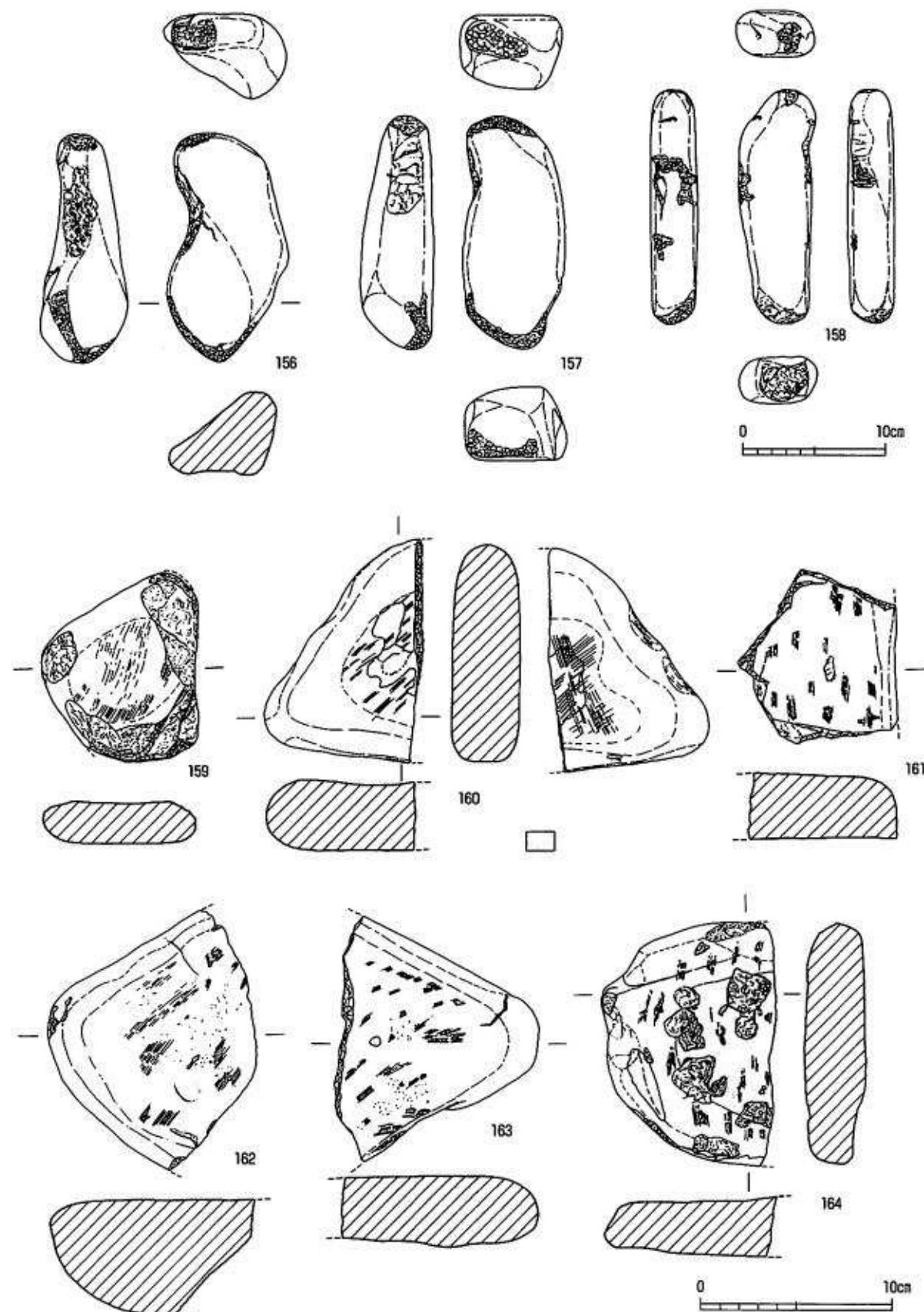
第1-42図 出土遺物実測図III (1:3)



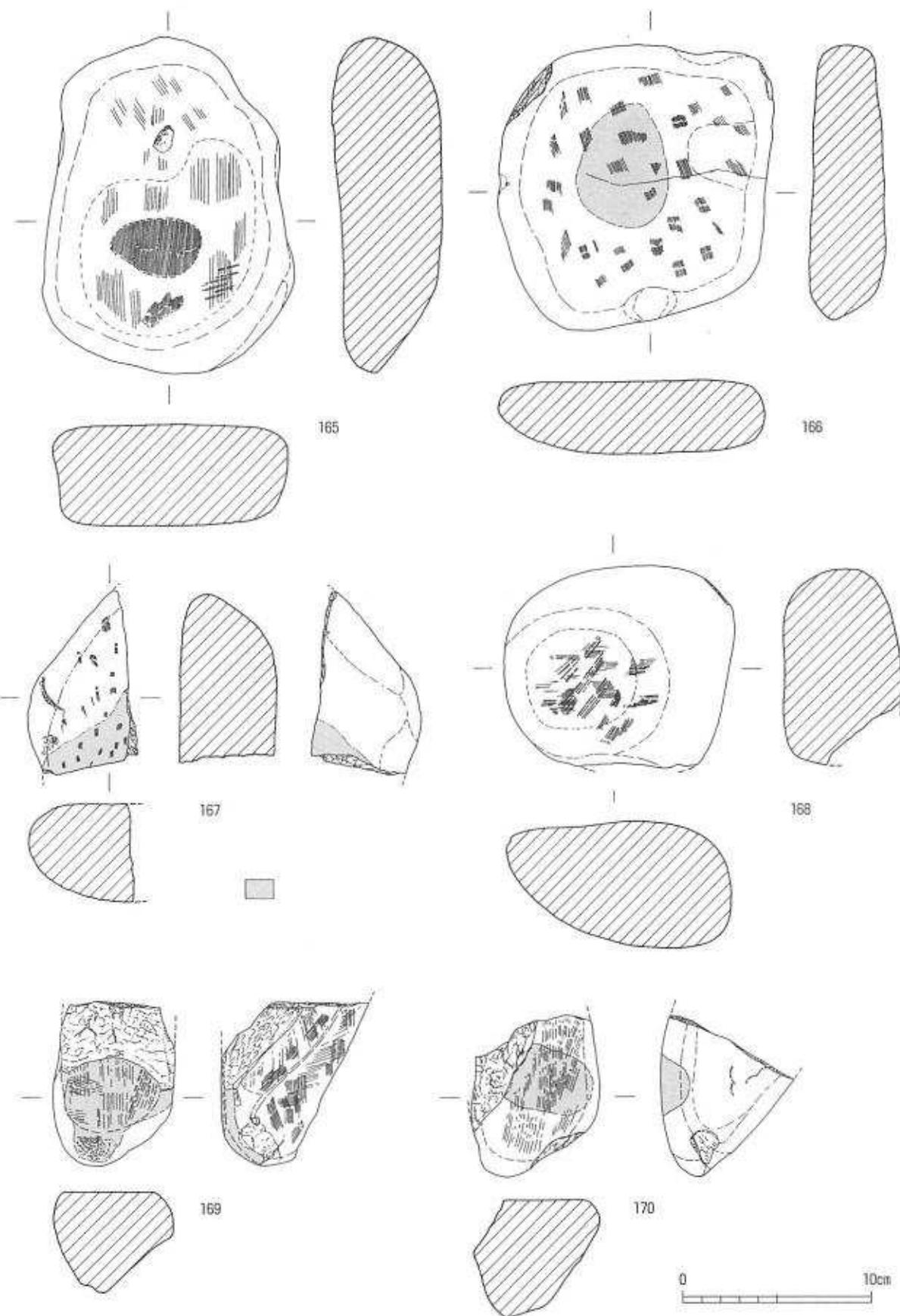
第1-43圖 出土遺物実測図(1:4)



第1-44圖 出土遺物実測図版 (1:4)



第1-45図 出土遺物実測図XV (1:4, 1:6)



第1-46図 出土遺物実測図XVI (1:6)

## (4)まとめ

### 1 集落の変遷について

ここでは、今回の調査成果及び平成13年度調査区（以下、「第1次調査区」という。）の調査成果を合わせて考察し、布掛遺跡における集落の変遷について考えてみたい。

まず、第1次調査区は、平成16年度調査区（以下、「第2次調査区」という。）の北東側に接して位置し、布掛遺跡が立地する丘陵の頂部から南東方向にかけての緩やかな段丘斜面に弥生時代中期から古墳時代中頃にかけての竪穴住居跡41軒などが立地する。住居跡は大きく3段に分かれて分布しており、丘陵頂部の竪穴住居跡がかなり重複関係にあるほかは、比較的重複関係が少ない。

また、弥生時代中期後葉から古墳時代後半にかけての住居跡などを検出した2次調査区においても、第1次調査区同様におおよそ3段に分かれて住居跡は分布しており、同じような傾向にあることが明らかとなった。

ここでは、各時期の遺構のあり方について細かい時期別に概観してみたい。

#### I期（弥生時代中期）

第2次調査区でこの時期にあたる住居跡はもっとも斜面下方に位置するSB II-7の1軒のみである。住居跡自体は中規模な円形の住居跡で、周辺部には同時期の遺構はなく単独で位置したものと考えられる。

第1次調査区ではこの時期の竪穴住居跡が2軒あり、これらの住居跡も斜面最下方に位置し、2次調査区と共通点が認められことから、布掛遺跡における集落の形成が斜面下方からはじまったことが窺える。住居跡は2次調査区と同様に中規模のものである。

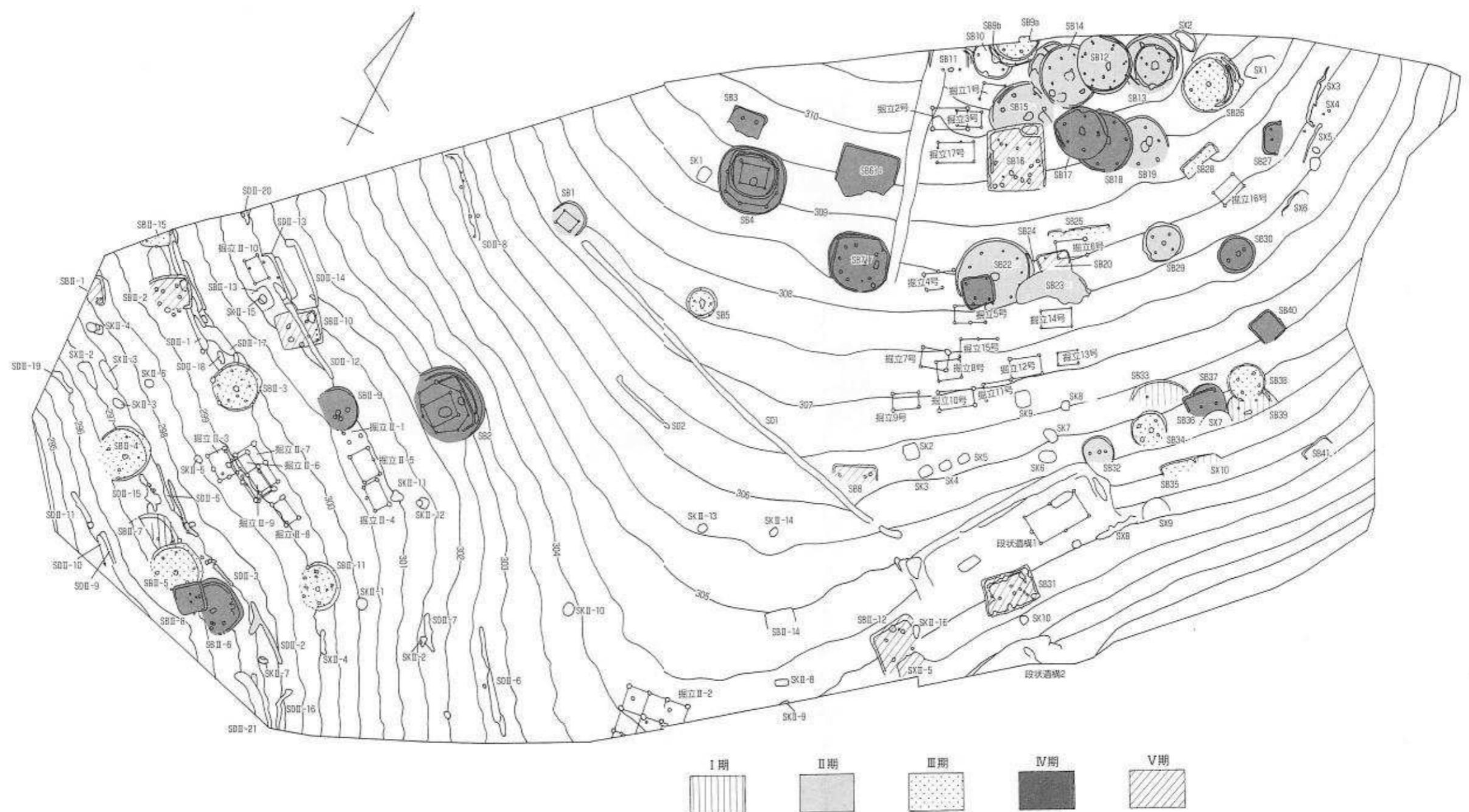
#### II期（弥生時代後期前半）

第2次調査区内においては、この時期の明確な竪穴住居跡は確認されていない。ただし最下方の溝状遺構のなかにこの時期に属するものが存在すると考えられ、溝状遺構が斜面上方側を削りだして平坦面を造成する段状遺構に伴うと考えるとすると、何らかの作業場的空間が存在した可能性も考えられよう。

第1次調査区では、この時期の竪穴住居跡は斜面中段から頂部にかけて12軒確認されており、1軒を除いて円形の住居である。規模的には中規模のものがもっとも多く、中には40m<sup>2</sup>を超える大型のものも含まれる。また、頂部においては近接して造られており、短期間の間に建て替えが行われていたことが想定される。

#### III期（弥生時代後期後半）

この時期には、第2次調査区でもっと多くの住居が営まれる時期で、斜面下位から中位にかけて5軒の竪穴住居跡（SB II-3・4・5・11・15）が確認されている。規模としては中規模程



第1-47図 布摸遺跡集落変遷図(1:500)

度のもので、それぞれの住居がやや距離をおきながら造られている。これらの住居跡には台石や敵石が伴うものが多く、この頃から鉄器の生産が盛んになったことが窺われる。

これに対して第1次調査区においては、丘陵頂部から斜面にかけて8軒の竪穴住居跡が比較的散在するような状況で展開している。住居の規模としては小規模のものも認められるが、中規模のものも存在する。また、この時期から第1次調査区において方形の竪穴住居跡の存在が認められるようになる。

一方、第1次調査区検出の住居跡にも第2次調査区検出の住居跡同様に鉄器を伴う住居跡が含まれることから、前述のように布掛遺跡における鉄器生産の開始時期がこの頃であったと考えられる。

#### IV期（古墳時代前期）

第2次調査区においては3軒の竪穴住居跡（SB II-6・8・9）を確認している。SB II-6とSB II-8とが重複しているが、そのほかの住居跡は距離をおいて存在する。

一方、出土遺物の中には、引き続き鉄器生産を裏付ける砥石や敵石、台石などの遺物が出土しており、鉄製品が盛んに生産されたことが窺えよう。

第1次調査区においては、この時期にもっとも集落として盛期を向え、13軒の竪穴住居跡を検出している。また、その分布のあり方は頂部から斜面下方にかけて拡散的に立地している。各住居の規模についても、その床面積が小規模のものから50m<sup>2</sup>を超える大規模のものまであり、また方形のもの、円形のものなど様々である。

なお、第1次調査区においても多くの住居跡に伴って鉄製品そのものや、鉄器加工用の砥石やタタキ石、台石などが出土しており、前述のように多くの住居の中において鉄製品の生産・加工が行われていたものと考えられる。

#### V期（古墳時代中・後期）

第1次調査区においても2次調査区においても、布掛遺跡としては遺跡の終焉期にあたる。

第2次調査区においては4軒の方形の中規模程度の竪穴住居跡を確認しており、いずれの住居跡（SB II-1・2・10・12）も鉄滓や鉄器、タタキ石などを伴っていることから、前時代同様に鉄器生産に関連した住居であると思われる。

一方、第1次調査区においては4軒の方形竪穴住居跡を検出している。その多くからは鉄器生産に関連する遺物が出土している。また、このうち3軒の竪穴住居跡では、住居内祭祀を想定させる遺構が検出されている。このうちの1軒では方形住居のひとつの隅が床面より一段高くなってしまっており、その高まりに小型丸底壺や直口壺などがまさに供えられたかのような状況で出土した。これは明らかに住居内で祭祀を行った痕跡と考えられ、鉄器生産に関連する祭祀が執り行われたことが考えられよう。

また、第2次調査区においても明確な住居内祭祀を示唆する遺構はないものの、住居内から手

づくね土器が出土するなど、遺物的には祭祀を示唆するものが出土しており、この時期に住居内での祭祀が広く行われていたことが窺えよう。

## 2 住居の形態及び規模について

住居形態については、Ⅱ期まではほぼすべての住居が円形の住居であり、Ⅲ期以降に方形住居が見られるようになり、Ⅴ期には方形住居だけとなる。

規模(床面積)については、Ⅰ期のものについてはいずれの調査区においても明確ではない。

Ⅱ期になると第1次調査区では10m<sup>2</sup>前後の小規模なものや20~40m<sup>2</sup>の中規模なものが認められ、一部には40m<sup>2</sup>を超すような大型の住居なども認められる。

Ⅲ期の第2次調査区では、20m<sup>2</sup>前後の小規模なものが大半で、第1次調査区においては20m<sup>2</sup>未満の小規模なものが多く、一部に20m<sup>2</sup>を超す中規模程度のものが含まれる。

Ⅳ期の第2次調査区では、一部に20m<sup>2</sup>を超す住居跡が存在するものの、大半は20m<sup>2</sup>以下の小規模なもので、とくに方形住居は10m<sup>2</sup>以下である。同様に1次調査区においても方形住居は10m<sup>2</sup>以下のものが大半で、一部に30m<sup>2</sup>前後のものが認められる。また、円形住居に関しては20~30m<sup>2</sup>の中規模のものと40m<sup>2</sup>を超す大型のものが認められる。

Ⅴ期は2次調査区では20m<sup>2</sup>以下の小規模なもので、第1次調査区では20m<sup>2</sup>以下の小規模なものと35m<sup>2</sup>の中規模なものとがある。

## 3 掘立柱建物跡について

第2次調査区において掘立柱建物跡は10棟検出したが、掘立柱建物跡Ⅱ-2の総柱の建物以外は1間×1間や1間×2間と小規模のものである。また、その分布のあり方は竪穴住居跡と重複するものは1棟だけで、他はほぼ住居空間の間に造られた傾向にある。このようなことは1次調査区でも同様な傾向にあることから、これらの掘立柱建物跡が倉庫的な性格のものであったことが想定できよう。

また、掘立柱建物跡Ⅱ-2については、調査区際で検出したことから規模については明確にはしがたいが、前述の小規模な掘立柱建物跡とは異なる大型の倉庫的な機能を有するものである可能性が考えられよう。

## 4 鉄器製作について

布掛遺跡では、第1次・第2次調査においても竪穴住居跡内から鉄鎌や鉄鏸などの鉄製品が比較的多く出土している。また、第1次調査においては確認できなかつたものの、第2次調査においては2軒の竪穴住居跡内から鉄滓の出土が確認されており、砥石や敲石、被熱により赤変した台石が出土するなど鉄器製作を想定させる遺物が出土している。後述するように周辺遺跡においても弥生時代後期頃から同様な状況を呈することから、布掛遺跡においても集落内において鉄器の生産が行われていたものと考えられよう。

時 期	遺構番号	種 別	径・辺 (m)	柱数・ 柱間	床面積 (m <sup>2</sup> )
I 期	S B 33	円・竪穴	—	—	—
	S B 39	円・竪穴	—	4	—
Ⅱ 期	S B 1	円・竪穴	(3.6)	4	29.6
	S B 12	円・竪穴	(6)	8	24.4
	S B 13	円・竪穴	(6.2)	7	25.6
	S B 14	円・竪穴	(6.7)	7	28.7
	S B 15	円・竪穴	(8)	5	38.6
	S B 19	円・竪穴	(6.2)	6	20.1
	S B 22	円・竪穴	(8.5)	10	45.6
	S B 23	円・竪穴	—	—	—
	S B 24	方・竪穴	—	—	—
	S B 29	円・竪穴	(4.6)	4	11.2
	S B 32	円・竪穴	(3.5)	2	8.0
	S B 41	方・竪穴	—	—	—
	S B 5	円・竪穴	(3.2)	2	5.9
	S B 9	円・竪穴	(5.7)	—	20.2
Ⅲ 期	S B 25	方・竪穴	—	—	—
	S B 26	円・竪穴	(6.6)	8	26.2
	S B 28	方・竪穴	(4.4)	—	—
	S B 34	円・竪穴	(4.1)	4	8.8
	S B 35	方・竪穴	—	—	—
	S B 38	円・竪穴	(4)	4	10.6
	S B 2	円・竪穴	(8.3)	7	50.8
	S B 3	方・竪穴	(3.6)	—	—
Ⅳ 期	S B 4	円・竪穴	(7.4)	8	40.5
	S B 6	方・竪穴	(6.1)	—	—
	S B 7	方・竪穴	6.5 × 6.2	8	31.0
	S B 17	円・竪穴	(6)	5	21.1
	S B 18	円・竪穴	6.4	6	28.3
	S B 21	方・竪穴	2.8 × 3.2	4	8.8
	S B 27	方・竪穴	(3.2)	2?	9.8
	S B 30	円・竪穴	(4.1)	2	9.4
	S B 36	方・竪穴	—	2	—
	S B 37	円・竪穴	—	—	—
Ⅴ 期	S B 40	方・竪穴	(2.8)	—	7.3
	S B 8	方・竪穴	(4.75)	2	—
	S B 16	方・竪穴	6.8 × 6.2	(4)	35.4
	S B 20	方・竪穴	3.0 × 3.3	4?	9.5
	S B 31	方・竪穴	5.9 × 3.9	2?	18.0

1 次調査分

時 期	遺構番号	種 別	径・辺 (m)	柱数・ 柱間	床面積 (m <sup>2</sup> )
Ⅰ 期	S B II - 7	円・竪穴	—	—	26.1
	S B II - 3	円・竪穴	5.4	5	17.6
	S B II - 4	円・竪穴	5.5	4	19.7
	S B II - 5	円・竪穴	5.7	6	20.5
	S B II - 11	円・竪穴	(5)	5	20.1
Ⅱ 期	S B II - 15	方・竪穴	—	—	—
	S B II - 6	円・竪穴	6.0 (5.0)	6	24.1
	S B II - 8	方・竪穴	3.1	2	7.9
	S B II - 9	円・竪穴	(5)	2	17.2
Ⅲ 期	S B II - 1	方・竪穴	(3.2)	—	—
	S B II - 2	方・竪穴	(4.0)	2	14.7
	S B II - 10	方・竪穴	(3.8)	4	16.9
	S B II - 12	方・竪穴	(5)	4	20.9

2 次調査分

第 12 表 布掛遺跡竪穴住居跡計測表 (1 次・2 次)

## 5 庄原市域及び周辺部における当該期の集落遺跡について

### 大成遺跡<sup>(1)</sup>（庄原市三日市町）

1975年と1987年の2度にわたって調査された遺跡である。1975年の調査では8軒の方形堅穴住居跡、2棟の掘立柱建物跡、6基の土坑を検出したが、調査区中央部が道で切断されていることから、本来は10数軒の堅穴住居跡で集落を構成していたものと考えられる。堅穴住居跡は等高線に沿って重複することなく分布し、集落の存続時期は5世紀中葉前後と考えられている。

8軒の堅穴住居跡のうち、3号堅穴住居跡は北側と西側に張り出し部を有する2本柱の焼失家屋である。また、床面南側に工作用ピットと考えられる土坑2基を検出した。この住居跡からは土器のほかに砥石と考えられる石器や用途不明の鉄製品が出土している。

このほか工作用ピットを有する住居跡として4・6～8号堅穴住居跡がある。また、6号堅穴住居跡からは土器のほか、韁の羽口、砥石、鉄鎌、また7号住居跡からは小型丸底壺、8号住居跡からは小型丸底壺、土馬、鉄製の用途不明品、刀子などが出土している。

2棟の掘立柱建物跡はいずれも1間×1間の小規模なもので、堅穴住居跡とはやや離れた位置に占地しており、明らかに住居との機能分化が認められることから、倉庫的な性格の施設であったと想定できる。

本遺跡は、継続時期は短いものの、8軒以上の住居から構成される集落を形成していた。多くの住居跡から工作用ピットと想定される土坑を検出しており、工房的性格を有する集落であったと考えられる。また、住居内からは韁の羽口・砥石や鉄製品などが出土地しておらず、鉄生産に関する工房であった可能性が推定できよう。

また、1987年の調査では、堅穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、段状遺構24基などを検出した。4軒の堅穴住居跡はほぼ同一等高線上にあり、分散して立地している。いずれも方形の住居跡で、一辺4mと6mと小規模な住居跡である。

このうち4本柱構造のSB2では甕、高杯のほか手捏ね土器などの土器類とヤリガンナ、刀子などの鉄製品、敲石などが出土している。また、SB34は2本柱構造の堅穴住居跡で、住居跡の北東コーナーは2段になった高まり部分があり、さらに上段部分には土坑状の掘り込みが検出された。この住居跡からは須恵器の杯蓋・杯身、土師器の甕・高杯・鉢、製塩土器、鉄滓などが出土地した。

段状遺構は東向きの斜面に等高線に平行して、概ね3段に分かれて構築されている。これらの段状遺構には柱穴や壁溝を伴うものとそうでないものとがあり、また床面に溝や土坑を伴うものなど数種類の形態を示す。また、各段状遺構に伴う遺物として須恵器、土師器、製塩土器などの土器類などがあるが、特徴的なのは多くの遺構から鉄滓が出土し、韁の羽口を伴う段状遺構も見られる。このことは、この段状遺構が何らかの鍛冶に関連する工房的な遺構であった可能性を示唆するものと思われる。

遺跡の時期については古墳時代中頃と思われる。

### 竜王堂遺跡<sup>(2)</sup> (庄原市平和町)

竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、貯蔵穴7基、土坑6基を確認した。竪穴住居跡には平面形が円形のもの9軒、隅丸方形のもの8軒、方形のもの2軒があり、隅丸方形のものと方形のものは主柱穴が4本であるのに対して、円形のものは4本以上の多柱である。

このうちSB4は円形で、東側壁面沿いに若干の高まりがあり、遺物としては古墳時代初頭頃の鼓形器台、低脚付の鉢？が出土した。SB6は円形で、主柱穴は8本である。出土遺物には古墳時代初頭頃の土師器(甕、注口土器、小型壺、鼓形土器)、鉄製品(不明製品)、砥石などがある。

### 永宗遺跡<sup>(3)</sup> (庄原市新庄町)

3軒の竪穴住居跡、3棟の掘立柱建物跡、住居状遺構、溝状遺構等を検出している。

このうち1号住居跡は円形の4本柱で、西側の壁面が外側に2段の階段状になって張り出しており、出入口と想定している。床面からは山陰型の大型甑形土器が押しつぶされた状態で出土している。この甑形土器の出土は住居内での祭祀の可能性を示唆している。さらに畿内系の壺形土器、砥石などが出土している。

遺跡の時期としては古墳時代初頭頃と考えられている。

### 妙見山遺跡<sup>(4)</sup> (庄原市東本町)

検出の遺構としては竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡4棟、段状遺構4箇所などがある。このうち竪穴住居跡は丘陵尾根部に等高線に沿った状況で造られており、また段状遺構は尾根筋から若干下がった斜面にやはり等高線に沿って造成されている。段状遺構には掘立柱建物跡状に柱穴が並ぶものがあり、平坦面を造成し何らかの建物が造られていたことが想定される。これらの遺構は出土した土器類などから弥生時代後期から終末にかけて営まれたものと考えられる。

竪穴住居跡からはいずれも台石等が出土し、鉄製品などが共伴するものなどがあることから、鍛冶に関連する遺構であったと考えられる。

### 油免遺跡<sup>(5)</sup> (三次市三良坂町)

検出の遺構としては竪穴住居跡81軒、掘立柱建物跡26棟、土坑182基などがある。このうち竪穴住居跡は弥生時代後期から古代にかけてのもので、弥生時代後期中葉と後期終末から古墳時代前期前半に集落としての盛期が認められる。基本的に集落は散在から集中、斜面下方から上方、中央から西側方向という展開を見せる。弥生時代後期中葉では原始的鍛冶操業が行われたと考えられる竪穴住居跡が重複して存在した。

また、古墳時代中期頃の竪穴住居跡SB17は方形の住居跡で、2方向に張り出し部を伴っている。本住居跡からは手捏ね土器や勾玉などの玉類が出土しており、何らかの祭祀的な行為が行われたことが想定されている。

## 6 結語

以上、布掛遺跡の分析とともに周辺遺跡の状況を概観してきたが、あらためて布掛遺跡の2回にわたる調査の成果をまとめて結語としたい。

布掛遺跡の遺跡としての存続時期は、弥生時代中期から古墳時代中・後期にかけての時期であり、ほぼ継続的に集落として営まれていたものと考えられる。

集落の形成は丘陵斜面下方側から開始され、順次丘陵上方側に展開されていったものと想定される。形成期の住居は小型のものが多く、その数自体もそれほどものではなかったと考えられる。しかし、弥生時代後期に入ると次第に住居数も増加する傾向にあり、それに加えて住居規模の大型化、また数回にわたる建て替えなどが認められ、人口規模の拡大が考えられる。また、少なくとも弥生時代後期後半には出土遺物などから鉄器生産が開始され、以後集落内で継続的に鉄器生産が行われたことが明らかとなった。そして古墳時代前半期には集落としての最盛期を迎え、住居数を最大とし、古墳時代中・後期をもって集落の終焉を迎えたと考えられる。

一方、1次調査区と2次調査区との間には1次調査区検出のSD 1を挟んで遺構の存在しない空間があり、両集団が決して同一集団ではなかったのではないかと考えられる。このことから両集団は地縁的・血縁的には近いものの、両集団間には母集団とその派生集団という関係があるのではないかと推定される。

布掛遺跡の東側の丘陵下にはほぼ南北方向に流れる西城川があり、その氾濫原が西城川に沿った状況で広がっている。このことから布掛遺跡の農業生産基盤となりうる可耕地がわずかであり、集落の形成にあたり農業生産以外にも何らかの生活基盤が必要となることは明らかである。

これを可能としたものが先述したように布掛遺跡においても、また他の周辺遺跡でも同様な傾向にある鉄器生産にその可能性を求める能够性は高いものではないだろうか。

### 註

- (1) 大成遺跡調査団『庄原市大成遺跡の発掘調査』 1986年  
財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡』 1989年
- (2) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『童王堂遺跡』 1994年
- (3) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「永宗遺跡」「西山・小和田・永宗遺跡—国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」 1982年
- (4) 庄原市教育委員会『妙見山遺跡』 1999年
- (5) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「大谷遺跡の調査」「灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(VI) 2003年

## 2 大槻神遺跡

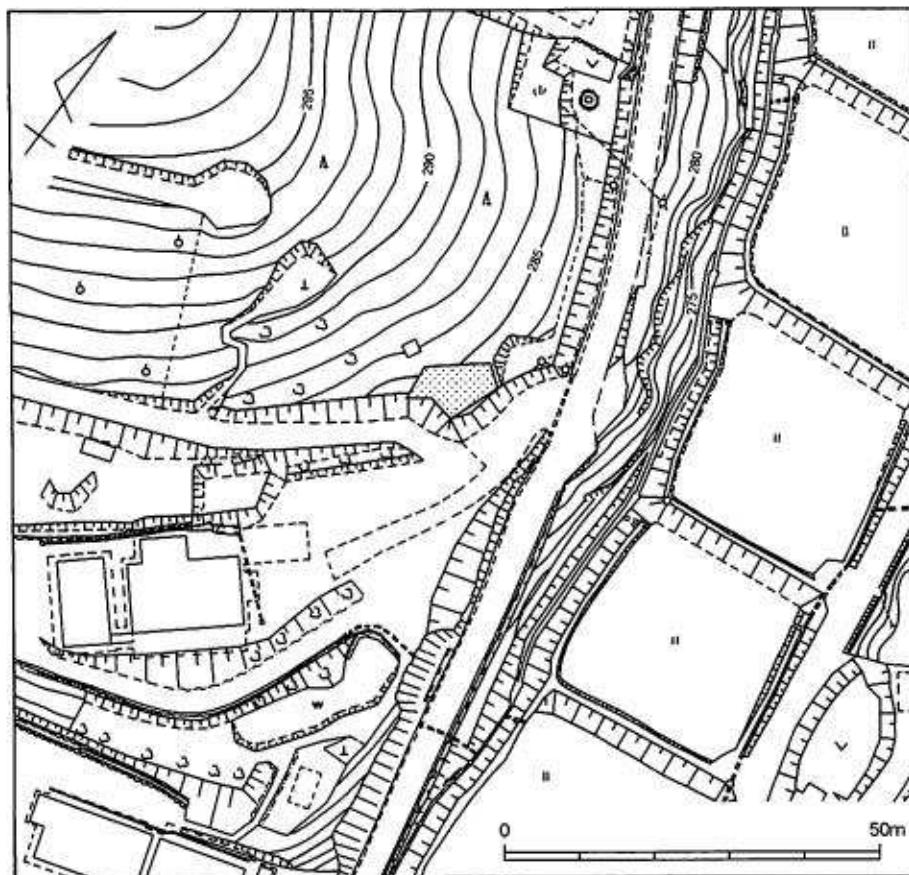
### (1) 調査の概要

大槻神遺跡は、庄原市川西町字大槻神に所在する。遺跡は、前面を流れる西城川から約300m北に離れた、標高約285mの丘陵先端付近に位置する。遺跡は南向きの緩やかな斜面に立地しており、西城川との比高は約20mである。谷を挟んだ東側丘陵上には布掛遺跡が存在する。

遺跡の周辺は、家屋等により原地形が失われており、遺跡そのものも南側が道により削られ、高さ約3mの崖面をなしている。崖面には調査以前から竪穴住居跡らしい落込みが確認され、遺跡の一部がすでに消滅しているものと考えられた。

遺跡付近の基本層序は、表土下がいわゆる「黒ボク」とよばれる厚さ30~40cmの黒褐色土層で、その直下が基盤層の黄褐色土となる。調査にあたっては、重機により表土及び黒褐色土を除去し、黄褐色土上面から人力による遺構確認を行なった。

調査の結果、検出した遺構は竪穴住居跡1軒、土坑1基、溝状遺構1条、ピット等である。このうち、竪穴住居跡と土坑は重複しているが、検出段階では土坑の平面プランが不明瞭でその存在は未確認であった。竪穴住居跡の掘り下げの過程で、土坑が竪穴住居跡の一部を壊すかたちで



第2-1図 大槻神遺跡周辺地形図 (1 : 1,000)

掘り込まれていることが土層断面から判明したため、別遺構として取り扱うこととした。

なお、今回の調査区は狭小であるが、北西側には試掘調査により2基の段状遺構が検出されており、遺跡の範囲は北西側にさらに広がることが想定される。

## (2) 検出の遺構

### 竪穴住居跡

#### SB1 (第2-3図、図版2-2a・b)

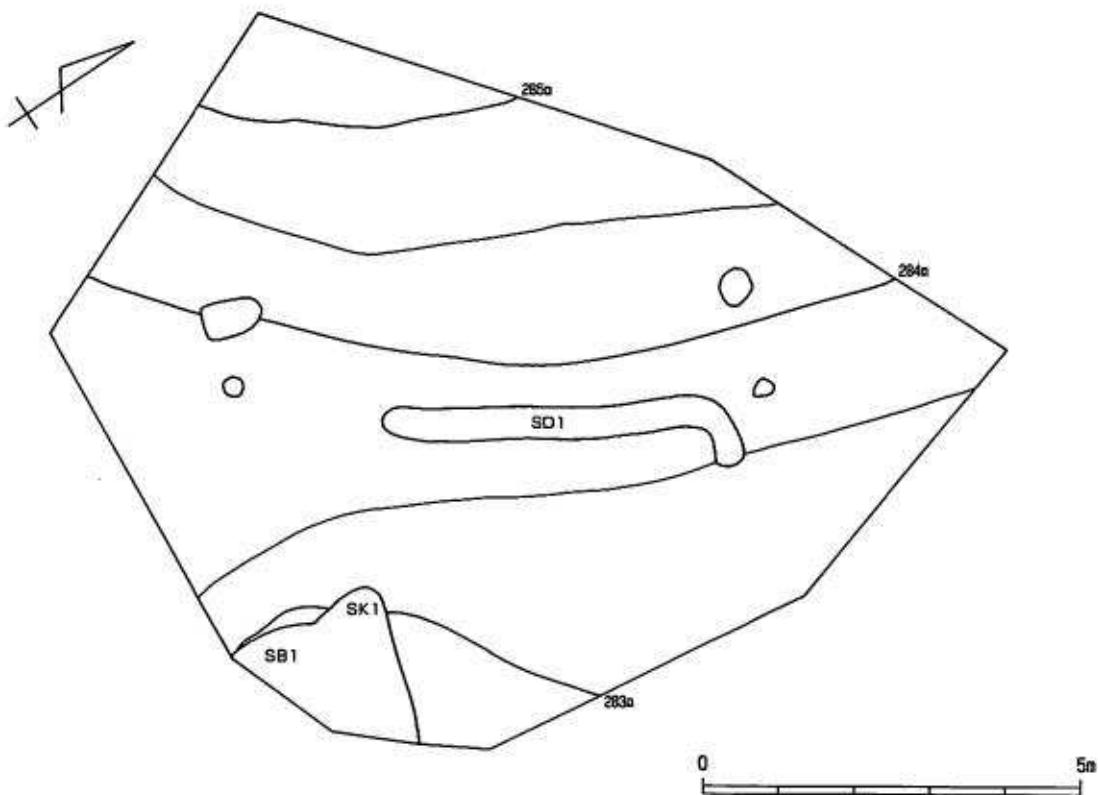
調査区の斜面下方側端部に位置する隅丸方形状の竪穴住居跡で、住居の北東隅の角部のみを検出し、その他の大半は流失している。また、隅部は後世の土坑であるSK1によって切られている。住居跡の規模は不明で、壁溝は北東隅で幅60cmとやや幅広で、深さは約10cmである。

北西隅の床面でピットを1個検出したが、住居の隅に近接しすぎることから、主柱穴とは考えにくい。

出土遺物としては少量の土師器がある。(第2-5図2)

### 土坑

#### SK1 (第2-3図、図版2-2a・b)



第2-2図 大槻神遺跡遺構配置図 (1:100)

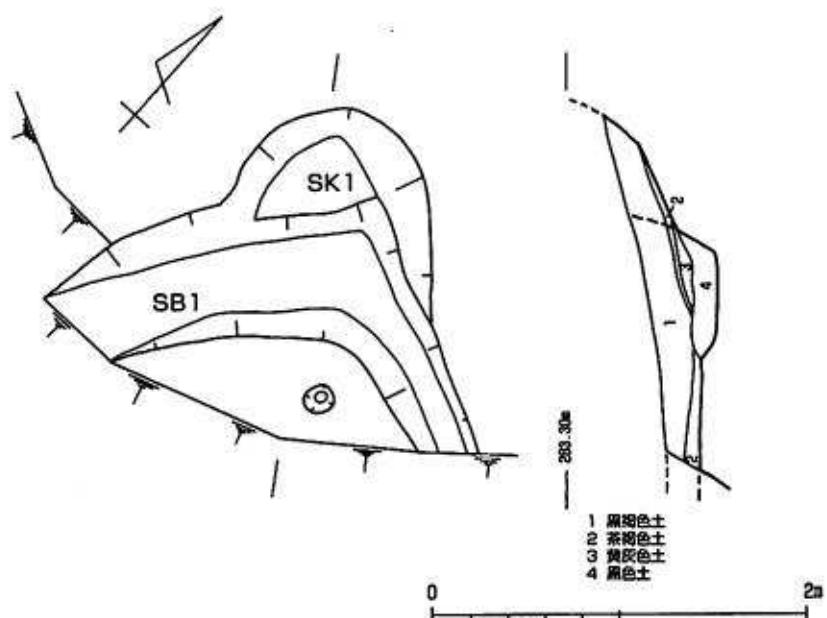
SB1と重複する楕円形を呈すると考えられる土坑であるが、大半が流失しているため全体的には規模等については不明である。底面についても傾斜しており、その性格等については不明である。出土遺物としては、二重口縁を有する土師器の壺形土器（第2-5図3・4）などがある。

#### 溝状遺構

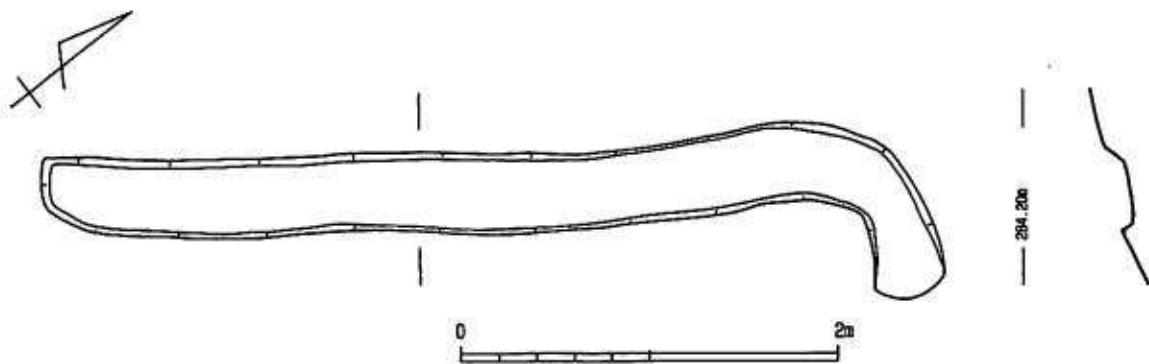
##### SD1（第2-4図、図版2-2c）

調査区の中央付近に位置し、等高線と平行する状態で東西方向に掘られた溝状遺構である。東端は南側に向けてわずかに屈曲して終わる。規模は長さ約4.8m、幅約40cm、深さは約15cmで、断面は浅い逆台形を呈する。周辺部に遺構を伴わないことから、どのような機能を有していたもののかは不明である。

遺構内からは弥生時代中期中頃と考えられる壺形土器（第2-5図5）が出土した。



第2-3図 SB1・SK1実測図 (1:40)



第2-4図 SD1実測図 (1:40)

### (3) 出土遺物

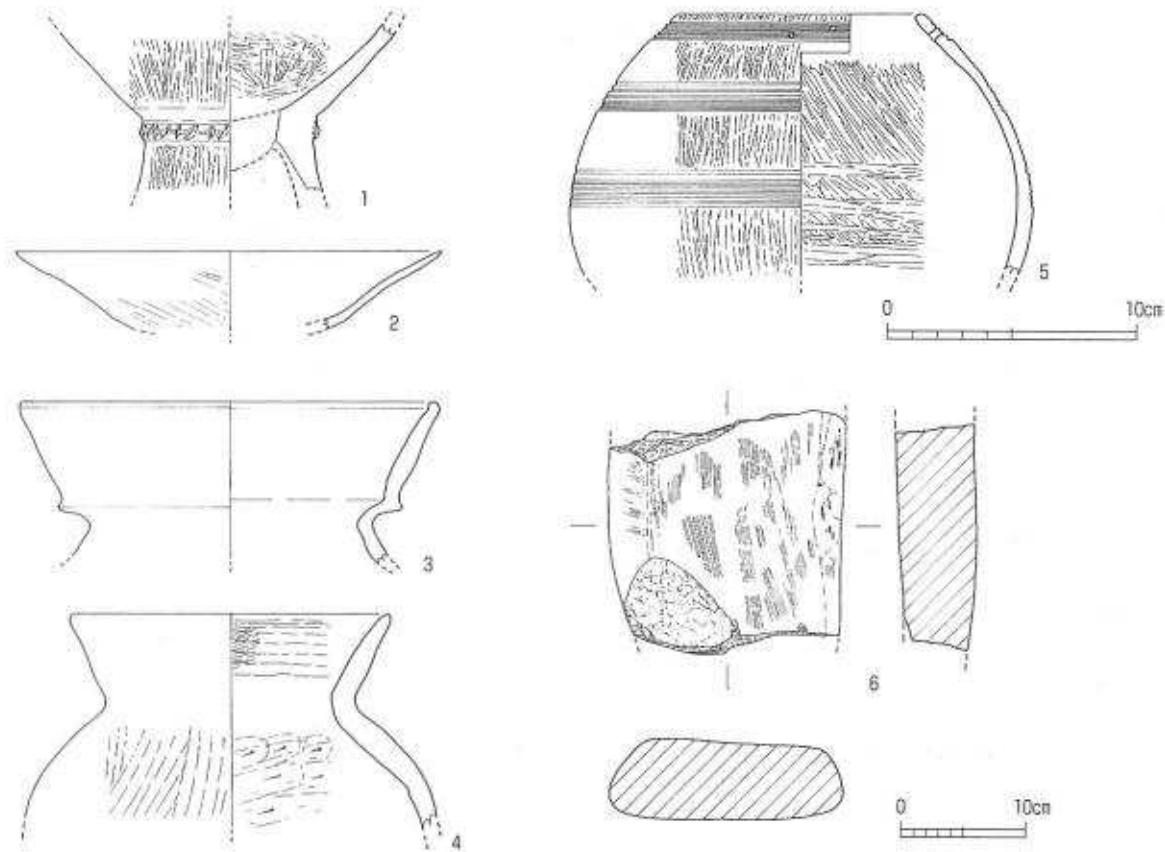
#### 土器

1 (第2-5図、図版2-3)は調査区出土の高杯で、ボル状の杯部に脚柱部が取り付くものである。杯部と脚部との外面の境には突帯を廻らし、刻目を施す。杯部内外面及び脚部外面には細かいヘラミガキを施す。なお、杯底部と脚部との接合方法は円盤充填である。時期は弥生時代中期中葉。

2 (第2-5図、図版2-3)はSB1出土の高杯の杯部で、杯体部はわずかに外反して外上方に延び、端部はやや尖って終わる。体部外面に一部粗いハケ目を残す。時期は古墳時代前半。

3・4 (第2-5図、図版2-3)はいずれもSK1下層出土の壺である。3はいわゆる二重口縁壺で頸部から短く外反したのち、二重口縁部が緩やかに外反して立ち上がり、端部はやや内側に肥厚し、終わる。内外面ともナデ調整である。4は頸部から直線的に口縁部が外上方に延び、端部は丸く納める。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のハケ後、ナデる。口縁部から体部にかけては外面は粗いハケ目、内面はヘラ削りで、頸部直下に指頭による圧痕が認められる。時期はいずれも古墳時代前半。

5 (第2-5図、図版2-3)はSD1下層出土の無頸壺である。体部中央から丸みをもって内



第2-5図 出土遺物実測図 I (1:3, 1:6)

湾して立ち上がり、口縁端部は丸く納める。口端部外面には刻目を施し、その直下に5条の沈線を廻らす。さらに体部中位にかけてヘラミガキ後に2段にわたり5～6条の沈線を廻らしている。口端部の内外面はナデており、内面は斜めのヘラミガキに部分的に横方向のナデを加える。口端部直下には外から内側に穿った焼成前の穿孔が2個ある。時期は弥生時代中期中葉。

**台石（第2－5図 図版2－3）** 台石は自然石を利用した作業台石で、平板状の石材を使用しており、主に使用面は表裏2面である。使用面の片方には明瞭な被熱痕跡があり、加熱した鉄などの加工に用いられたことがわかり、鉄床石として使用されたと思われる。

#### （4）まとめ

今回の調査では竪穴住居跡1軒、土坑1基、溝状遺構1条などを検出した。しかし住居跡と土坑については、大半の部分が消失しているため、詳細については明らかではない。ただ、出土した遺物などから両方の遺構とも古墳時代の遺構であろうと推定できる。

溝状遺構についてはその性格は明らかではないが、弥生時代中期中頃のものと考えられる。

今回の調査は、調査範囲が狭いうえ遺構の密度も希薄であることから、遺跡としての評価は今後の課題である。また、布掛遺跡と同様に弥生時代中期と古墳時代前半の遺構・遺物が確認されていることから、本丘陵上においても布掛け遺跡と同じ時期の集落が展開していたことが明らかとなった。

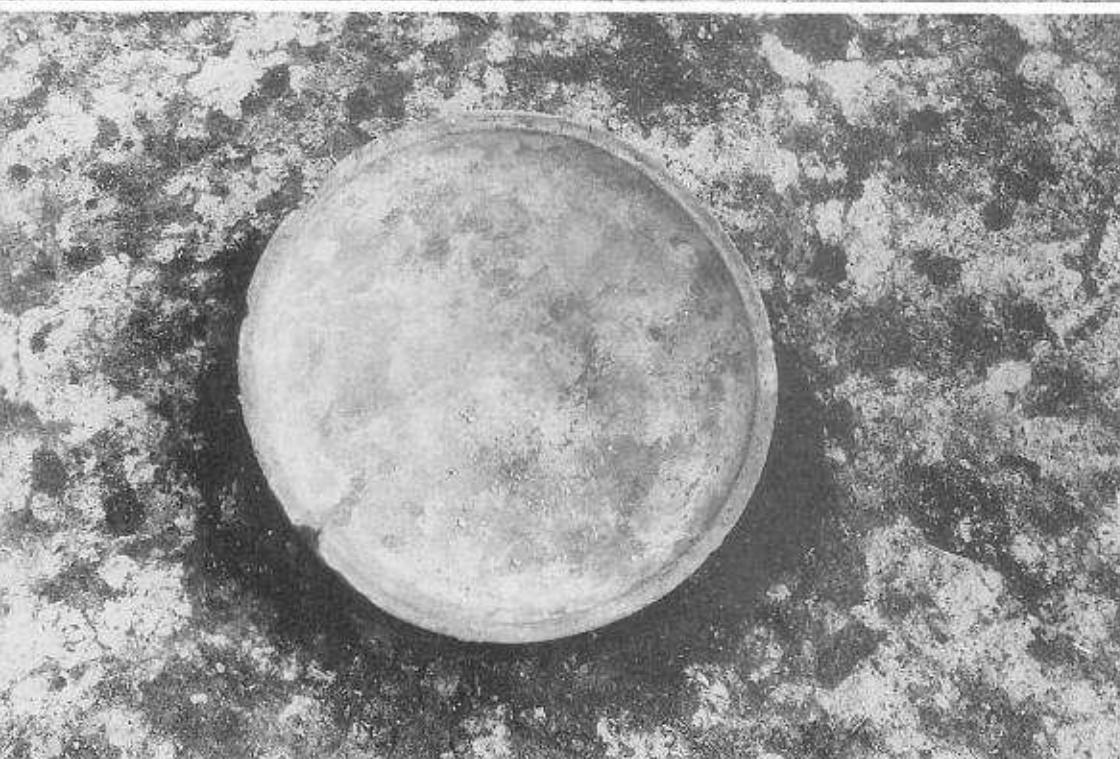




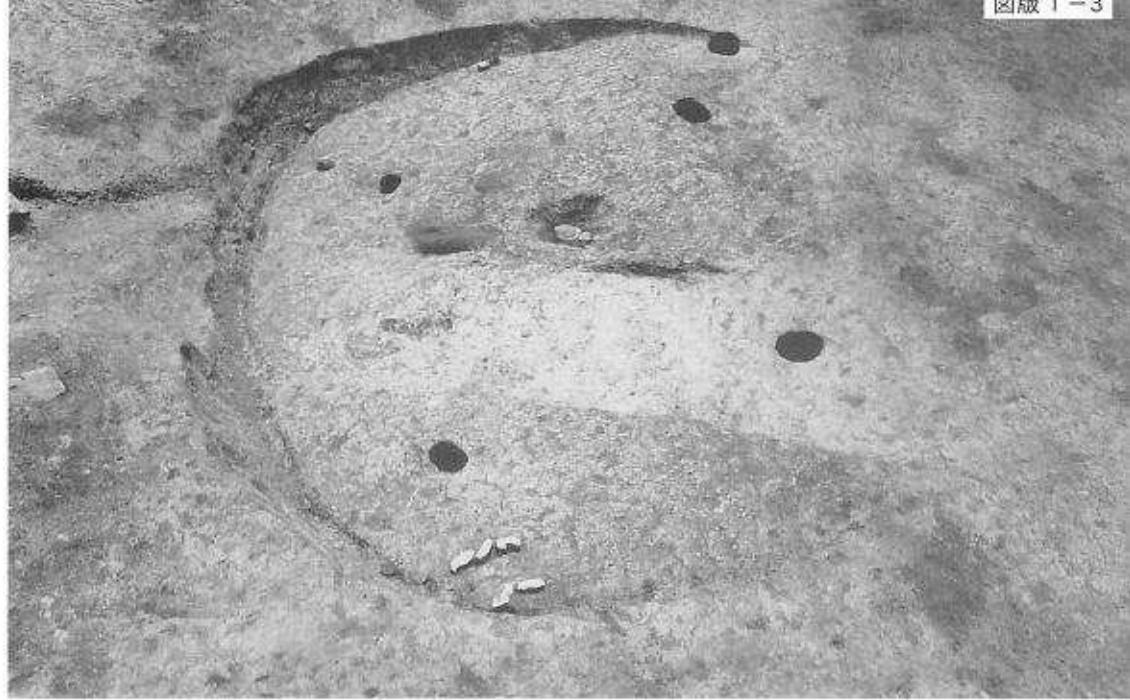
a SBII-2 遺物出土状況



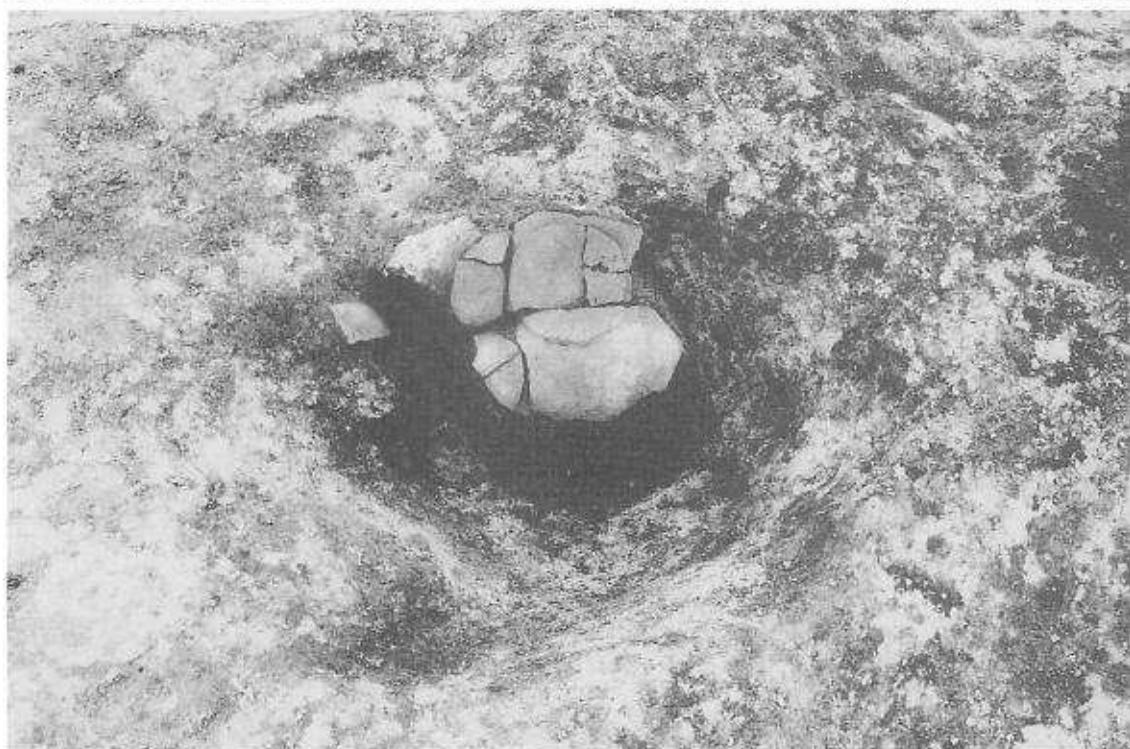
b SBII-3 床面検出状況  
(南西から)



c SBII-3 遺物出土状況



a SBII-4 床面検出状況  
(北西から)



b SBII-4 炉内遺物出土状況



c SBII-5 床面検出状況  
(南西から)



a SBII-6・8 床面検出状況  
(南西から)



b SBII-6 床面検出状況  
(南西から)



c SBII-6 炭化物出土状況

a SBII-7 床面検出状況  
(南西から)



b SBII-8 床面検出状況  
(南西から)



c SBII-8 遺物出土状況





a SBII-9 床面検出状況  
(南西から)



b SBII-9 遺物出土状況

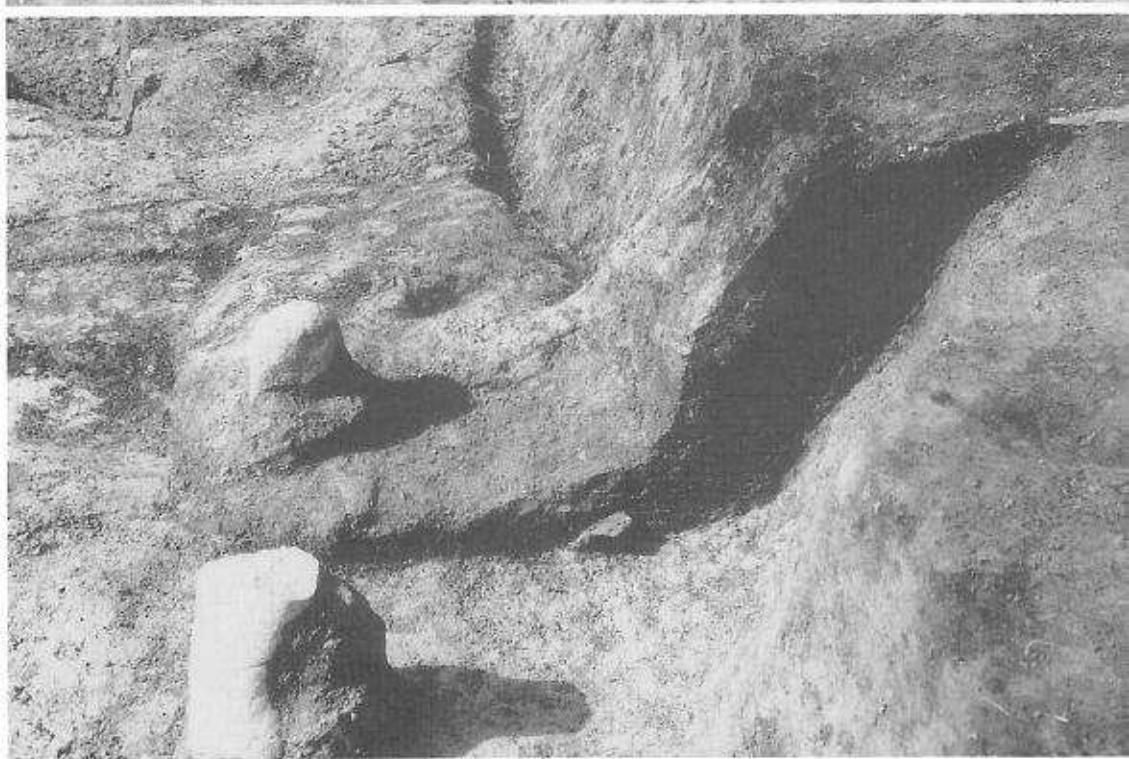


c SBII-10 床面検出状況  
(南西から)

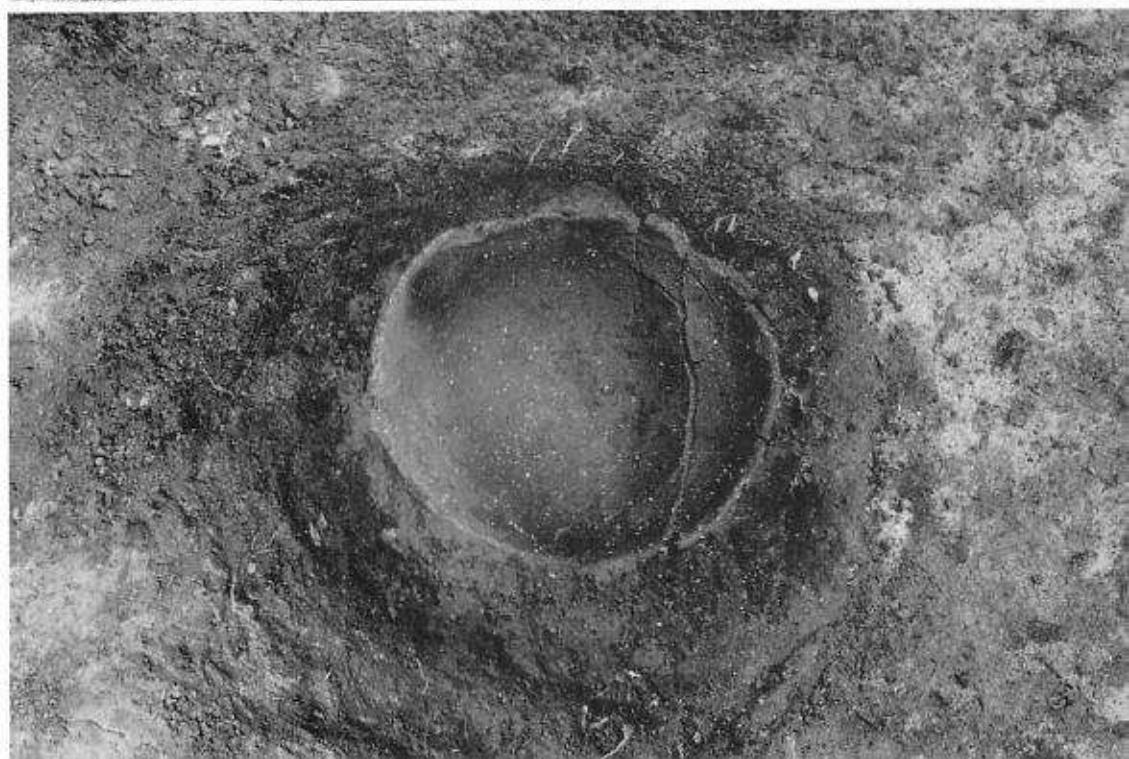
a SBII-10 カマド検出状況  
(南西から)



b SBII-10 カマド土層断面  
(南東から)

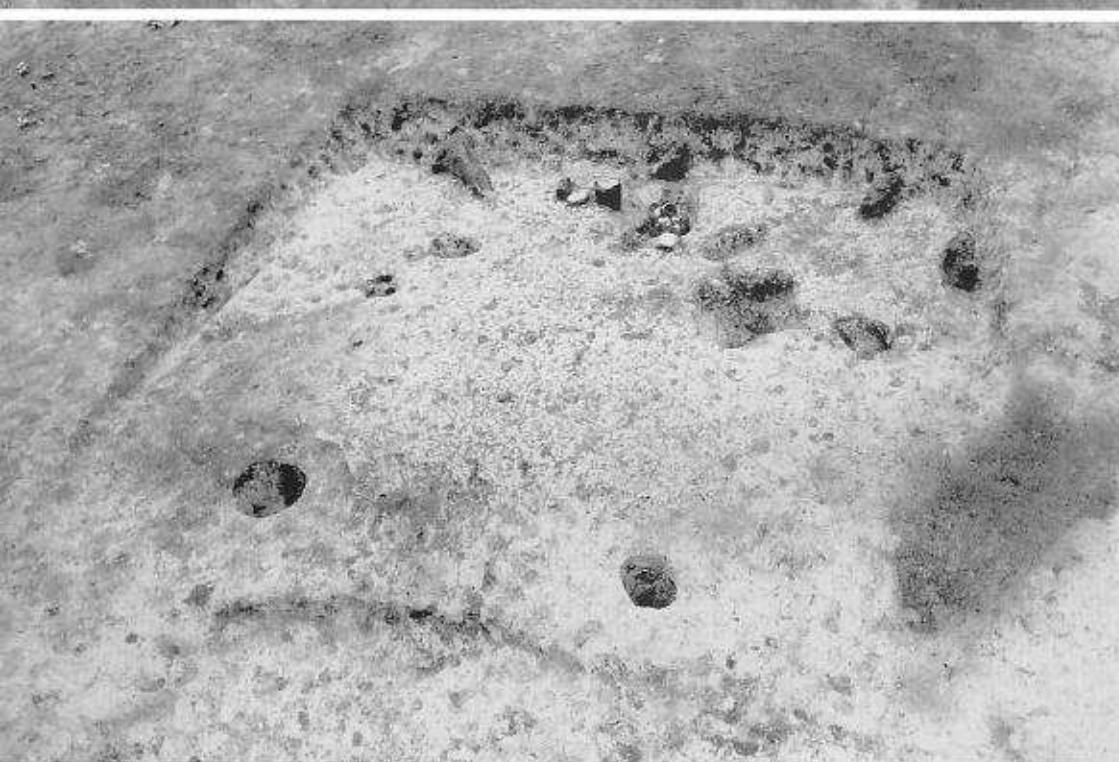


c SBII-10 遺物出土状況





a SBII-11 床面検出状況  
(南西から)



b SBII-12 床面検出状況  
(東から)



c SBII-12 遺物出土状況

a SBII-13 床面検出状況  
(南東から)



b SBII-14 床面検出状況  
(南東から)



c SBII-15 床面検出状況  
(南から)

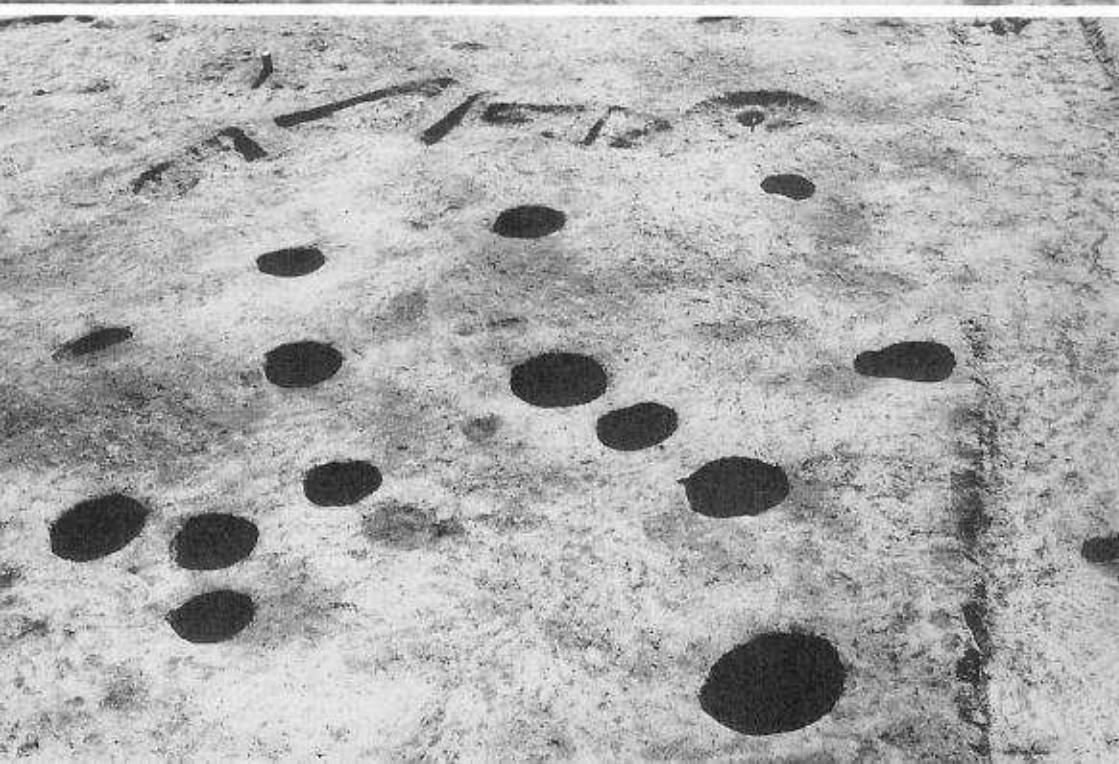




a 挖立柱建物跡 II-1 完掘状況  
(南西から)



b 挖立柱建物跡 II-2 完掘状況  
(北から)



c 挖立柱建物跡 II-3 完掘状況  
(北東から)

a 掘立柱建物跡 II-4 完掘状況  
(南西から)



b 掘立柱建物跡 II-5 完掘状況  
(南西から)



c 掘立柱建物跡 II-3・6・  
7・9 完掘状況  
(南西から)

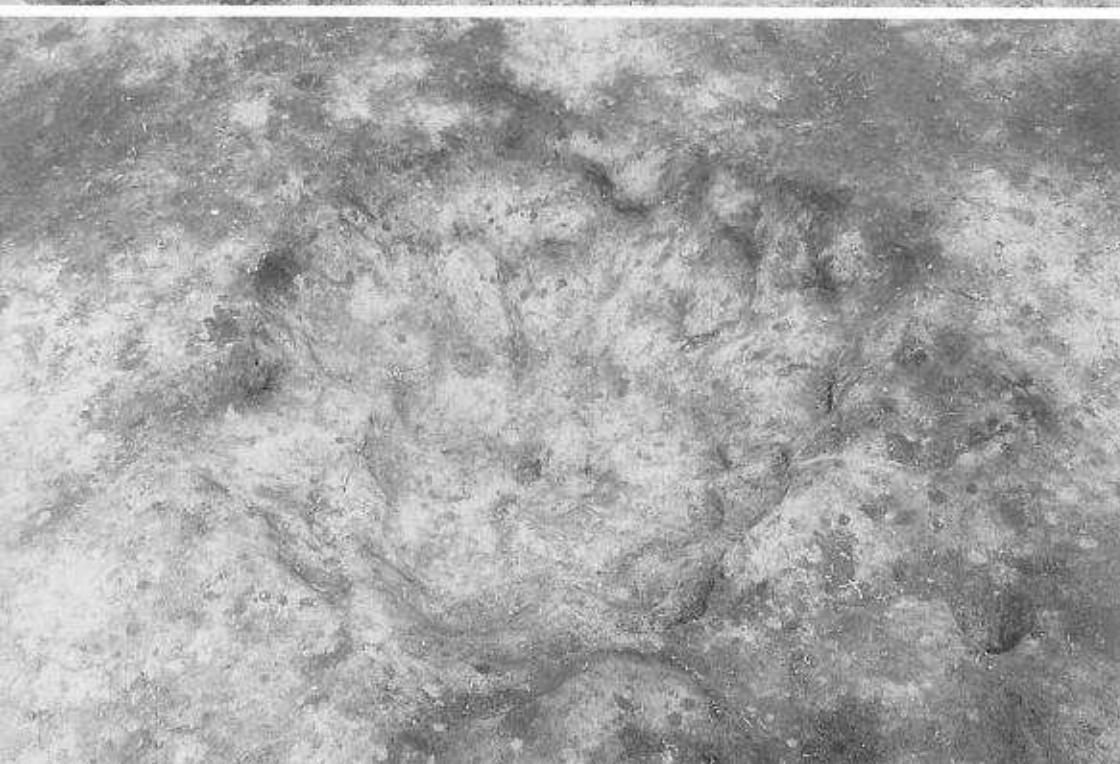




a 挖立柱建物跡 II-8 完掘状況  
(南西から)

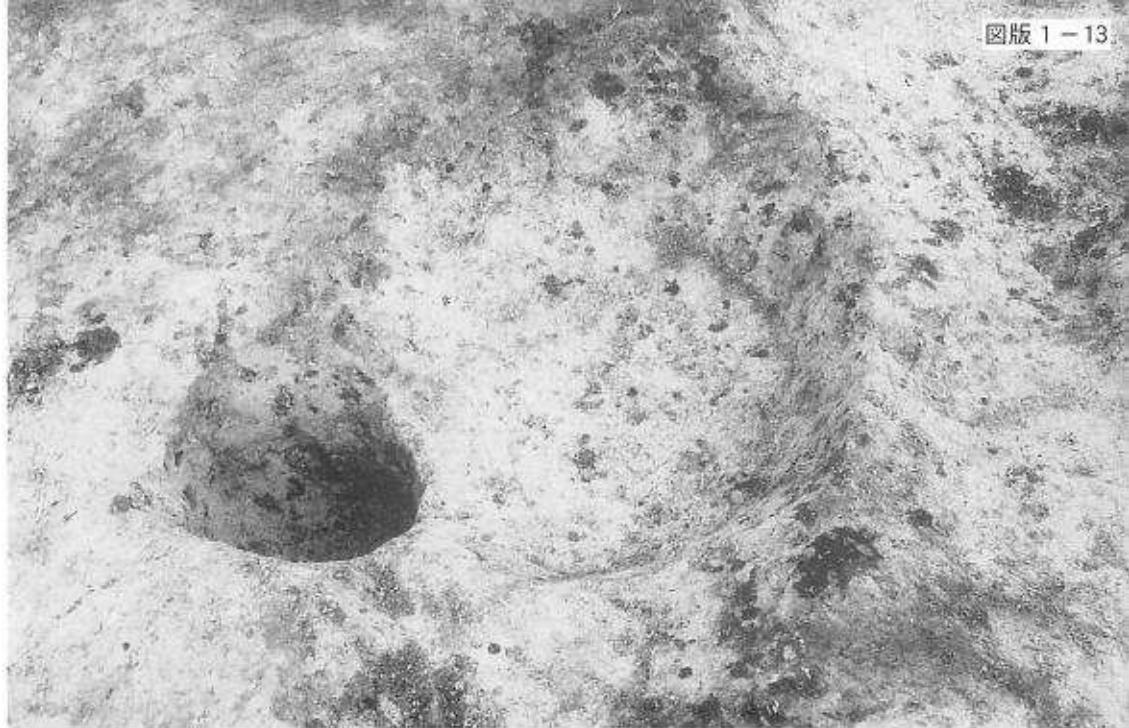


b 挖立柱建物跡 II-10 完掘状況  
(南西から)

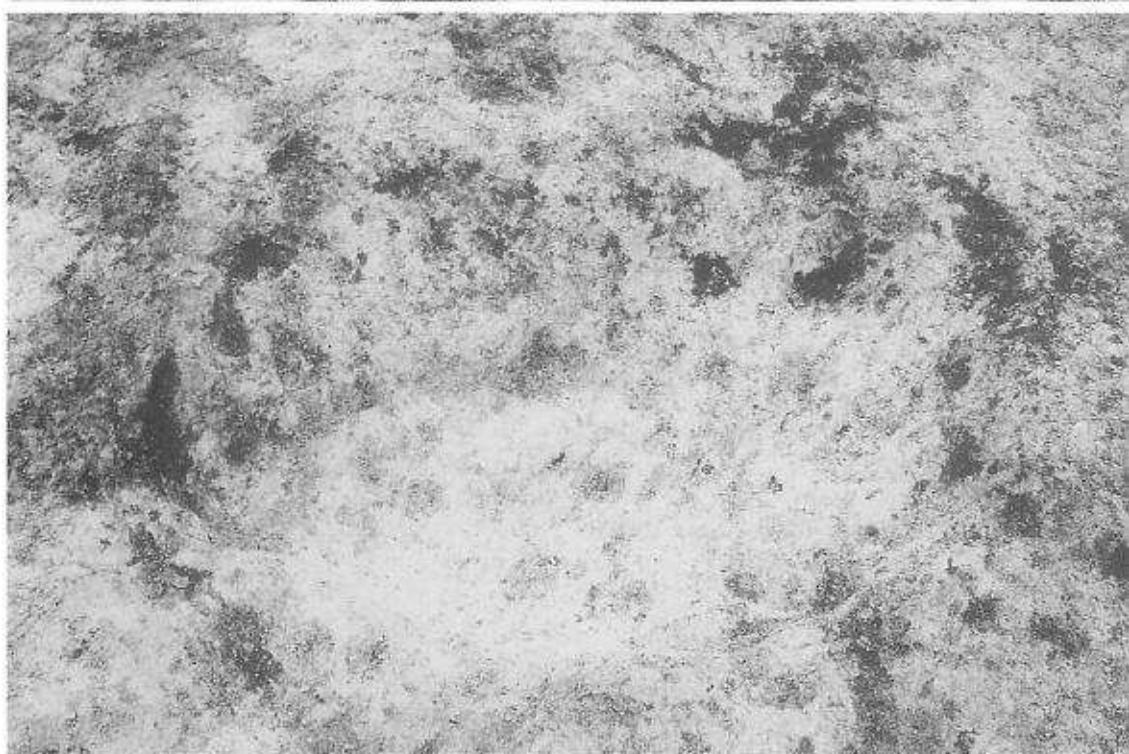


c SKII-1 完掘状況  
(南西から)

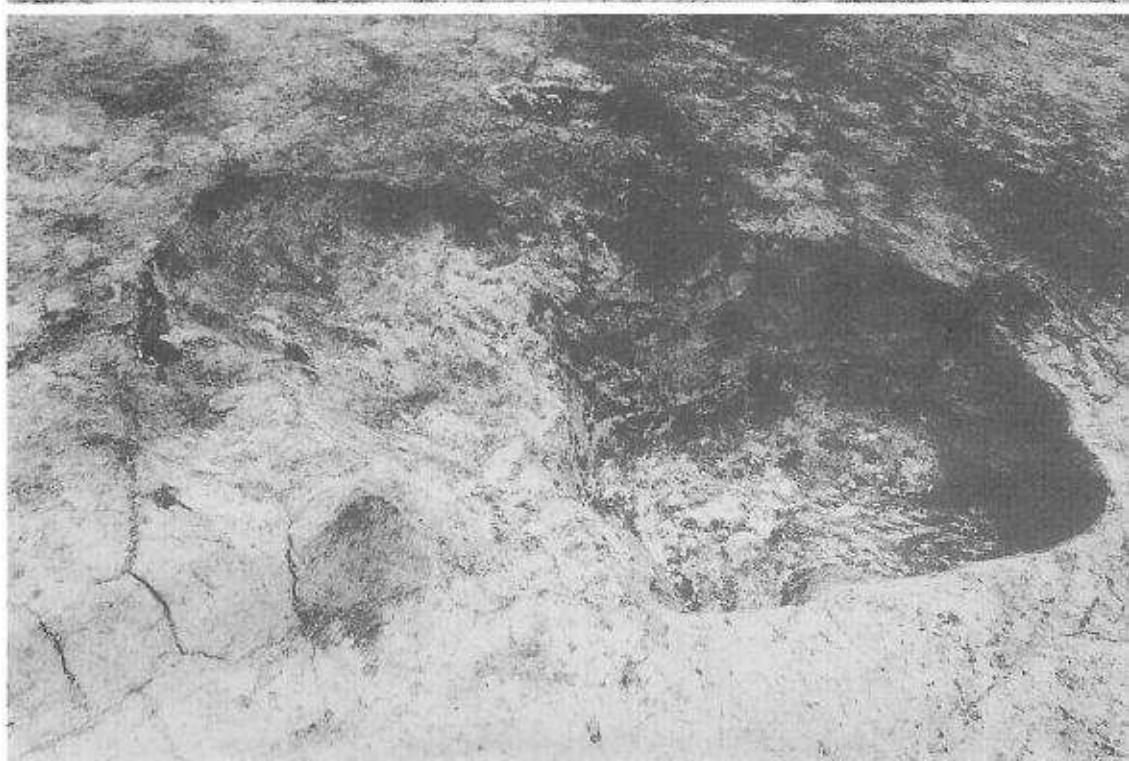
a SKII-2 完掘状況  
(南東から)



b SKII-3 完掘状況  
(南から)



c SKII-4 完掘状況  
(北から)

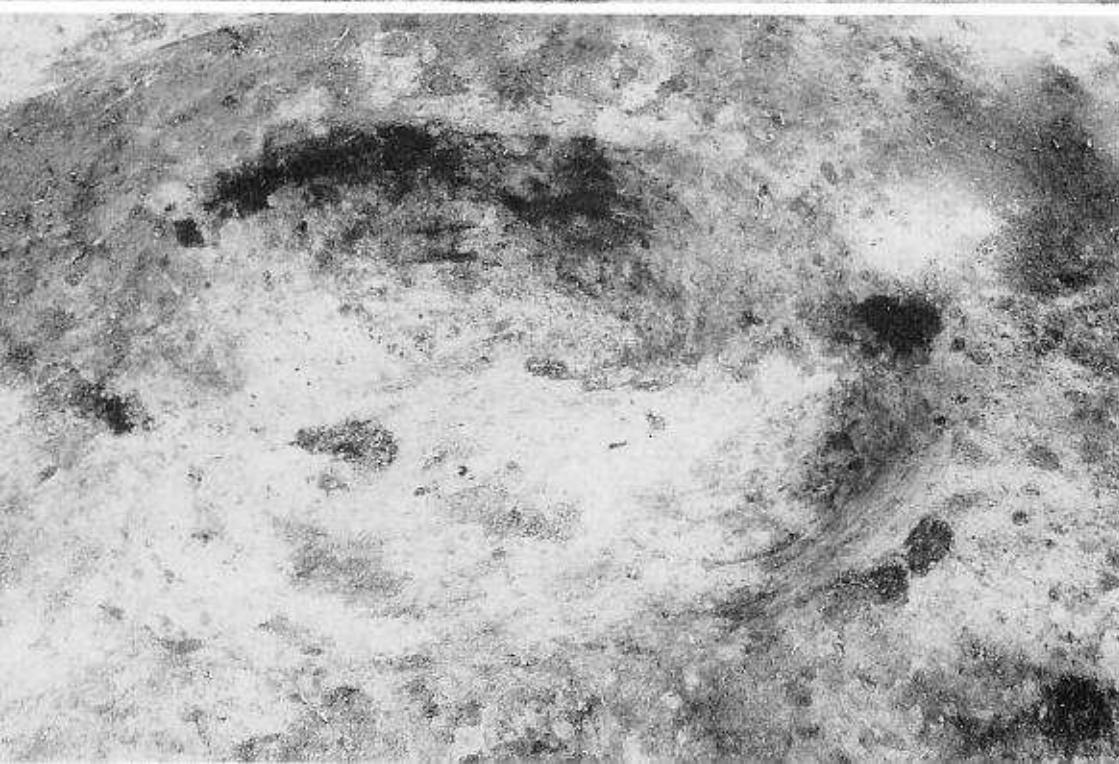




a SKII-5 完掘状況  
(南から)



b SKII-6 完掘状況  
(南東から)

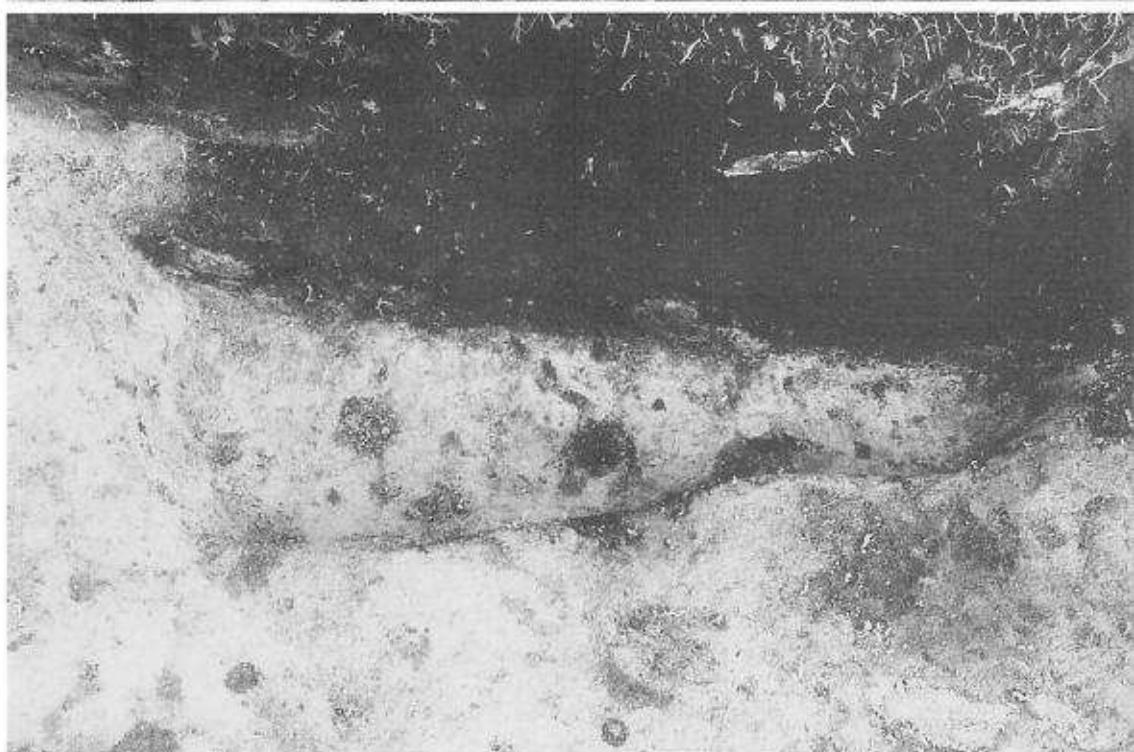


c SKII-7 完掘状況  
(南から)

a SKII-8 完掘状況  
(南東から)

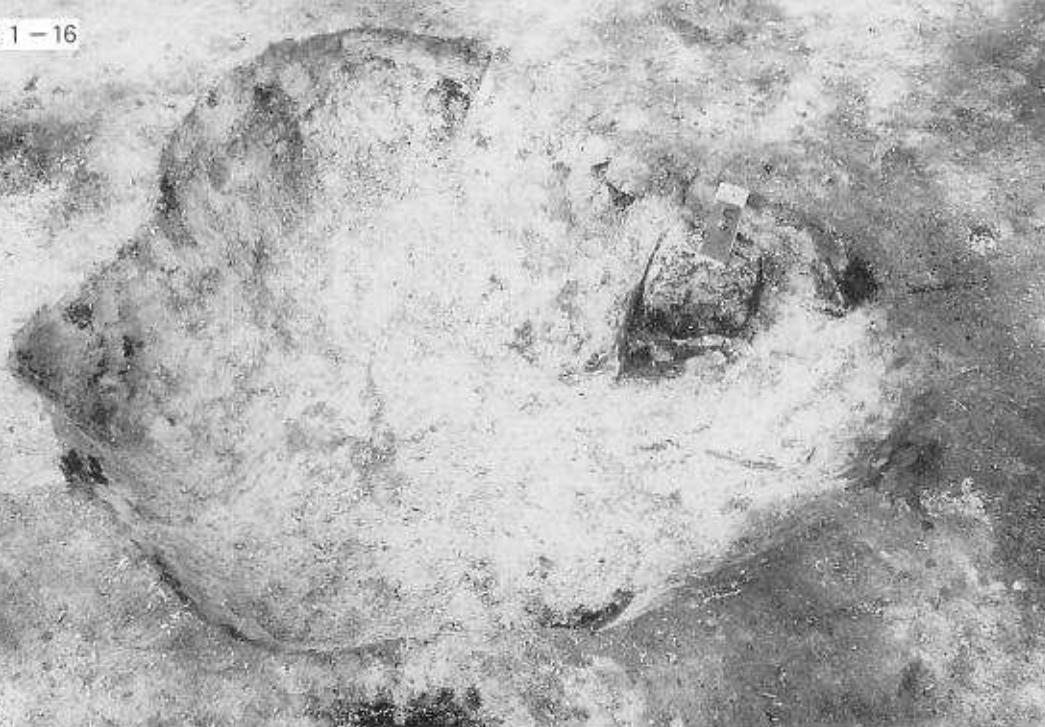


b SKII-9 完掘状況  
(北西から)

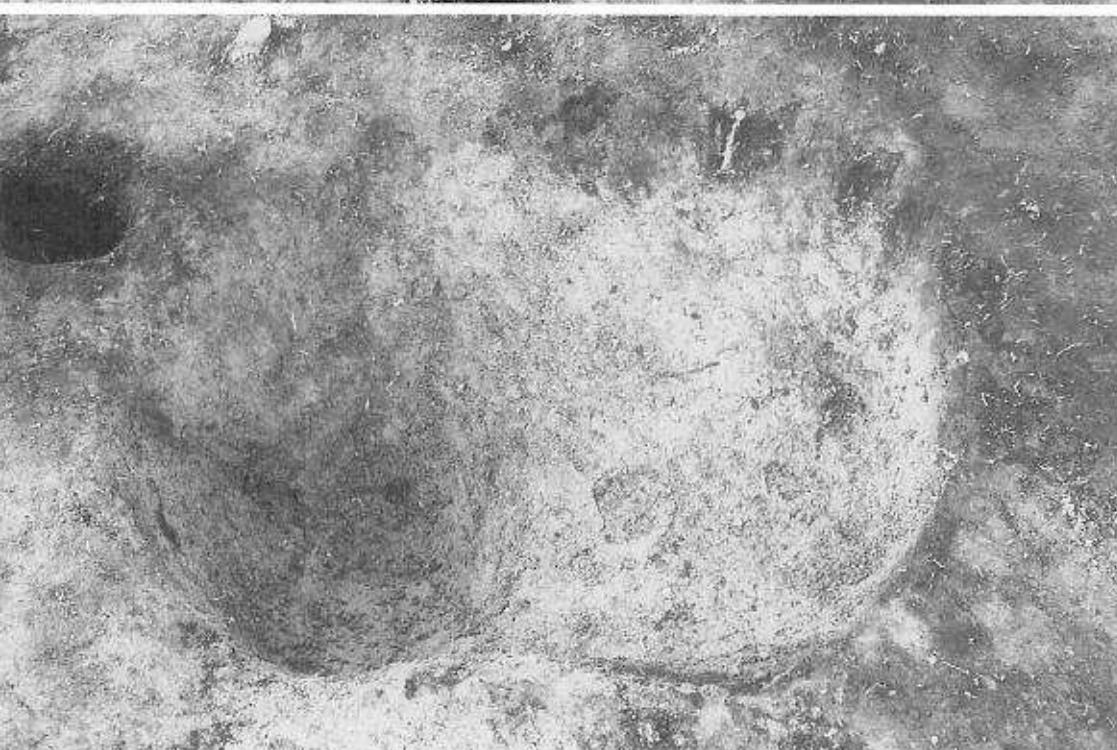


c SKII-10 完掘状況  
(西から)

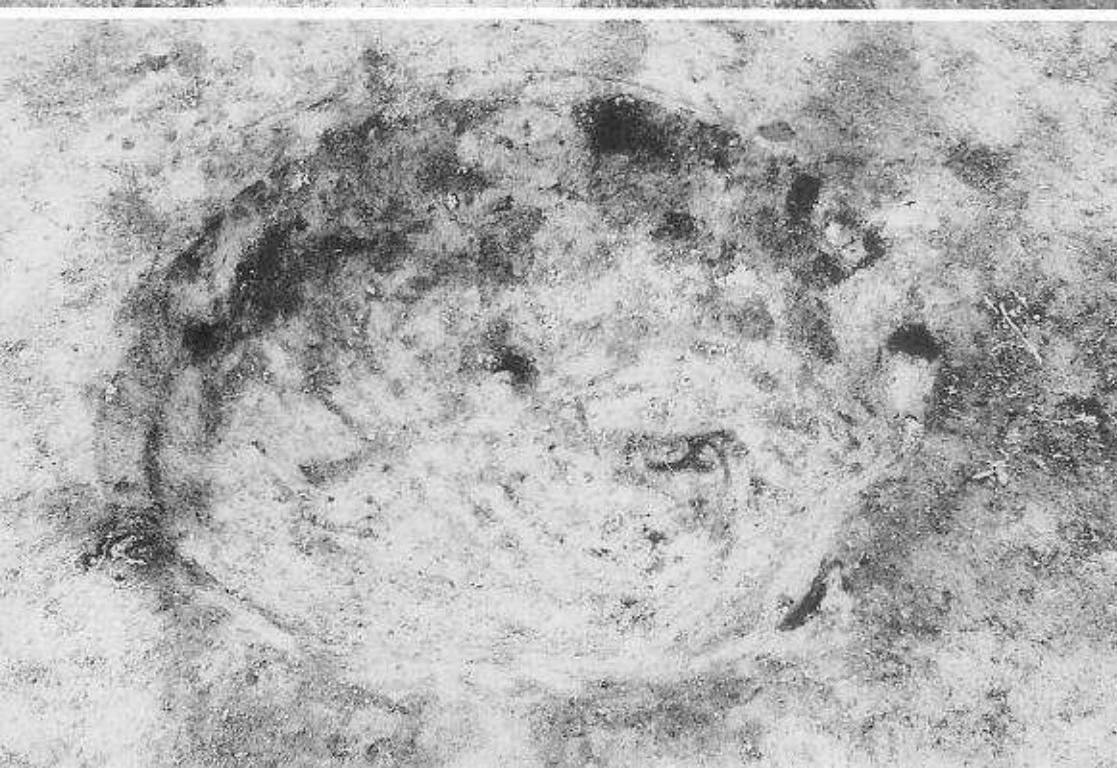




a SKII-11 完掘状況  
(南から)

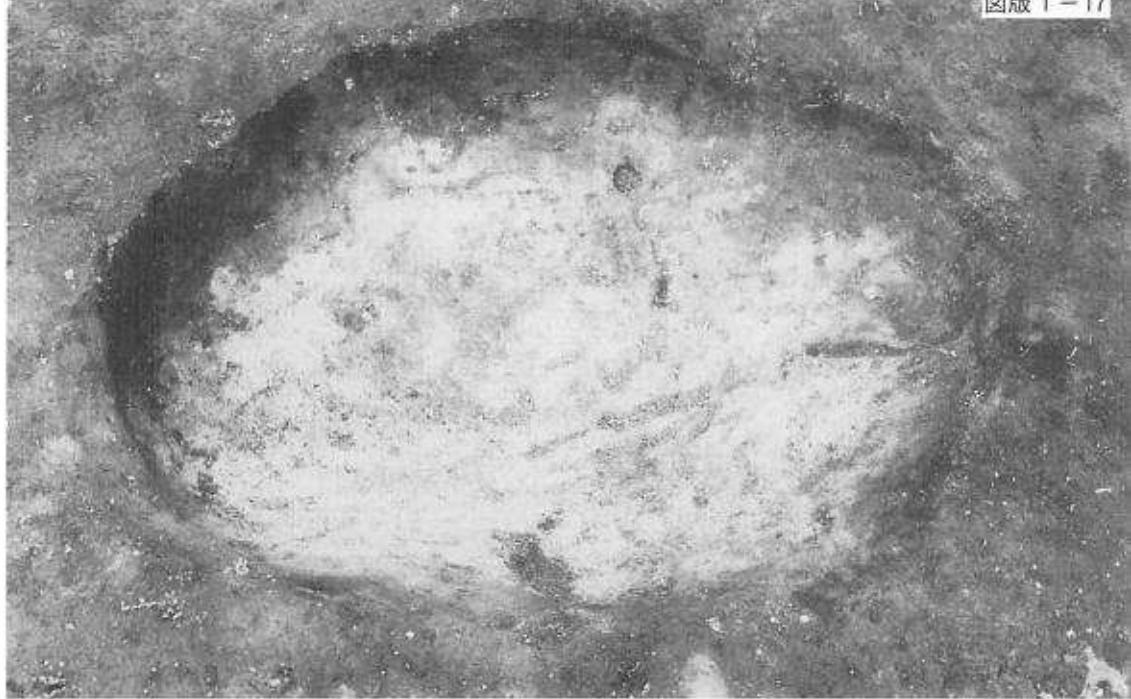


b SKII-12 完掘状況  
(南から)

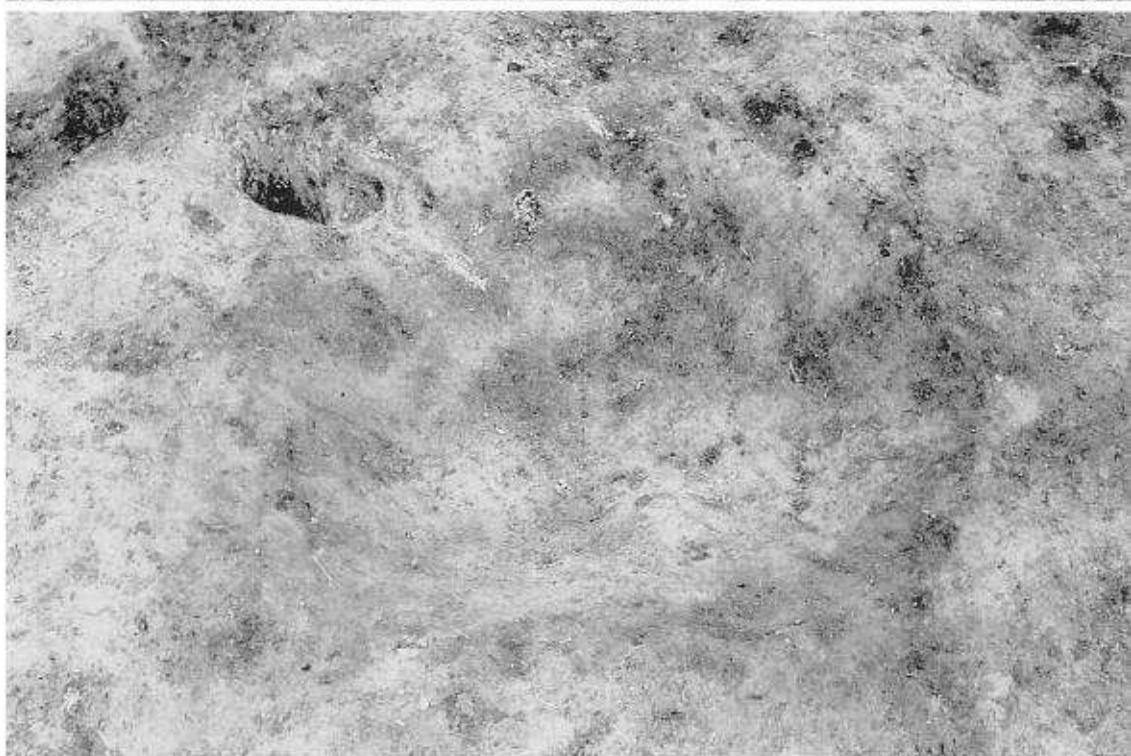


c SKII-13 完掘状況  
(南から)

a SKII-14 完掘状況  
(西から)



b SKII-15 完掘状況  
(南西から)



c SKII-16 完掘状況  
(北西から)





a SDII-1 完掘状況  
(南東から)



b SDII-2 完掘状況  
(南西から)



c SDII-3 完掘状況  
(南西から)

a SDII-4 完掘状況  
(南東から)

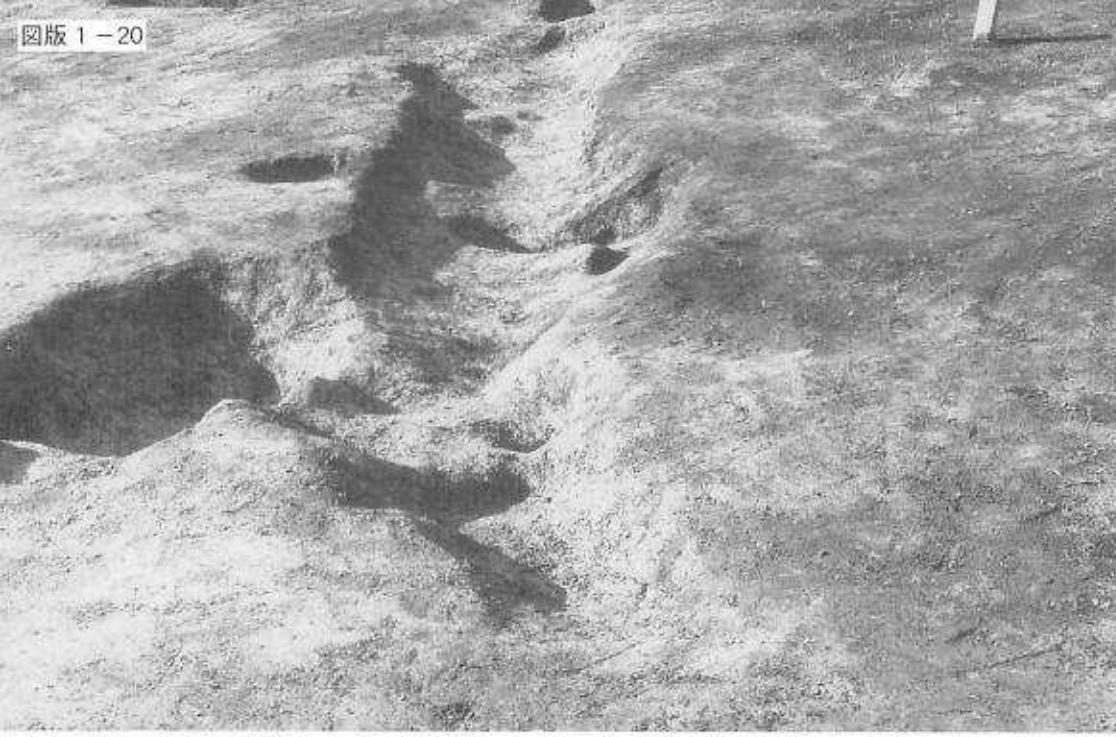


b SDII-5 完掘状況  
(南東から)



c SDII-6 完掘状況  
(南東から)

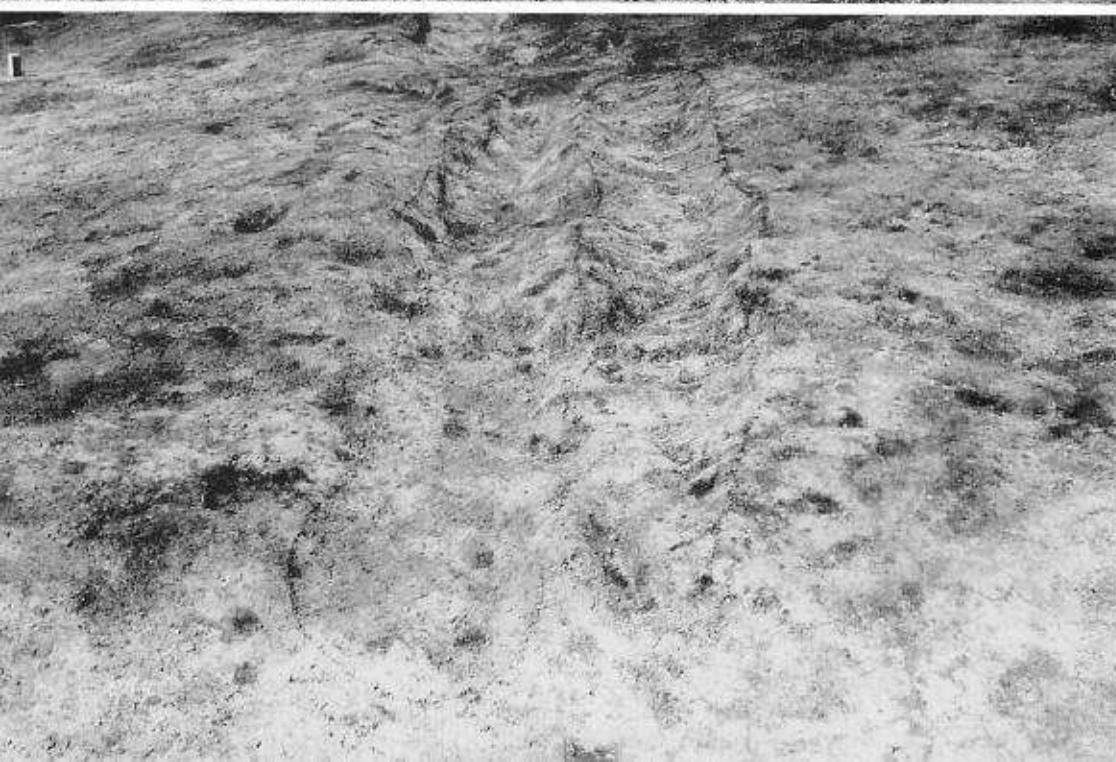




a SDII-7 完掘状況  
(南東から)



b SDII-8 完掘状況  
(南東から)

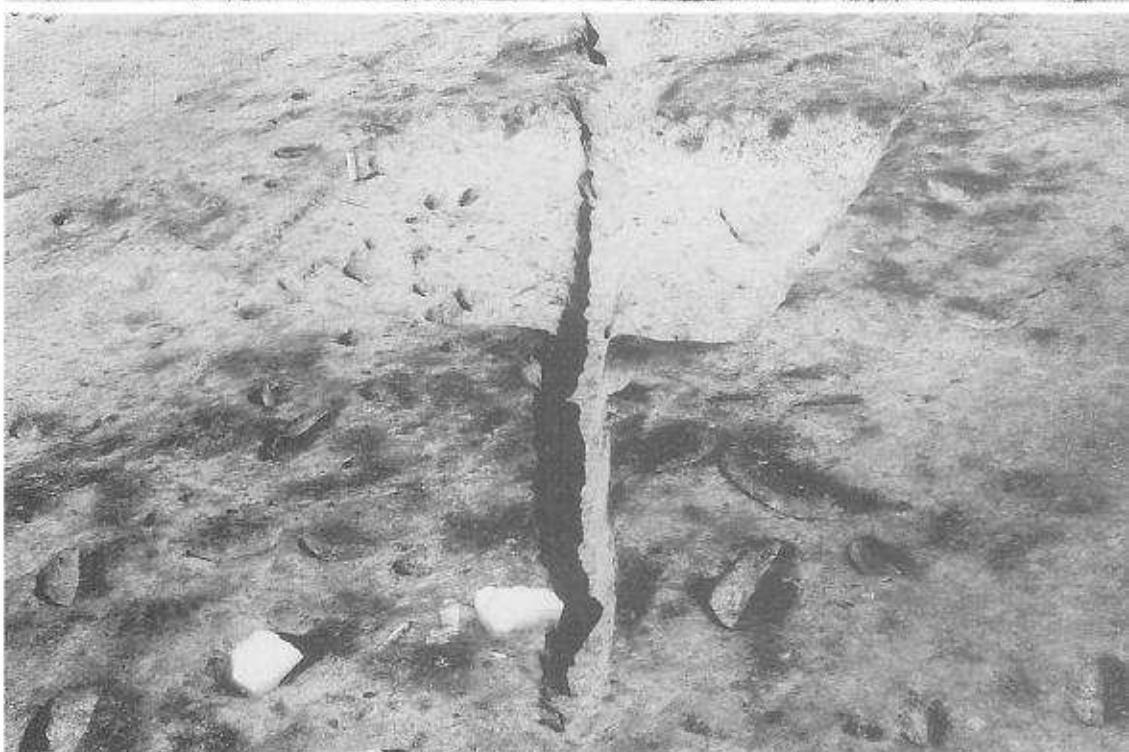


c SDII-9・10 完掘状況  
(南東から)

a SDII-11 完掘状況  
(南東から)

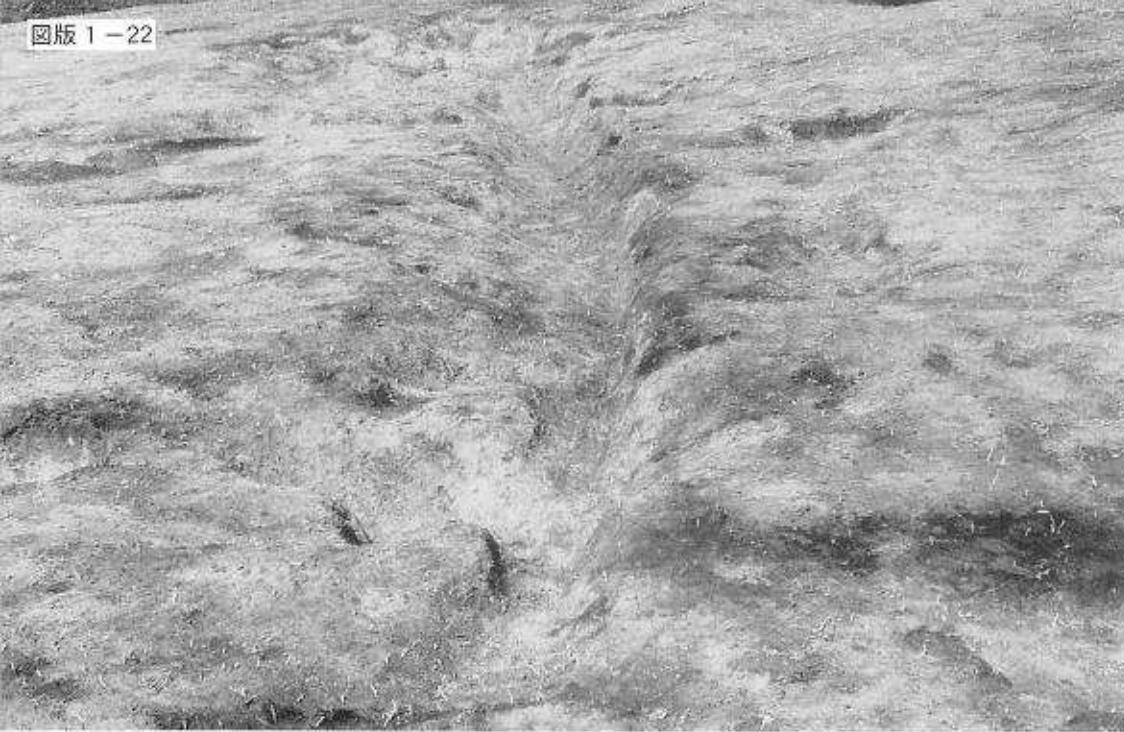


b SDII-12 完掘状況  
(南東から)



c SDII-13 完掘状況  
(南東から)





a SDII-14 完掘状況  
(南東から)



b SDII-15 完掘状況  
(南東から)



c SDII-16 完掘状況  
(北から)

a SDII-17 完掘状況  
(南東から)

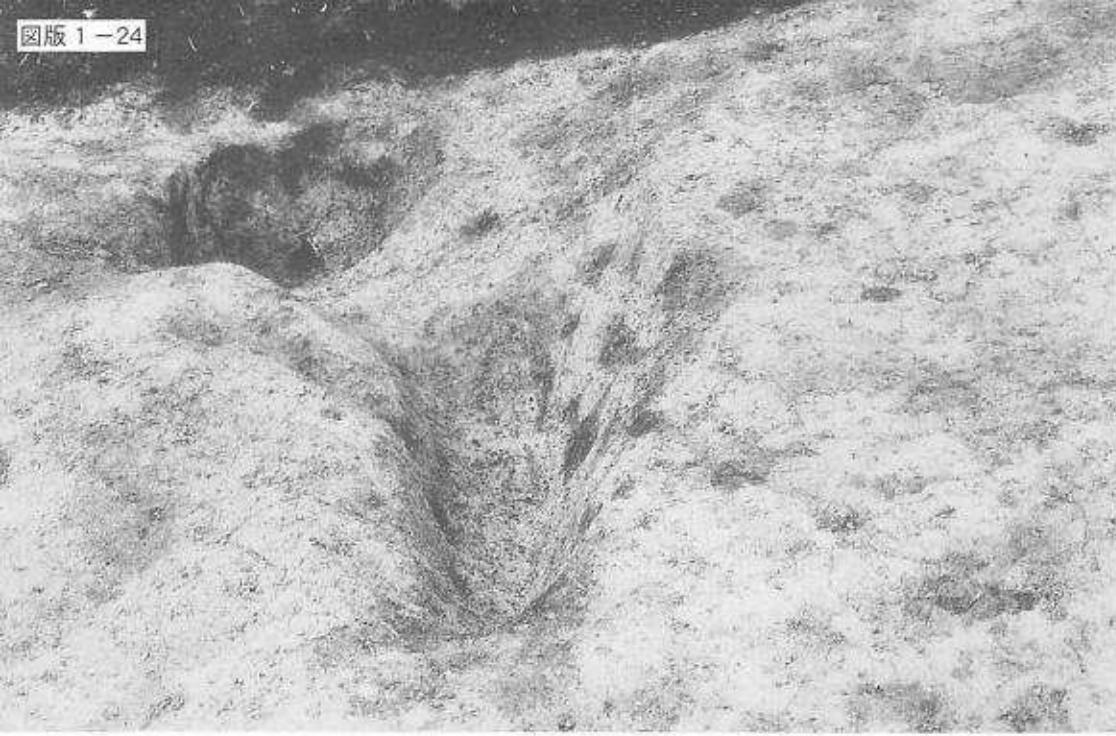


b SDII-18 完掘状況  
(南東から)



c SDII-19 完掘状況  
(南東から)





a SDII-20 完掘状況  
(南東から)



b SDII-21 完掘状況  
(北から)



c SXII-2 完掘状況  
(南東から)

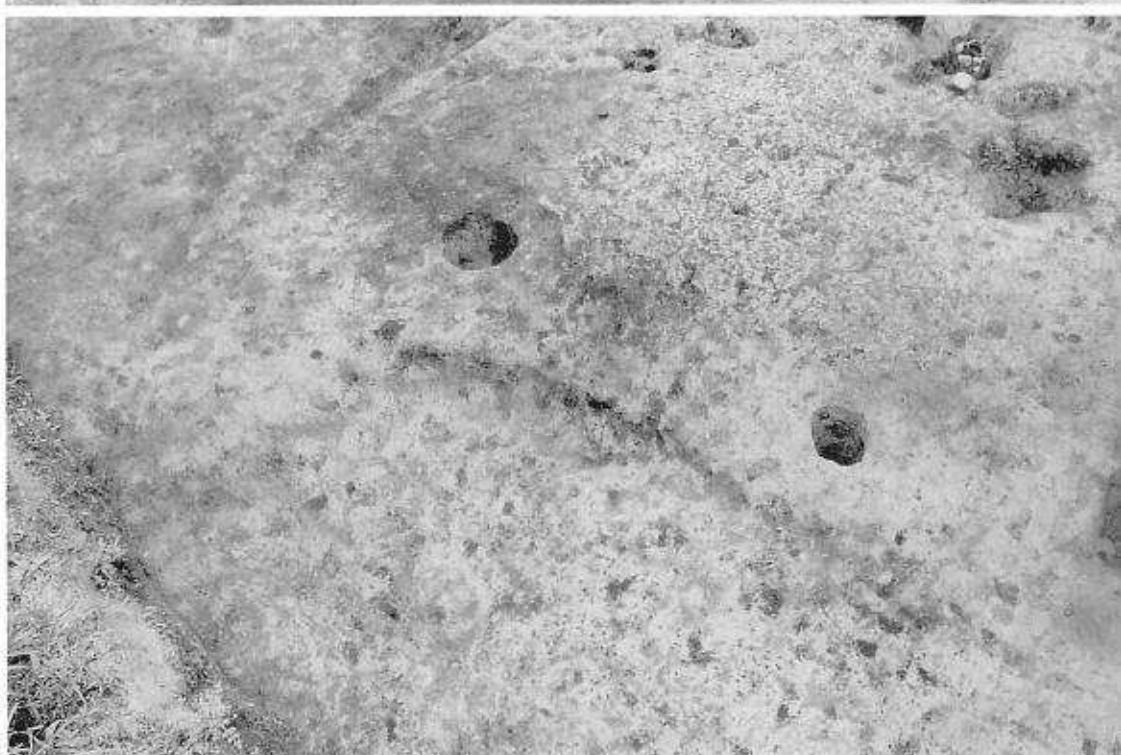
a SXII-3 完掘状況  
(南東から)

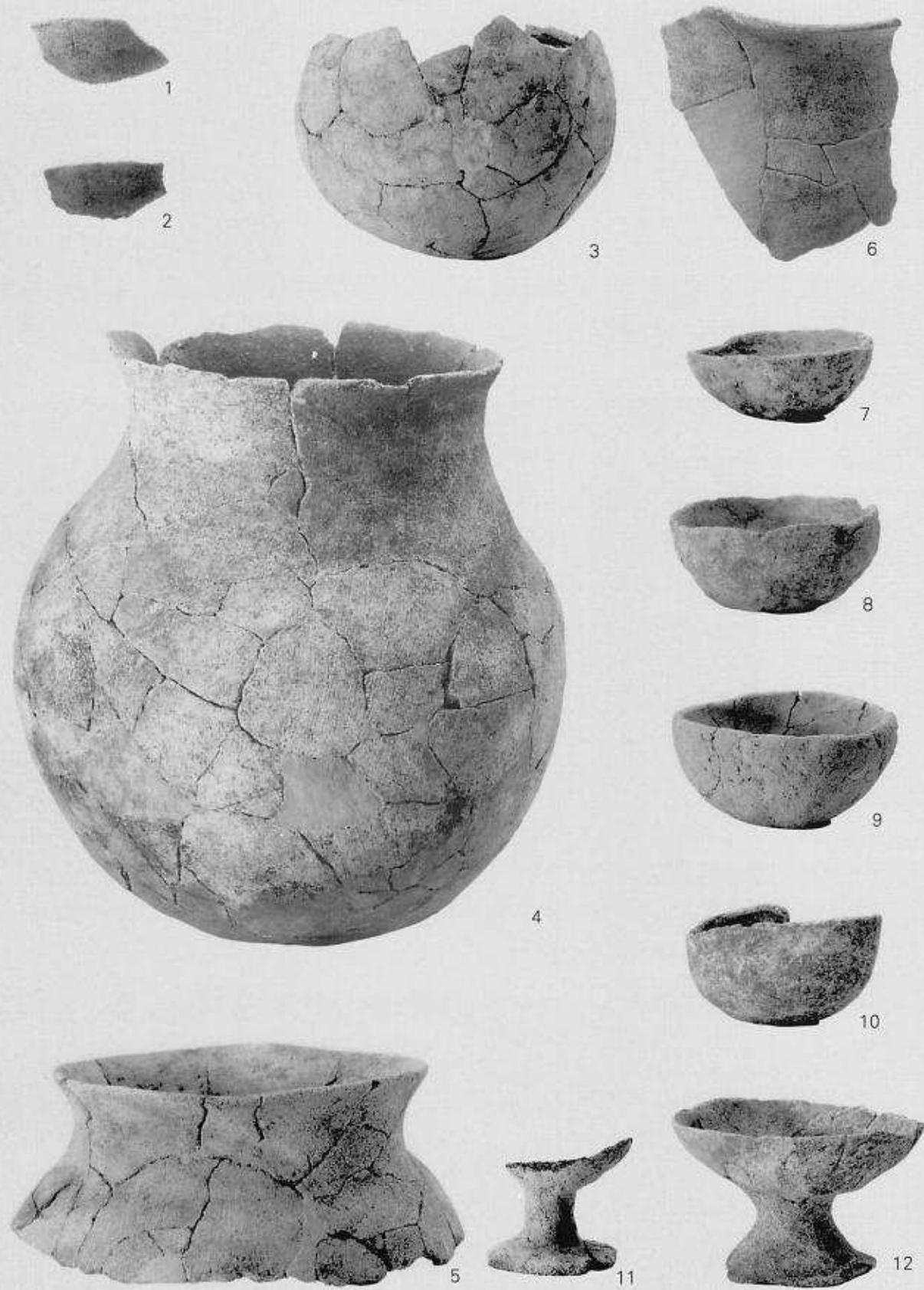


b SXII-4 完掘状況  
(南東から)

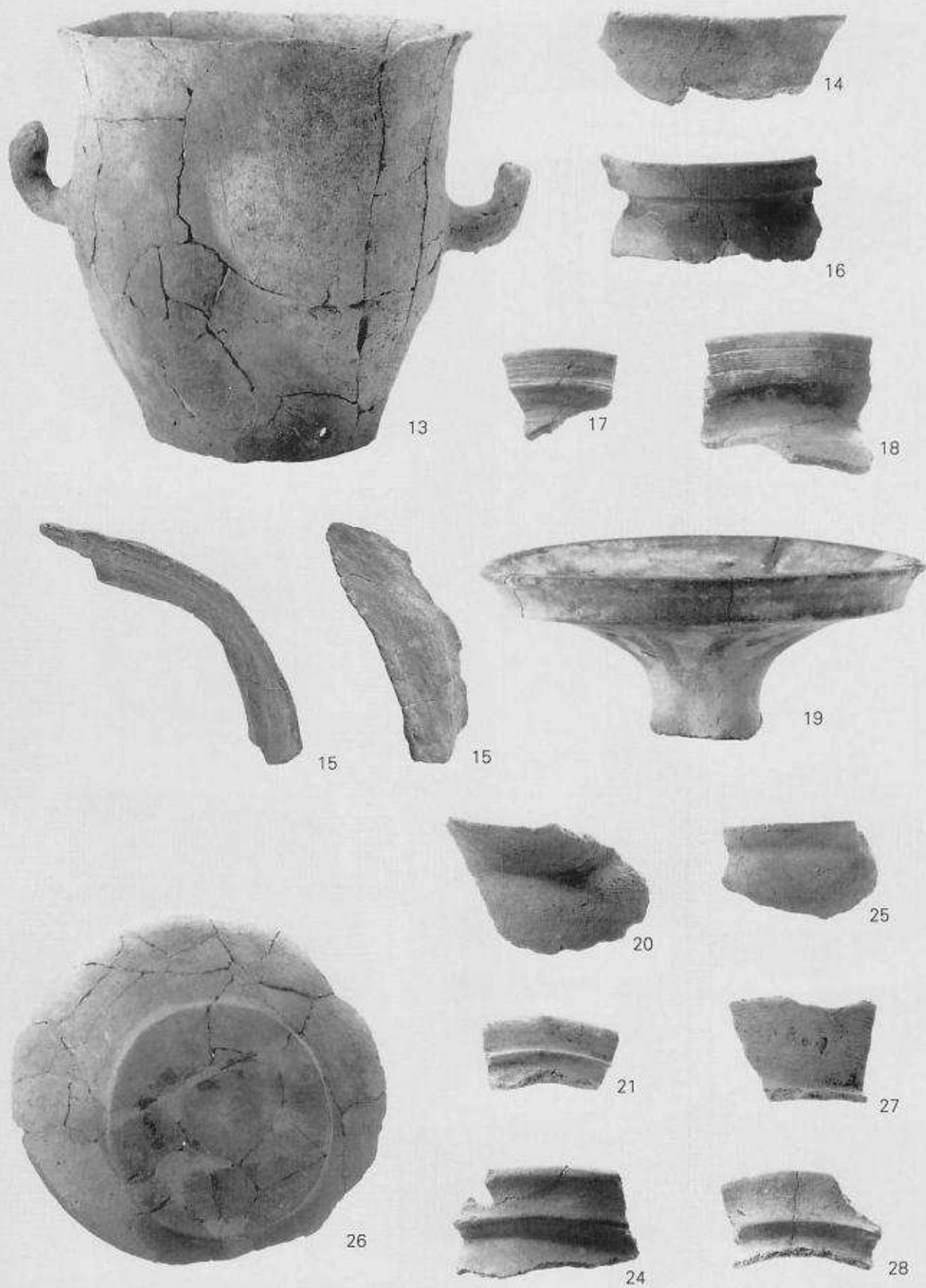


c SXII-5 完掘状況  
(東から)





出土遺物 1



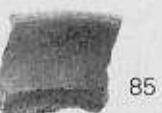
出土遺物 2



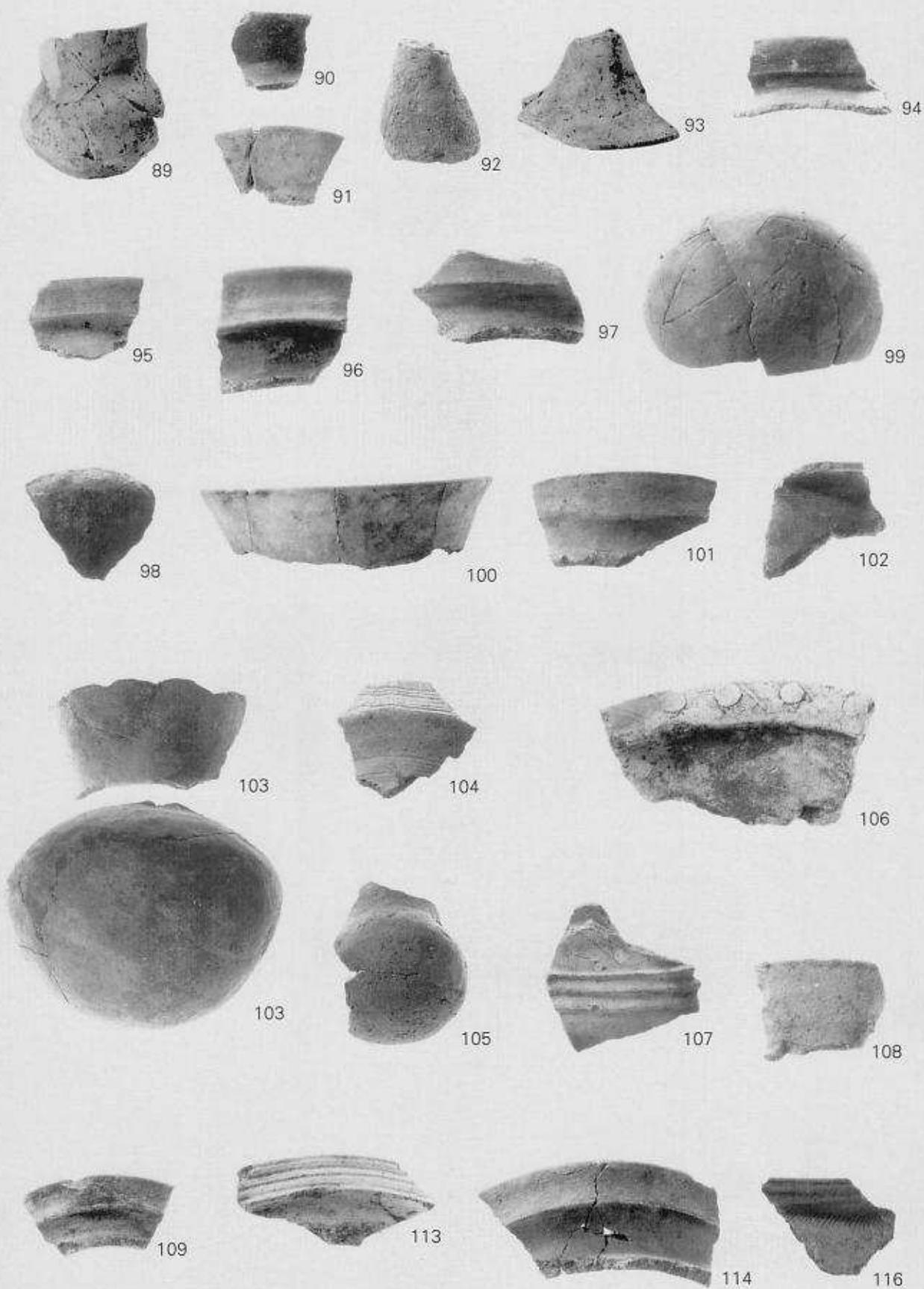
出土遺物 3



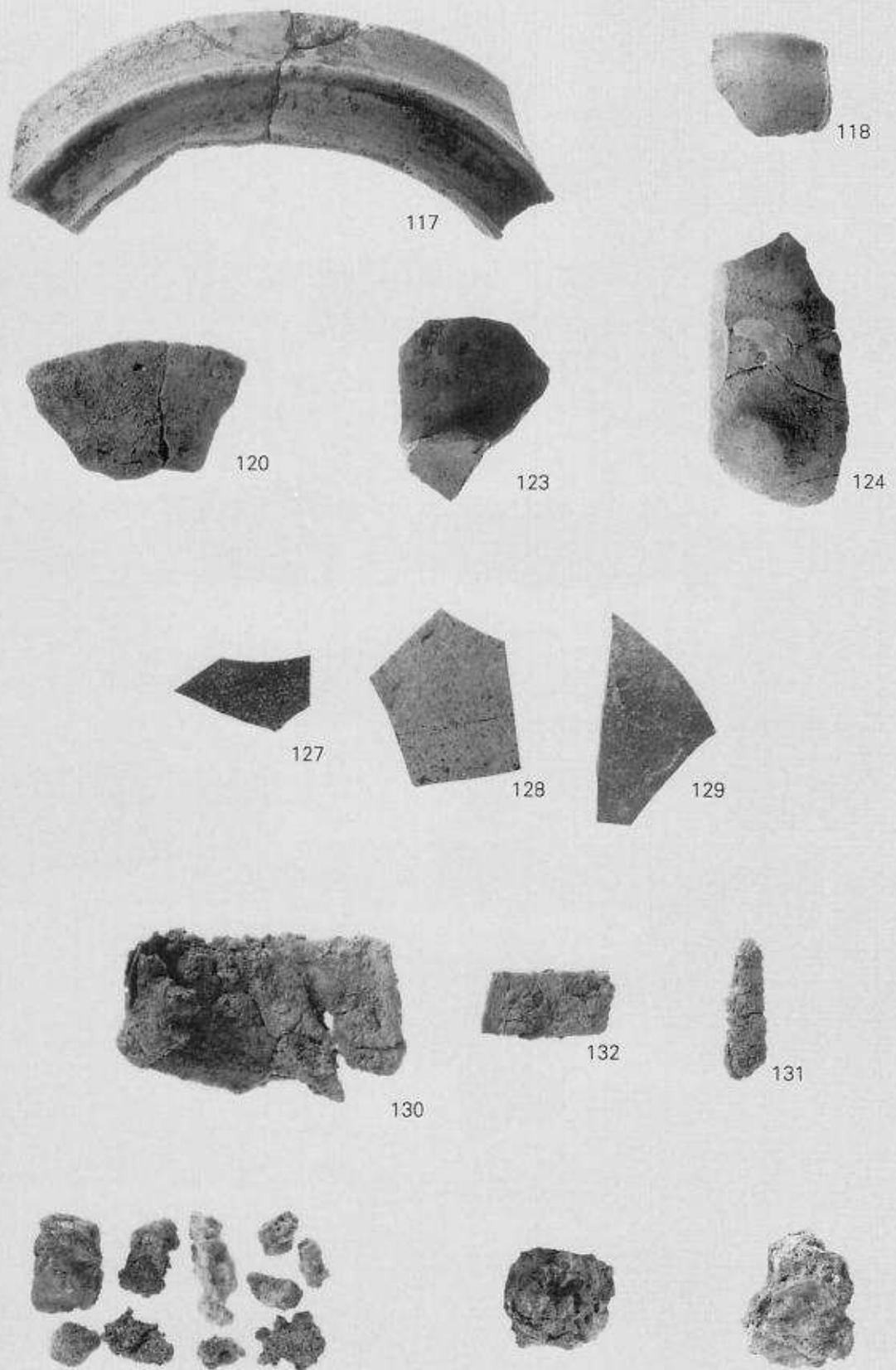
出土遺物 4



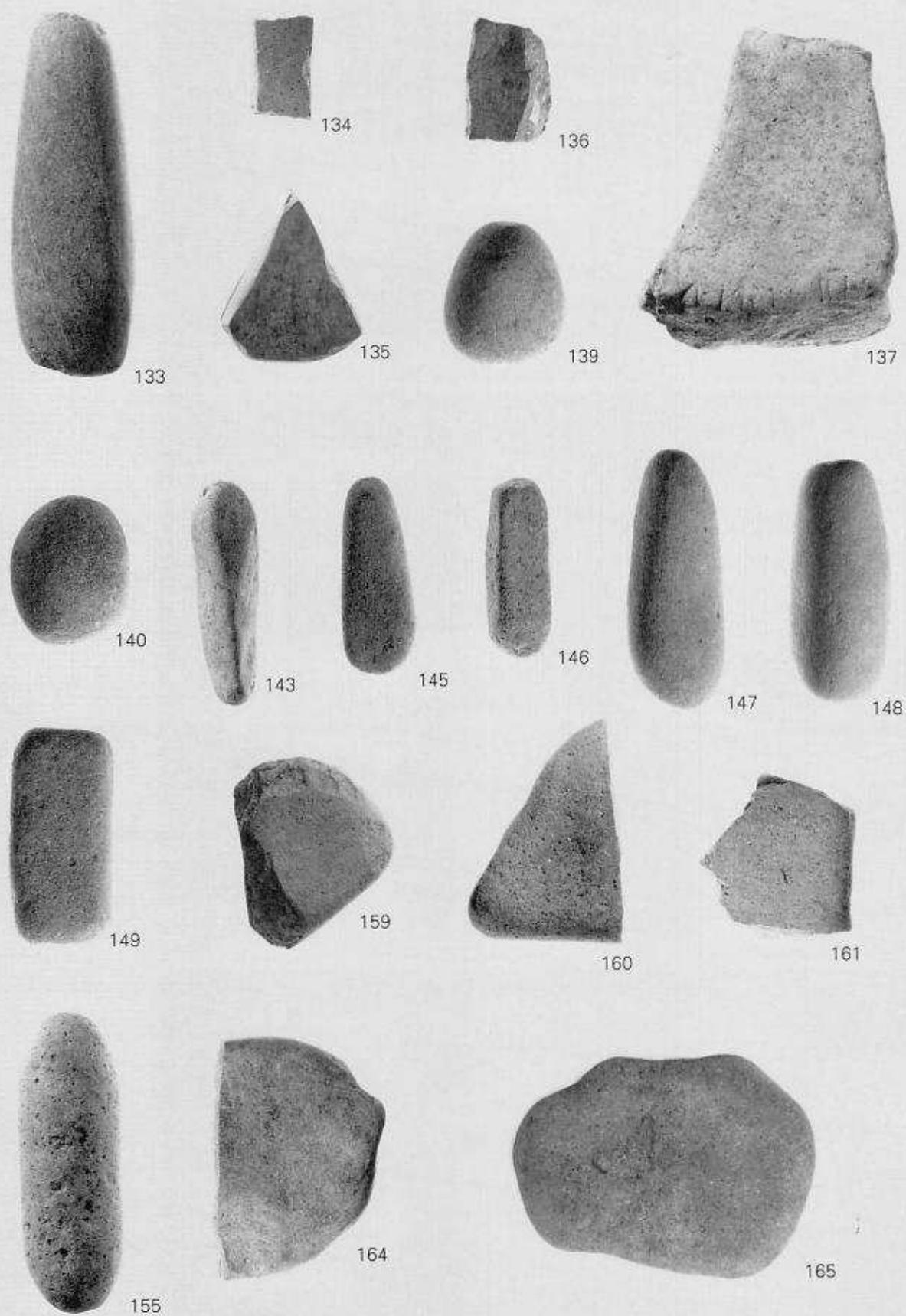
出土遺物 5



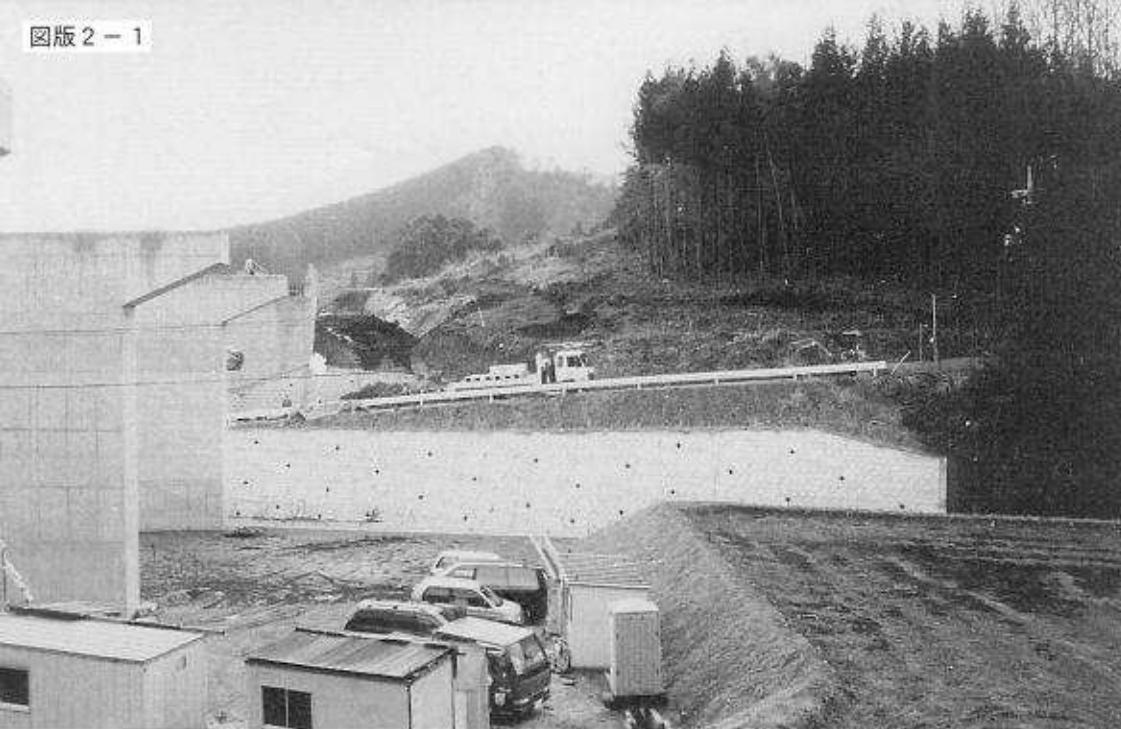
出土遺物 6



出土遺物 7



出土遺物 8



a 遺跡遠景  
(北東から)



b 調査前全景  
(西から)



c 調査前近景  
(南から)

a SB1 完掘状況  
(南西から)

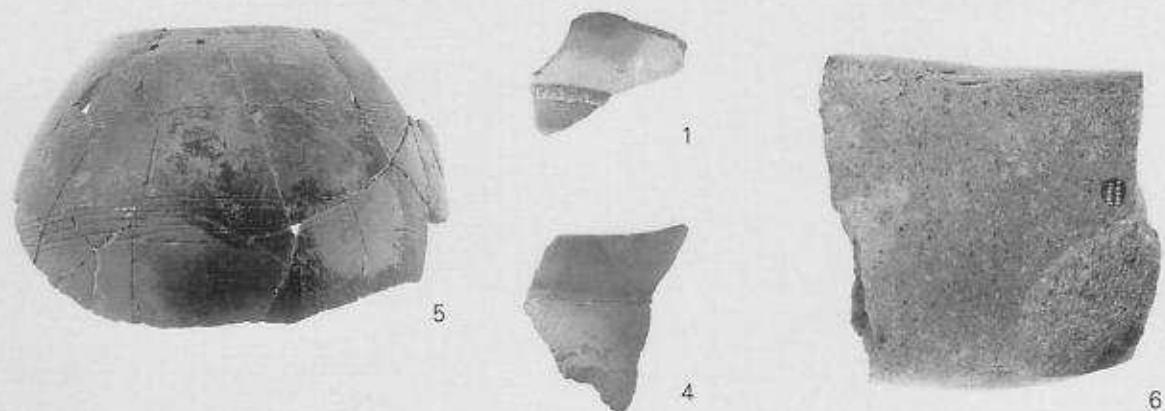


b 同上  
(北から)



c SD-1 完掘状況  
(南西から)





出土遺物 1



作業風景

## 報告書抄録

ふりがな	ぬのかけいせき・おおまきかみいせき							
書名	布掛遺跡・大槻神遺跡							
副書名	一般国道183号(高道路)に係る発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	鍛治益生、伊藤 実							
編集機関	財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
ぬのかけいせき 布掛遺跡	ひろしまけんしょうばらし 広島県庄原市 かわにしちょうぬのかけ 川西町布掛	34210	34210-381	34° 52' 43"	133° 03' 40"	20040531 ~ 20041105	4,200 m <sup>2</sup>	一般国道183号(高道路)に係る発掘調査
おおまきかみいせき 大槻神遺跡	ひろしまけんしょうばらし 広島県庄原市 かわにしちょうおおまきかみ 川西町大槻神	34210	34210-382	34° 52' 38"	133° 03' 33"	20050201 ~ 20050204	55 m <sup>2</sup>	一般国道183号(高道路)に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
布掛遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡15軒 掘立柱建物跡10棟 土坑16基	弥生土器、土師器、 石器、鉄器			・住居内祭祀 ・鉄器生産	
大槻神遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡1軒 土坑1基 溝状遺構1条	弥生土器、土師器、 石器				
要約	布掛遺跡		今回発掘調査を実施した箇所は平成13年度に調査した箇所の南西側にあたり、3段に分かれた状態で竪穴住居跡を検出した。掘立柱建物跡は1×2間など小規模であるうえ、竪穴住居跡が作られていない空白区间に位置しており、倉庫的な機能を有していたものと考えられる。1次調査との関係では、1次調査区と溝状遺構をはさんで遺構のない部分があることから、地縁的・血縁的には近いものの、両集団は母集団とその派生集団と考えられる。					
	大槻神遺跡		発掘調査面積が狭いうえ、検出された遺構が調査区際でその大半が消失していたことから、遺跡の本来の状況については明確ではない。ただし、立地条件としてけっして良好な場所とは言いがたい箇所においても、生活の場所を求めるを得ない状況があったと言えるのではないだろうか。					

財團法人広島県教育事業団発掘調査報告書第20集

**布掛遺跡・大槻神遺跡**

一般国道183号（高道路）に係る発掘調査報告書

発行日 平成19（2007）年2月28日

幅 集 財團法人広島県教育事業団事務局

埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

ホームページ <http://hmaibun.d-net.co.jp>

発行 財團法人広島県教育事業団

〒730-0011 広島市中区基町4番1号

TEL (082) 228-8451 FAX (082) 228-8441

印刷所 朝日精版印刷 株式会社

TEL (082) 277-5588 FAX (082) 277-1143